
クローズファンタジー 蒼の巻 第1章

ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローズファンタジー 蒼の巻 第1章

【Nコード】

N9320X

【作者名】

ケイ

【あらすじ】

これは三つの種族が織り成す繋がり物語。
では、まず最初に蒼き瞳に蒼き翼と尻尾を有した青年とその仲間達の冒険談が記された巻を開くでしょう。
長い長い物語が今、産声をあげる――

蒼の巻 プロローグ ハジマリノトキ

蒼い輝きを放つ巨大な宝石が不気味に照りつける鍾乳洞の中、青年が立っていた。片手にはサーベルを携えて、目の前の蒼海のように澄んだ蒼の宝石を爬虫類のような瞳で睨みつける。

壊すべきだ、と。

なのに体が動かない。金縛りに合ったかのようにサーベルを構えたまま動かない。恐怖に悲鳴をあげる事も震える事さえも許されず、ただただ目の前で静かに、かつ強烈な存在感を見せ付けながら佇む蒼の宝石を前にして……

「これはお前の手に負える代物じゃない」

蒼の宝石の真上には、全身をスッポリと包むように整えられた漆黒のローブを纏った男が俯きながら座っている。その声は少年だったが、少年にしてはあまりにも冷たく機械的な口調。

そして、黒ローブの少年は左手にアメジストのような紫色で透明感のある艶美な太刀を持っていた。

一見、ただ豪奢に仕立て上げただけのような刃物だが、その内側では、まるで太刀そのものが電気を作っているかのように絶え間なく小規模の雷が発生している。

この世のものとは思えない素材で作られた太刀を手に少年は俯い

ていた顔をあげて、こちらを凝視してきた。

その拍子に、今まで見えずに隠れていた顔が映る。

「なっ!？」

黒曜石のような短い黒髪。お世辞にも健康的とは言えない白い肌。そして、感情が全く読めない人形のような瞳。

その顔には、歳相応とは思えないほどに時間を重ねたような風格と疲労が浮き出ていて驚きの余り声を漏らした。そして気付く。金縛りにあっていたはずなのに声を出す事が出来たと。

「君は一体、何者なんだ？」

「それを言うなら、お前の存在の方がよっぽど気になるね」

「何を言って……」

少年の意味深な返しに、うろたえる。

「まあ良いや。名前だけでも名乗っておくよ」「片手で悠々と少年は太刀を持ち上げ、「俺の名前は」雷のような速さで太刀を豪快に振るった。

「
」

少年が名乗ると同時に雷鳴が木霊し、視界がフラッシュユバツクする。

——死んだのだろうか？ 誰かの声が聞こえてきた。

「……ドってば。起きなさいよ」

とても聞き覚えのある女性の声。

ここは天国なのだろうか？ それとも地獄？ 自分の今までの所業の数々を考えれば地獄の底に違いない。

「起きろって言うてんでしょ。寝ぼすけレイド！」

突然も突然。頭上から襲い掛かってきた打撃にレイドと呼ばれた青年は奇声をあげる。

そこは天国でも地獄でも無く、馬車の中だった。

馬車は軽快な音を立てながら走り続けている。

まだ目的地にはついていないようで外に広がる景色からは野生の動植物が顔を見せていた。

「いったいなあ。もう少し寝かせてくれたって良いじゃん」

頭をさすりながら、女性の声の主を睨みつけた。

茶髪のツインテール。身だしなみは動き易さを重視した軽装で、見栄えにも気を配れば見違えるほどの美人になるであろう。だが、整った綺麗な顔を崩して怒りの表情を浮かべる今現在は……

「寝れる時は寝る、食べる時はとことん食べる。全く、お姉さん呆れちゃうわ〜」

女性という概念を捨てた、お世辞にも美しいとは言えない姿と口調である。

「なっ、酒癖の悪い姉さんを持って弟は大変ですよ」

レイドは姉を名乗る相手に向かって、むすつと頬を膨らませながら仕返した。

普段なら、軽く受け流して無視するが今は寝起きという事もあり非常に不機嫌だ。それに良くも悪くも先程の夢の続きを見れなかったのが残念で仕方が無い。

肝心な部分で目覚めてしまうのが夢というものであるのだが絶賛不機嫌中のレイドには、そんな事は一片も考えられない。

「クツ、言ってくれるじゃない」

ツインテールの女性が唇を？みながら、否定しきれない事実顔顔を曇らせる。

「ま、まあまあイリア君。落ち着きたまえ」

そんな険悪ムードの最中、ツインテールの女性を止める男の声が

響いてきた。

レイドと、イリアと呼ばれた女性は声の方向に目を傾ける。

そこにいたのは丸っこい体型の白兔のだが、人間のようには二足で立っており骨格も人間に近い。服も人間と同じもの（子供サイズ）を着ていた。

「一緒にたにすれば」獣人（じゅうじん）」と呼ばれる、その男性は険悪ムードの中でも笑みを浮かべ言葉を紡いだ。

「諍（いさか）いは止めたまえ。心の輝きを濁らしてしまう。そして何よりも怒りに染まってしまった君の顔は美しくない」

決まったと言わんばかりに自分より背丈が二倍はある二人を見上げながら白兔は返答を待つ。

「……はあ」

溜め息のタイミングはほぼ同時。やってらんないと言わんばかりに先程までいがみ合っていた二人は静まった。

「分かってくれたようだね。そう、争いは何も生まない。愛こそが……つて、ちよつと君達。聞いているのかい!？」

徹底した無視に喚く白兔を他所にレイドは窓から外を眺める。

今いる場所は名の知れた鉱山で、坑道なども開発。周辺に街を作るといふ計画まで進んでいたらしい。過去形なのは、今現在は腐敗が進み坑道という坑道が閉鎖。廃坑と化しているからだ。

突如、ツンと鼻をついた匂いにレイドは顔を歪める。

廃坑と化した理由の一つしてあげられるのが、これである。有毒かつ除去のしようが無い原因不明の刺激臭。

「匂うぞ……俺達を甚振って黐（なぶ）り殺そうと付け狙うような腐った匂いだ」

むんずと、今まで微動だにできなかった人影が動く。それは発言とは裏腹に鼻歌でも歌いそうなほどの余裕を見せる女性だった。

「おお、レナ君！ 君からも何とか言ってくれたまえ。僕の心は既にブルーで爆発寸前だよ」

その名をレナという。全身を紫色の鱗に覆われ、背中には広げれば三人は収まるであろう大きさの翼。そして棘を持つ尻尾を持つ、その姿はまるで”竜”。

服装は自身の鱗に同化させるようなチェインプレート。至る所に傷がついたチェインプレートからは何度も戦いを切り抜け生き残ったと言わんばかりの風格が漂っている。

「不発弾のまま、真っ青な海の中で沈んでろ。女垂らしのルーフェンス」

更に別の声がレナに助けを求める白兔を罵倒した。

その声は馬車の手綱を引く方向から聞こえてくる。今までと違うのは、その声が男性でも女性でもなく機械音声という事だ。中性的という訳でもなく、不気味な程に単調な声。

「ロア君まで……ひどいッ！」

シクシクと、わざとらしい声を漏らしながらルーフェンスと呼ばれた白兔は遂に沈没した。

「み、皆さん。あんまり苛め過ぎるのは良くないかと……」

ようやく仲裁の声が加わる。

「ヴィロ教授は分かってらっしゃる！」

ルーフェンスが歓喜の声をあげ俯いていた顔をあげ、声の主の元へトコトコと駆けていった。

駆けてくるルーフェンスを困った表情で見ているのは青年と中年の半ばといった感じの男性。学者肌なのか、周囲と比べると浮くような高尚なスーツを着こなしていた。

馬車に乗っている同乗者はこれで全員。

レイドにイリア、レナにルーフェンス、ヴィロ。そして姿こそ見えないが手綱を引いているであろうロアと呼ばれた機械音声の御者（ぎよしゃ）。

「全く、放っておけばいいものを」

レナが、呆れた素振りを見せる。顔は笑いを堪えており、その場を楽しんでいるのが見え見えではあるのだが、他の面々は気付いていない。

加えて言うならレナが同時に何かの気配を察知した事にも、まだ周りの人間は誰も気付いていなかった。

「茶番劇もそろそろ終いにした方が良さそうだけ。」 山賊”のお出ましだ」

レナの言葉にヴィロ以外の全員が身構えた。

この鉱山が廃れた理由は他にもある。元から、ここに住んでいた山賊が暴動を起こしたのだ。廃坑となった今は山賊の住処となってしまう、無法地帯と化している。

レナの反応が一番早く、その手には既に武器が握られていた。槍と薙刀を割って足したような独特な形状をした武器で馬車の天井を突き抜けそうなほどに長い。

「いつちよ、片付けるとしますか」

お次にイリアが背中に抱えた大筒から木製のロッド（棒）を取り出す。

「あくまで相手は”聖王国（せいおうこく）”の民。護衛が最優先ですが、撃退するだけに抑えて下さい。目的こそ違いますが、事を荒立てたくはないので……」

「分かってる。帝国出身の俺が聖王国の人間に迂闊に手を出せないのは重々承知の上だ」

レイドの言葉を遮って、レナが先に答えた。

「助かります。ロアさんはルーフェンスさんとヴィロ教授の護衛をお願いします」

「了解」

レイドが指揮をとると同時に馬車が止まり、全員が動き出す。

「僕も動くとするか」

腰に携えた剣帯に手を伸ばしながらレイドは馬車から降りた。

馬車から降りて改めて確認したが双方は崖に阻まれ、前と後ろしか逃げ場は無い。格好の餌場にレイド達は飛び込んでしまったという訳だ。しかし、何も対策せずに飛び込んだ訳ではない。

レイドが向かった先は崖の上。急斜面の域を遙かに上回った断崖絶壁を人間業とは思えない動きで駆け登る。

まるで戦場から逃げ出すように駆け登る。

『我は魔 汝は魔力 立ち塞がるものを退ける清浄なる炎よ』

イリアは馬車の前方に大きく移動して立ち止まっていた。その場から一切動かず、まるで絵画を描くようにロッドで華麗に、かつ精彩に空をなぞりながら念仏のように何かを唱えている。

『我らを導く灯火となりて 悪しき者には裁きの鉄槌を』

山賊が崖から飛び出してくる。前方に飛び出していて、尚且つ無防備な彼女は真っ先に狙われた。

それでもイリアは微動だにせず一連の動作を止めない。むしろ来いと言わんばかりの気迫を漂わせながら山賊達には目も暮れずに。

突然、空をなぞるロッドの先端部分から火が現れた。

「術式完成つと」

満足げにイリアが笑う。木製のはずのロッドは何故か燃えない。そして灯された火も衰えることを知らずに、轟々と燃え続ける。

「火傷しない内に逃げた方が良いわよ」

山賊達にイリアは火を灯したロッドを差し向けながら挑発する。イリアを囲むように集まった山賊の数は、おおよそ10人。そのうち2、3人は目の前で起きた超常現象に臆したか、あるいはイリアの気迫そのものに恐れをなしたか腰を抜かして一目散に逃げ出す。

「テ、テメー等。相手は女狐一匹だ！ 何、腑抜けた面してやがる」

勇猛か無謀か。仲間を鼓舞しながら巨漢の男がイリアに向かってナイフを片手に襲い掛かってきた。

「折角、忠告してあげたのに。それと女狐って言ったわね？」

女狐と呼ばれた事に、ピクリと青筋を立てながらイリアは火の灯されたロッドを地面へ向けて突き刺す。

すると周囲一帯を包み、覆い隠すように円形の火柱があがった。丁度、イリアを中心に集まっていた山賊達は逃げ場を失う。

ナイフを片手に襲い掛かってきた巨漢すらも、言葉を失って動きを止める。

「もう逃げられないわよ。煙の吸い過ぎでくたばるか、肉焼きになって灰になるか。好きな方を選びなさいな」

炎で形成されたリングの中心に立っているにも関わらずイリアは余裕の笑みを浮かべ、愚かにも煙が舞う中、口を大きく開けて山賊達に問いかけた。

山賊達は死を前にして降参する。

「懸命な判断ご苦労様」

イリアはロッドを逆さにしてから、火の灯っていない部分で地面に突き刺す。

すると、先程までの炎のリングが嘘のようにジュージューと煙を

あげながら消化されていく。

「……少しの間、眠ってなさい」

瞬間、安堵の息を漏らす暇も与えずにイリアはロッドで戦意を挫かれた山賊達を気絶させた。

一方、レナは馬車の真上を陣取りイリアの一連の行動を眺めている。その顔は気分を害されたと言わんばかりに不機嫌さを醸し出していた。

（魔人……か。相変わらずふざけた力を持つてやがる）

レナが気分を害している理由の一つに彼女が”魔法”と呼んだものがある。

イリアのような存在を”魔人”と呼ぶ。ただの人と何ら変わらな
い外見容姿。華奢で脆く、知恵で生き残ってきた人間のそれと全く
変わらないように見える肉体。

けれど彼らは”魔力”と呼ばれるものを巧みに操り、”魔法”と
して扱う事が出来る肉体の持ち主でもある。

”魔力”とは、自然を作る元素や気体、物質とは全く異なるもの
で空気と何ら変わらず漂っているのだが、空気の濃度が濃くなれば
危険を伴うように魔力も濃度によって、その本質を露にする。

火の元が無かろうと火を作れるし、何処からともなく見えないバケツをひっくり返したように大量の水を降らせる事だって出来る。

これらの現象を人為的に引き起こすのが”魔法”。

術式を作り上げる事で術者の思い通りに魔法を発動できる。

「ふざけてやがる」

今度は口に出してレナは毒を吐く。

魔力は自然の法則を根本から否定する力。それ即ち自然の法則に従って存在する万物にとって害になり得る。

それはレナにとっても例外ではない。比喩でも何でもなく言葉通り有毒ガスを吸っているようなものなのだ。

「……だから俺の前で」

レナは右手一つで独特な形状の武器、じんそう迅槍を持ち上げる。

「魔法を使うなっつってんだ！」

怒りに任せて迅槍を横に凧ぐ。ブンツと鋭い音をあげながら風が唸り鎌鼬（かまいたち）のように標的を切り裂く。

それはイリアに向けられたものではなく、岩陰に隠れて必死に魔力を凝縮させていた山賊に向けられたものだった。

「フン……」

結果に満足したのかレナは鼻を鳴らし更に迅槍を振り回す。次々と崖の裏に隠れていた山賊が、その障害物ごと強烈な突風によって吹き飛ばされていく。

レナのような外見をした種族は”竜人”と呼ばれている。

魔法が自然の法則を根本から否定する力なら、自然の法則に従って最大限の力を。それこそ魔法に匹敵するほどの現象を引き起こす力をレナは持っていた。

だから、魔法が使える魔人を反則とは思わない。とても華奢で脆い彼ら魔人の体では竜人のように自然の法則を最大限に利用するなんて不可能なのだから。

「ん？」

悦に浸っていると突然、近くの岩壁が擦れるような音がした。

気付いた時には、もう遅く馬車の周辺を山賊に囲まれていた。何処からとも無く、次々と次々と虫の群れのように沸いてくる。

「はめられたか」

迅槍を大きく凧いで、今まで以上の突風を引き起こしてやることも考えた。

だがレナは威嚇程度に迅槍を振るうだけで、大技を繰り出そうと思っても躊躇って動けない。崖が崩れたら取り返しがつかないからだ。それに、ここまで近付かれてしまったら迅槍の突風で死人が出る。

(チツ、背に腹は変えられないか)

レナが覚悟を決めようとした最中、

「そこから動かないで！」

頭上、空高く舞い上がり太陽を背に地上を見下ろしながら剣を構える青年の声が響いてきた。

「レイド・コール……」

思わず、頭上高くにいる青年の名前をレナは口ずさむ。その後の出来事はあつという間だった。

時は遡り――

「上手くやってるな」

直角の断崖を登り切ってレイドは下方で展開する一方的とも呼ぶ

に相応しい戦場を眺めていた。

ただ一方的に展開しているのは彼女達が強いからだけではない。

山賊は、こちらが自分達のテリトリー（領域）に踏み込むのを待ちわびていたのだ。地形を把握している山賊達の方が明らかに有利。

特に双方を崖に挟まれた、この地形なら上方から攻め込むだけで簡単に仕留められる格好の餌場。

では何故、こんな不利な状況で一方的な展開が引き起こされたのか。その理由はレイドが崖上で待機していた山賊全員を、ものの数秒で片付けてしまったからである。

（地形に固執し過ぎたのが敗因かな。纏まって集団射撃でも狙ってたんだらうけど、その分、簡単に片付けられた）

レイドは、敵であるにも関わらず山賊達の敗因を冷静に分析する。今となつてはこれぐらいしかする事が無いからだ。

崖の上でボウガンやスリングショットを構えていた、ほぼ全ての山賊。おおよそ20人近くが倒れている。

一部のものは、まだ立ち上がっているが戦意を喪失して呆然と目の前の惨状を見つめる事しか出来ない。

「……さてと」

レイドは、剣帯に剣を収めながら腰を抜かしている山賊の一人に目をつけた。

「く、来るな化物」

その山賊は心底怯えた様子で、レイドを蔑む。いや、正しくはレイドの外見を化物と呼称したと言った方が正しいか。

「ッ……あなた方も一応、聖王国の民である事に変わりはない。ここで引いてくれれば、これ以上の危害は加えない」

「来るなって言っただよ、化物！」

山賊の持っていたスリングショットがバチンと枝をしならせながら小石の弾丸を射出する。ただの小石でも近距離なら一人の頭をかち割れる程度の威力は持っている。

「聞き分けが無いですね」

けれど、レイドには傷一つつけられない。眼前に迫った小石は抜刀の要領でレイドが鞘から引き抜いたサーベルによって真っ二つに引き裂かれていた。

「ヒッ!？」

更に、サーベルの剣撃はスリングショットすらも綺麗に切っていた。腕を突然襲った衝撃に驚いた山賊は狂ったように岩陰へと逃げ出す。

「……?」

細心の注意を払うに越したことは無い。レイドは見逃すとは言っ

たものの、本当に撤退したか岩陰へ逃げ出した山賊を追った。

すると、そこには抜け穴があった。おそらくは廃坑の一部。険しい崖の上に20人も山賊が集結しているのはシュールな光景だと思っただが、どうやらアリの巣のように崖の内部にはトンネルが掘られているようだ。

そしてレイドはある事に気付く。

「しまった」

嫌な予感を察知したレイドは眼下に目を向けた。

予感的中。突然、現れた大量の増援が馬車を襲おうと今にも迫ってきているではないか。

イリアは馬車から大きく離れてしまった為、孤軍奮闘で手が離せず、レイドが目を見張るほどの実力を持ったレナでさえ数の暴力と奇襲を同時にいなすのは難しいようだ。いや、”別国の人間を殺してはいけない”という暗黙の了解が彼女の強過ぎる力を逆に抑圧しているのかもしれない。

ならば、

「そこから動かないで！」

レイドは落ちれば、ただでは済まない高さから飛びながら眼下へ叫びながらサーベルに魔力を収束させる。

——隼の型・鳶雨（とびさめ）

型の名称が脳裏をよぎり、自然と体が構えた。後は標的だけを確実に仕留め、かつ確実に生かし戦闘不能に追いやることだけを考えて剣技を放てばいい。

中には後遺症が残るものもいるだろうが、そこまで細かい事は気にしてはいられない。

太陽を背に映る、レイドの姿はほぼ全ての人間から異様な姿として映っただろう。

何せ、その姿は魔力を使えるのに魔人では無く獣人でも無ければ竜人でもない。魔人のような体毛がほとんど無い身体。だが、その綺麗な肌の至る部分には蒼く光る竜の鱗が浮き出していた。そして、何処か未完成のようにただれた竜人のような蒼い翼と尻尾をレイドはもっている。

『く、来るな化物』

山賊が恐怖と共に放った罵言は、レイドの圧倒的な力の部分にで

はなく、この姿に対してだったに違いない。

サーベルに込められた魔力が限界値まで引き上げられると同時に真下に向けてサーベルを振るう。

すると、雲一つ無い空から大量の雨が降り注いできた。ただのお天気雨のようにも見えるが、その雨粒一つ一つが形を保ったまま、超高速で地面へ落下していく。

ただの雨粒でも、この高度から高速で降らせれば立派な鈍器になる。その鈍器が何百粒と降り注がれるのだから、まるで集団リンチを受けたような激痛が山賊達の体を襲う。

ズガガガガンと鈍い音を何重も奏でながら、レナ達を取り囲んでいた山賊達は全員、突然の空からの空爆に悲鳴を上げ次々と倒れていった。

これ以上の増援は来ないだろうと踏んだレイドは不安定な飛行し
か出来ない不完全な翼で地上に降りる。

「ブラボーブラボー！」

ルーフェンスが安全を確認した後、馬車から降りてレナとイリア、
そしてレイドに拍手を送った。

「いやー、猛牛の如く戦う戦乙女（いくさおとめ）も素敵だね」

「誰が猛牛ですって？」

ルーフェンスの失言にイリアが青筋を立てる。

「は、ハハハ。言葉のあやだよ。そしてレイド君。君の華麗な剣技には惚れ惚れする」

鬼の形相で睨みつけてくるイリアから逃げるようにルーフェンスがレイドに近寄ってきた。

レイドはルーフェンスの褒め言葉に対して謙遜の言葉を述べる。

「ふふつ、その余裕を醸し出すクールな対応も相変わらず素敵だね。今度、夜に一杯かわさな……」

「相変わらずって何ですか。変な誤解を招くような言い方はやめてください！」

レイドは慌てて、ルーフェンスから逃げ出す。

「あれが、聖王国の竜騎士（りゅうきし）、レイド・コールの実力という訳か」

先程までの修羅場が嘘だったように茶化した場を一人、眺めながらレナは呟く。

レナは魔法を巧みに使える魔人を反則とは思わない。けれど、目の前にいるあの存在だけは反則だと断言できた。

蒼の巻 プロローグ ハジマリノトキ（後書き）

余談ですが、御者ぎょしゃは馬車の手綱を引く運転手のような立ち位置の人を指します。馬車に乗る機会は滅多に無いでしょうが、もし今後、馬車に乗られる方が読んで下さった方の中にいらしたら「運転手さん」ではなく「御者さん」と読んであげると、馬車の手綱を引く人達は喜ぶかもしれません。

ではでは、あとがきはここまで。次回もまだ公開は未定ですが、どうかお楽しみ下さい

【蒼の巻】 魔鉱石 1 三種族四大国

第1章 『魔鉱石』

雨に打ちひしがれば、人は弱る事をレイドは知っている。

ただの小石でも投げつけられれば、人は傷つくし、それが何十何百という数になれば大怪我を負わせられる事だってレイドは知っている。

（あの時、僕はどんな顔をしていた）

集中殴打を喰らって気絶した山賊達を邪魔にならないよう、道脇にどけながらレイドは崖上でスリングショットを真っ二つにした時の自分の心境について頭を悩ませていた。

（やっぱり、怒ってた？）

自分で自分に問いかける。

答えは過去として返ってきた。

10年前、レイド・コールがレイド・コールという名を持たず、ただのみすばらしい獣けだものとして生きていた頃の話。

その少年には沢山の肩書き、いや悪名がついていた。

『混ざり物』 『化物』 『ケダモノ』 『悪魔』 『人間の皮を被った怪物』 『蒼き悪霊』 『冷酷非道』 『殺人鬼』

数えていたら、きりが無いほどの悪名を抱えながらも少年は大して気にしていなかった。何せ彼には記憶が無かったのだから。本当の両親も、故郷も、自分の名前すらも。

何もかもが、少年には分からなかった。

だから、自分の存在が周囲にとって忌まわしいものである事が当たり前であり何ら違和感を感じずに生きていた。

「ふふっ……」

そこまで考えて、レイドは嘲笑する。

山賊に化物と言われて腹が立った自分がいた事に気付いたからだ。

冷静に越した事は無いが、仮にケダモノのまま生き続けていたとしたらレイドは化物と言われるのが何も感じず、ただ剣を振るって目の前の障害を排除しただろう。

つまり、良くも悪くも自分が化物扱いされたら怒りを露にする程度には”人間らしくなった”という証拠。

「レイドー！ これくらいにして、さっさと先に進みましょう」

イリアの呼ぶ声がしてレイドは振り返った。

確かに、これ以上は山賊達をどけなくても通行の妨げにはならな
いだろうし時間を取り過ぎると目を覚ましてしまつかもしれない。

「分かった」

白色で青色のラインが幾つも入った特徴的な騎士服から砂埃を払
い、レイドは馬車に乗る。既に他の面子は乗車していた。

「いやあ、しかし三つの種族。それも四大国の人間が揃って一つ馬
車の中というのも珍しいね」

パカロツパカロツと馬の蹄が小石を蹴散らす音が軽快に響く中、
ルーフェンスがしみじみといった様子で呟く。それに、ほぼ全員が
賛同するかのように頷いた。

「へ？ そんなに珍しいことなんですか？」

その中、レイドだけが首を傾げる。何せ妙に全員溶け込んでいる
ではないか。

「おいおい、聖王国ってのは箱庭なのか？」

そういう問題ではないと、レナが鼻で笑いながらレイドを小馬鹿

にする。

「違う。レイドが世間知らずなだけ」

「イリアまで!？」

「まあ、確かに異様な光景ではあるかもしれませんがね」

イリアにまで馬鹿にされ、落ち込むレイドをフォローする形で中年半ばの学者、ヴィロが口を挟んだ。

「ここは聖王国の領土。増してや、”亜人戦争”が終戦したばかりです」

「俺達、別の巢で暮らしてる連中がいること自体が可笑しいっつー話だよ」

レナがヴィロが言うよりも早く結論を導き出した。

「ま、まあそついう事です」

レナの比喩に苦笑いを浮かべながらヴィロがずり落ちそつになつた眼鏡を整える。

(そついえば、詳しい事は知らないけど亜人戦争が10年前に終戦してたんだったな)

レイドは10年前からの記憶が無い。その頃、丁度、亜人戦争と

呼ばれる種族間の偏見、差別から起きた戦争が終戦したらしい。

未だに、戦争の名残は各地に残っており三つの種族、魔人と獣人、そして竜人も他の種族とは関わるのを躊躇う傾向にあるらしい。

「ふつ、これも何かの巡り合わせと考えるべきだろう。そういえば、ろくに自己紹介もしていなかったね」

ルーフェンスが場を締め括り、自己紹介に流れを変えた。

レイド達は同じ馬車に乗り、同じ目的地に向かっているが皆が皆、同じ目的を持って行動しているわけではない。

「とどのつまり、世間話をするような関係では無かった。

「僕は帝国出身の吟遊詩人でね。聖王国には、旅目的で入国したのだが生憎、路銀が尽きてしまってね。そのロア君と共にこの馬車を利用した運送業を営んでいる。ちなみにロア君が御者ぎよしゃで僕がガイドだ。それと僕の名前は長いからね、ルーフェと呼んでくれると嬉しい」

この馬車はルーフェンスとロアの所有物で、山道だろうと何だろうと早く走れるのが売りらしく、使っている馬も他の馬よりも一回り大きくたくま逞しい体つきだ。

「ああ、ちなみにロア君は重度の人見知りなんだけどね。ああやっ

て顔を隠してはいるが実は誰かが話しかけてくれるのを常に期待しているような人間だから、是非とも構ってくれたまえ。とても喜ぶ」
「変な嘘を吹き込むな」

機械音声越しでも怒っているのがハッキリと分かるぐらいに、大きな音を発しながらロアが否定した。

「ほら、こんな風にからかいがいがあるのだよ」

「き、貴様……」

引つ掛かったと言わんばかりに笑いをこらえるルーフェに対し、ロアはこれ以上、反応したら負けと言わんばかりに機嫌を損ね、それ以降はだんまりを決め込んでしまった。

「群れるのは嫌いだが、俺も名乗っておくか」

お次はレナが乗り出した。

「俺の名前はレナ・トレアス。牙竜国^{トライドラ}の出身だが野暮用で、ここに来た。短い付き合いになるだろうが宜しく頼む」

口は悪いが、意外と義理堅い性格なのかレイドに握手を求めてきた。

喜んでレイドは握手に応えるが、何やら故意的に強く握られている気がしてならない。

「では次は私が」

レナの強烈な握手のせいで渋面を浮かべるレイドを他所に自己紹介は続いていく。

「私の名前は、ヴィロ・アルベイン。自由国パロスで魔力に関する研究を続けていたのですが、聖王国の各地にて魔力の大量発生が確認されていると聞いて検分の為に出向いてきた次第です」

ヴィロが丁寧にお辞儀をし、

「そんじゃ、締め括りといきましょうか」

イリアが自己紹介のラストバツターを務める。

「私はイリア・ホーネット。んで、そっちにいるのが……って、何やってんのよ、レイド」

レイドの異変に気付き、イリアが何やら如何わしいものを見るような目つきで会話を中断する。

(やっと気付いてくれたッ……！)

レイドは心の中で救いの手が、ようやく差し伸べられた事に感謝した。

というのも、レナは相も変わらずレイドの腕に謎の重圧を加えており、いい加減レイドにも嫌な汗が滲み出していたのだ。しかも相手は口調こそ男のそれだが女性である。レイドは反抗精神で握り返す事も出来ずに、耐え続けるしかなかった。

「フツ……」

レナが笑いながら、手を離す。

「少し力勝負がしたくなつてな。膝をつけないタイプの腕相撲をしていたんだ……」

(だろ……?)

作り笑いを浮かべながら、レナはあからさまな嘘をつく。そして、同意である事を促すように。いや、脅すようにレイドに耳打ちした。

全く以って、レナの意図が読めないレイドだったが、とりあえず話を合わせないと嫌な予感がしたので、ぎこち笑いを浮かべながらレナに合わせてみる。

「うっ、そうです。レナさんはお強いですから少し力比べをしてみたくて」

心の中では、誰か察してくれと願ってやまないレイドだったが、

「ほら、腕相撲って普通なら膝をついて根っからの力勝負になっちゃうじゃないですか。だから敢えて膝をつかないアンバランスな腕相撲で勝負しようかと……ハッ、ハハハ」

一同がレイドの発言に沈黙する。こんな滅茶苦茶な嘘をついたら怪しまれるに決まっている。

「まあ、確かに種族によって腕力差は大きく変わってくるし、その変なルールの方がフェアに機能するかもね」

「幸か不幸か、イリアが嘘をカバーするかのようレイドのフォロ
ーをしてくれた。目は笑っていないが……、

「あーもう。話が脱線しちゃったわね。改めまして、私はイリア・
ホーネット。武術家だけど”ハイデルヴェルグ騎士団”の魔法騎士^{マジックナイト}
を務めてる。んで、そっちのレイドは同じく”ハイデルヴェルグ騎
士団”の竜騎士^{ドラグーン}で同僚。私達がヴィロ教授の護衛を務めてるって訳

話の軌道を修正しながら、レイドも纏めてイリアが自己紹介をし
た。

ハイデルヴェルグ騎士団というのは、レイド達が所属する騎士団
で亜人戦争の終戦後に勢力を拡大。主に治安維持の為に動いている
が、内容によっては今回のように単身の護衛任務を請け負うことも
ある。

「あの、私は教授というほどの人間では……確かに路銀を賄うため
に魔力研究の知識を広める事はありますが、弟子などは持っており
ませんし」

ヴィロが自身に対する呼び名に違和感を覚えたのか、ハンカチで
額を伝う汗を拭いながら困った顔を浮かべる。

「いえいえ、魔力なんて摩訶不思議なものを論理的に解明しようと
してる時点で凄いいし、ヴィロ教授の実績は聖王国でも有名です。そ
れに、ヴィロ教授だと語呂が……」

「ストップ！ イリア！」

イリアが思わず口に出そうとした言葉をレイドが遮る。

語呂が良いから呼んでるなんて本人の前で言ったら失礼だ。

「聖王国シャルティエのレイド君にイリア君に自由国バーロスのヴィロ教授。牙竜国トライドラのレナ君に僕達、帝国グランベルクの人間か。しかも種族も目的も違うものだらけ。ふふっ、亜人戦争の影響が最も少なかったと言われる聖王国だからこそ形作れる状況なのかもしれないね」

ルーフェンスことルーフェの言葉に一同が頷く。イリアに世間知らずと罵られたレイドも流石に頷いた。

今、レイド達が踏みしめている大地は”クレアシオ”と呼ばれる大陸で四つの国に別れている。

一つ目が聖王国シャルティエ。東南に面しており、騎士団発祥の地で亜種族間での争いは比較的、少ない方で他国との貿易も盛んな国。

二つ目は帝国グランベルク。西に面しており、クレアシオでは最も大きな面積と人口を誇る国。技術力はトップクラスだが亜人戦争発端の地とも呼ばれ、今現在もレジスタンスやテロリスト等の動き

が目立っているらしい。

三つ目が聖王国シャルティエと帝国グランベルクに挟まれるような位置にある自由国バースで、“ギルド”と呼ばれる組織が国を構成されている。中心部という事もあり、様々な種族、人種の人間が入り乱れて暮らしている。

最後に牙竜国トライドラだが、クレアシオの最北端に位置しており竜人が主に暮らす狭い国。人口も最も少なく土地の環境も悪い貧民国で、竜人以外は住めないとさえ呼ばれるほどの地形をしている。

以上、四つの国で構成されたクレアシオだが今レイド達が居るのは聖王国で、これももし帝国の領土でもあろうものなら亜種族間のいざこざで険悪な状況になっていただろう。

簡単な話。どの国も戦争の名残を受けてギスギスしており、他国からの刺激を受けたり与えたりすることを極力避けているのだ。

(そういえば、聖王国以外の話って滅多に聞かないな)

レイドには10年前からの記憶が無い。気付いた頃には聖王国にいて他国には出向いた事なんて無かった。そもそも、記憶があった

としても聖王国以外の国にいたかどうかなんて分からない。

(特に牙竜国の人なんて滅多に見れないし……まだ目的地まで時間もあるようだから聞いてまわってみようかな)

レイドから近い席に座っているのはレナだが近寄りがたい空気を放っているのと、ついさっきの謎の握手の件があるのでまずは最も友好的な雰囲気を漂わせているルーフェに話しかけることにした。

「そうだな。僕は四大国を全て周ったことがあるが、やはり帝国の堅苦しさにはキツイものがあるね。質実剛健なのは良くも悪くも住みづらい。それに比べ、聖王国は機械が普及していないのが不便だが人も土地も価値観も美しいものばかりで色がある」ルーフェは珍しく曇った表情を浮かべ、「帝国は色に例えてしまふなら灰色さ。衝突ばかりが繰り返される土地は荒み、軍が徹底した鎮圧を行わなければ簡単に自滅してしまうような国だよ。だから僕は帝国に定住せず、あちこちを転々としながら旅をしている」

何処か遠くを見るような目で語ったルーフェにレイドは怪訝そうな表情をしたが、内面では次々と好奇心が湧き出てきていた。

「機械というと、あのカラクリ細工みたいな便利な道具ですよ。帝国だと翼が無くても人を乗せて空を飛ぶ乗り物があるとか風の噂で聞いたことがあります」

「飛行船の事かな？ まだ開発途上だが確かに鳥獣人や竜人でなくとも遠くへ飛べる船はある。しかも複数の人を乗せて同時にね」

「おおっ！ 一度、大空を飛んでみたいのが夢だったんです。飛行船か」

上の空で飛行船に憧れるレイドに今度はルーフェが訝しげな表情をする。

「君も飛べるのではないかね？」

ルーフェの問いに我に返ったレイドは苦笑を浮かべながら、自分の翼を広げてみせた。それは鱗で覆われた竜人特有の翼だが、レナに比べると明らかに小さいし虫食いのように穴が開いていて何処か未完成のように爛ただれてもいる。

それだけではない。左の翼は折れたような痕跡があり変な方向に曲がっている事にルーフェは気付く。

「……………」

ルーフェはレイドの左翼が折れている事に関しては敢えて何も言わなかった。言えるはずが無かった。

「ハハハ、僕って魔人と竜人のハーフなんですよね。竜人に比べて翼が小さくて長くは飛べないんです。だから、余計に空を飛ぶ事に憧れるのかもしれませんが」

何せ本人は、大して気にしていないように苦笑ではあるものの笑みを浮かべているのだから。その笑みは無理をして作っているもの

でも自身の翼に対して嘲笑している訳でも無いようにルーフェには見えた。

「ふむ、帝国には優秀な666（ロクロクロク）工房がある。おそらく来年にでも飛行船の普及が開始されるだろうね」

「本当ですか！」

「一般人の手に届くのはまだまだ先になると思うけど」

「それでも待ちます」

再度、上の空で恍惚とした表情を見せるレイドにルーフェは心の中で呟く。

（魔人と竜人のハーフ……か。ここまで長生きしているハーフを見るのは初めてかもしれないね）

ルーフェはレイドが奇妙な姿である原因に薄々気付いてはいたが、その理由がハーフである事を信じ切れていなかった。

亜種族同士のハーフは非常に珍しい。

そもそも亜種族同士が愛し合う事は滅多に無いし禁忌タブーとされている。それに亜人戦争が勃発していた為、時期的にも亜種族が愛し合う可能性はゼロに等しい。そして何よりもハーフは産まれにくいし体が弱いとされている。大半は産まれることもなく事切れるか幼くして死亡する。

なのに何故、目の前のレイド・コールというハーフは、あそこま

で強い力を持ち生き延びているのか？

身体的な問題もさることながら、時期的にもルーフェには信じきれなかったのだ……。

（もし、本当にレイド君がハーフだとしたら相当な地獄を見てきたに違いない）

亜人戦争。種族間の差別によって荒んだ大地の中、彼はどうやって生きてきたのだろうか。

「ルーフェンスさ……じゃなくて、ルーフェさん。どうかしましたか？」

深く考え込んでいたルーフェを、レイドが心配そうな表情を浮かべながら見つめていた。

「いや何、帝国の話をしていたら少し望郷に浸ってしまったようだ」

「ああ、長く話し込んだじゃいましたね。すみません」

「構わないよ」

普段の笑みに戻ったルーフェを見てレイドはお礼を言った。

「あの、お話中に申し訳ないのですが帝国では魔力を利用した道具の開発も薦められているというのは本当でしょうか？」

突然、ヴィロが話の間に割り込んできた。

「……？ いや、魔力を燃料に還元する実験は行われていたらしいが666工房でも未だ魔力を利用した道具は作られていないらしいよ。何せ、実験は失敗したらしいからね」

「やはり……魔力はこの世の理と外れた存在。この世で作られた歯車と？み合う筈も無い。666工房の知名度は自由国にも届いていますが」

ヴィロが一人、納得したように眼鏡を光らせる。レイドは唐突に始まった二人の会話に追いつけず、聞くだけでも精一杯だ。

二人が口々にした666工房とは帝国随一の工房で、グリーディ・パシエン博士という有名な発明家を筆頭に構成されたクレアシオの技術の集合体とも呼ばれる場所。

飛行船も、666工房が開発したようで他にも自然エネルギーを活用した機械なども発明しているらしい。その名は聖王国にも届いており至る所に666工房の印が貼られた道具や機械があるのをレイドも見かけていた。

「しかし教授。魔力に関してはあなたが一番詳しいはず。わざわざ聞くまでも無い結果だろう？」

「いえ、観点の違いは非常に重要です。私もこれでもギルドの人間です。周辺諸国から魔力に関する情報を仕入れ、管理する役目にあります。使い方一つ誤ればどうなるかさえも分からない代物ですから」

その後もルーフェとヴィロは会話を続けていたが専門用語の山で聞く事すらままならなくなり、オマケに暇そうにこちらを眺めていたイリアまでもが魔力に関する会話に加わった為、レイドは逃げるように牙竜国についてレナに聞く事にした。

「あん？ 牙竜国の話なんか聞いたってつまんねーぞ」

相変わらずの威圧的な態度に、レイドは内心、「苦手なタイプ」などと心の中で呟いたが抑える。

「……にしても、聖王国って奴は噂通りのぬるま湯だな」

「え？」

「こういう国は汚点を大きな絨毯で覆い隠してるだけって話だ。やり方が又ル過ぎる」

「何が言いたいんですか？」

「物分りがおつせーな。言うなれば山賊の対処だよ。うちの国なら即刻、打ち首で全員始末する」

レイドは、さも当たり前のように物騒な言葉を口に出すレナに驚愕した。今、彼女が話しているのは紛れも無く牙竜国の話にも繋がっているのだから。

「だ、だからって無闇に人の命を絶つのは……」

「おいおい。その結果がこういう山賊の巣窟、平和な国の裏に潜む闇を作り上げたんじゃないのかよ？」

言い返せない。

「自国に利害を齎す弊害は排除する。勝手に人様の家にあがりこんで、くつろぎやがる虫を叩き潰すのと大差ないだろ？」

「なっ!？」

あまりにも冷酷な例えにレイドは背筋に悪寒が走るのを感じた。レナはレイドの反応を楽しむように、むしろ微笑を浮かべながら立ち上がる。

どうして目の前の女性は、こつも淡々と情けの無い言葉を紡ぎ出せるのか。

それがレイドには理解できない。まるで、別の生き物を見ているような……

「これが、牙竜国の考え方だ」

レイドは牙竜国について何も知らなければ見た事もない。だが、レナの言葉から察するに聖都とは生き方も違えば考え方も違つという事だけははっきりと分かった。

そして悔しいが、言い返せる言葉が見つからないことも痛いほど身に染みる。

「……そろそろ霧地帯か。おい、運び屋。受け取っとけ」

無言になったレイドに何処か満足げな表情を浮かべたレナは、未

だ魔力についての話題に華を咲かせているルーフェに硬貨を投げ渡し、

「おや、こんな中途半端な所で降りるつもりかい？」

「充分。後は単独で動いた方が都合良いんだよ」

馬車の背に配置された扉から飛び降りた。かなりの速度で今も走り続ける馬車からだ。

「せいぜい、足元掬われないように気をつけやがれ」

嘲笑うかのように大きな翼を羽ばたかせながらレナは、そのまま山の何処かへ飛んでいってしまった。廃坑が立ち並ぶ鉱山の中、途中下車で去ってしまう等、正気の沙汰とは思えないが何故かレナなら無事に目的を果たして街まで帰還するだろうとレイドは思った。

そういえば何の為に、ここまで同行したのだろうかとレイドは今更ながらに疑問を抱く。

「牙竜国は貧しい。自分達の国で食料を賄えない牙竜国の民は、よく傭兵稼業として民を他の国に派遣するそうさ。彼女も誰かに雇われて動いているんじゃないかな。僕も詳しい事情は知らないけどね」

レイドの疑問を悟ったのか、ルーフェが水の入ったボトルを口に当てながら喋る。

「しかし、空気が薄くなってきたせいかな。気分が悪い」

若干、疲れた表情を浮かべてルーフェが座り込んだ。

「多分、そろそろ目的地に到着すると思うけど……ちょっと待って。魔力の濃度が濃くなってきてる」

イリアが目を大きく見開きながら、小規模な術式を腕で刻み始める。腕が線を引くことに白銀の糸が宙に張り巡らされていく。

1分足らずで出来上がった白銀に光る魔方陣のようなものを、イリアは手で掬い取り握りつぶす。

すると、馬車の中に魔方陣の破片が散りばめられ、次第に白銀から紫色の破片に変色していく。明滅する紫色の破片を見るイリアの表情は徐々に険しくなり、同じくヴィロ教授も元から細い目を更に細めて見間違いかと眼鏡を何度か掛け直しては目の前の光景を見直していた。

「イリア、これは一体？」

「魔力を探知、視認できるようにする術式。その場に漂ってる魔力の濃度が一定値より高ければ高いほど色が濃い紫色に変色していく」

「つまり……」

レイドの確認を促す問いに、コクリとイリアが頷く。

つまり今、レイド達は濃い魔力が漂う真っ只中にいる訳だ。何が起こっても不思議ではない、それを可能にする力が周囲一帯を囲っていると思うと背筋が凍る。

引火すれば大爆発を起こすガスが漂っているのと同義。いや、使

いよいよにやっつてはそれ以上の天災だっけ起こり得るのだから。

【蒼の巻】 魔鉱石 2 反則

「ちょっと待ちなさいっての。探査も慎重に行わないと地雷を踏みかねないのよ」

ロアが手綱を引く手を止め、イリアが探査に集中できるように環境を整えた。

静寂と、明滅する魔力だけが周囲一帯を包み込み緊張感が全身を強張らせる。

イリアは歩みを止めた馬車から降りた。周囲は魔力に毒されたか、面妖な植物が高地にも関わらず生い茂っている。

右方には蔦が生い茂った崖があり、風に呷られて生き物のように、ざわめく蔦は不気味で仕方が無いし、左方には断崖絶壁が奈落の底へ誘うかの^{いざな}ように顔を見せている。

どうやら魔力の発生源も辿れるようでイリアは出来るだけ広い平地で立ち止まり、天に向けてロッドをかざす。

白銀の糸を何重にも束ねて作ったような極太の閃光が天へ向けて放たれ、途中で花火のように魔法陣が空高くに展開された。それは先程の手順と同じくして砕け散っていき、周囲一帯に雪のように降り注ぐ。

(何だろう。凄く嫌な予感がする)

レイドは、目の前の神秘的にも映る光景を目の当たりにしながら

不安な気持ちが胸を搔き回し始めている事に気付いた。

つい落ち着けずに剣帯へ手を伸ばす。

(イリアの探査が失敗に終わることを恐れているのか?)

——いや違う。

レイドは即座に頭を過ぎった推測を否定した。

では、どうしてこんなにも不安な気持ちが止まらないのだろうか。

(探査の結果、恐ろしい濃度の魔力が検知される事を恐れているのか?)

——これも違う。

今度は少し考えたが、やはり別の理由があるとレイドは確信した。何故かといえば、魔力の濃度が高いと検知された所で剣帯に手を伸ばしても何も出来ないに決まっているからだ。

(そうだ。どうして僕は剣帯に手を……ッ!)

答えに気付いた瞬間、レイドはサーベルを抜刀する。

——騎士道精神・亀の型・相塞あひすい

亀の甲羅の如き鉄壁を作り上げる剣術をレイドは頭で考えるより先に体で動き解き放った。

抜刀した瞬間、真空波が右方の崖と馬車の間を突き抜けていき、崖から放たれた高速の投擲物が粉微塵に粉碎されていく。

スリングショットやボウガンの類ではない。もっと素早く正確に射止められる鋭利な弾丸のようなものが何発も何発も崖の方向から放たれていた。

(どうして、もっと早く気付けなかったんだろう)

山賊の住処は、それこそ毛細血管のように崖の中に張り巡らされているに違いない。

狙撃には打ってつけの蔭でビッシリと覆われた崖、不自然に山道ポイントを走る馬車。そしてイリアが空に打ち上げた派手な魔法陣(目印)。

山賊が見逃すはずではないか。

「イリアッ！」

一人、取り残されて中心に立っているイリアにレイドが叫ぶと、イリアは大丈夫と言わんばかりにロッドを天に向けたまま叫び返す。

「目を塞いでなさい！」

突然、音も無く閃光が周囲一帯を包み込んだ。

目を塞いでいたが、それでも目頭が熱くなってくる程の光線が差し込んでくる。イリアの言葉を信じずに目を塞がなかった人達は酷い目に合っているだろう。

「魔力を視認できるようにする魔法って、応用すればこういう事も出来るんだけど……あっちゃー、ちょっとやり過ぎたかしら」

数秒後、眩しい閃光が止み、苦悶の声をあげ待機していた山賊達が転げまわる光景が映る。

おそらく、イリアは人が視認できる魔力の光量を調節したのだろう。本人も匙加減を忘れるぐらい大幅に引き上げて、さながら閃光手榴弾を数十倍にも強化した目くらましを作り上げたのだ。

「イ、イリア！？ ヴィロ教授達に何かあったらどうするんだよ」

「げっ！？」

レイドの言葉は凶星だったようで、イリアが冷や汗をかき始めた。幾ら警告を促したとはいえ、戦闘慣れしていない人間の反射神経では瞬間的に目を塞ぐことなど難しい。

……と、レイドは心配していたのだが、

「私達なら大丈夫です」

「さあ、ナイト諸君。僕達を守ってくれたまえ」

等等馬車からは応援の声が届いてきており、皆無事のようにだ。

(何だ。僕が心配性過ぎただけか)

安堵と溜め息を織り交ぜながら、レイドはすぐに表情を切り替えて鳶の生えた崖。敵の居城を見据える。

「イリアは引き続き、探査を」

「ラジャー。レイドも気をつけなさい。意外とこいつら、連絡網は侮れないみたいだから」

イリアの忠告にレイドは頷いてから、崖へ駆け走る。

一人一人の実力は大した事は無いが、最初の襲撃といい今回といい狙われやすい行動はしていたものの広い鉱山の中、用意周到に待ち伏せるなんて並大抵の統率力では不可能。

それこそ切れ者なリーダーが裏で手を引いている可能性がある。今まで以上に神経を研ぎ澄ましながら、レイドは鳶で覆い隠された崖へ突撃した。

壁にぶつかって痛がるのが関の山に思えるが、それはフェイク（偽物）でレイドは鳶を引き裂き崖を切り抜かれて作られた廃坑の中へと進入する。

狙撃用を開いた小さな穴から光が差し込み、薄ら暗い暗闇の中でも山賊達が目を塞いでイリアの放った光線に視界をやられていた。

（最新鋭の狙撃銃？ 何でこんなものを山賊が！？）

レイドは訝しげな表情で、山賊達が持っていた狙撃銃を見る。

使い古された様子のない綺麗なフォルムをした狙撃銃には銃器を取り扱わないレイドでも見覚えがあった。

最近、帝国から自由国を経由して輸入された精密射撃と威力を両立させた最新鋭のライフルである。

明らかに鉱山奥深くに巣食う山賊達が手に入れられるような代物では無いはずだが……、

(謎が深まるばかりだな。でも今は考えていても仕方が無いか)

レイドはサーベルの柄で山賊達を次々と気絶させながら、暫く身動きの取れないよう頑丈な蔦を利用して縛っておいた。

——グルルルルルル

「え？」

意表をつくように動物の鳴き声が聞こえた気がしてレイドは、その場から一步後退してサーベルを構えた。

聞こえてきた方向には、ただただ暗闇が広がっている。野生の獣が偶然、通り過ぎただけなのだろうが山賊達はいつも、こんな危ない道を使って移動しているのか。

(このまま放っておくのはまずいな)

放置しておいたら先程の鳴き声の主に喰われてしまうかもしれない。レイドは拘束していた山賊達を開放して、一人だけ表へ連れ出した。茶トラ柄をした猫獣人の男だ。

全員の世話は流石に見ていられないが、聞きたいことは山ほどある。

廃坑から出ると、イリアは探査を終え残っていた山賊を片付けている最中だった。

「ごめんなさい。私が不用意に探査の幅を広げたから」

「いや、イリアは悪くないよ。それより探査の方は？」

「魔力が一部から湧き出てて波みたいに流れてきてる。ここからそう遠くないところに発生源があると思うわ。ただ、詳しい事はウィロ教授に聞いてみないと分からない」

イリアもイリアで、何かしら疑問を抱いているのかレイドと同じような複雑な表情をしていた。

「でさ、その襟首掴んで背負ってる荷物はどなた？ あっ！ もしかして好みのタイプだからお持ち帰りとか？」

「そんな訳あるか！ ……聞きたいことが山ほどあるからね。それに仲間が一人囚われていれば山賊達も迂闊に手は出せないはずだ」

「冗談だって。にしても、あんたって意外と考えることが黒いわよね」

「……？」

イリアが一人で納得している様子を理解できずにレイドは首を傾げたが今はとにかく、この場をさっさと離れ落ち着ける場所を探し、山賊を問い質すのが先決。

それに既に夕刻を過ぎていた。鉱山の中、夜間になれば身動きが取れなくなってしまう。

「あつ、ちよつと待ちなさいってば」

イリアを追い越して、レイドは、やや急いだ足振りでも馬車の元へと向かう。

————アオー————

「ッ!？」

突然、頭上から狼のような遠吠えが木霊してきた。いや、正しくは右方に連なっている崖の上から。それも複数。

考える暇も無く、レイドは納めていたサーベルを再度、剣帯から引き抜くと同時にサーベルで目の前に現れた影を一閃した。

キヤインと虚しい鳴き声をあげながら、崖から飛び降り襲撃してきた四足獣の一匹が真つ二つに引き裂かれ、勢いに任せて左方に広がる奈落の底へ落ちていく。

先程の遠吠えとレイドに引き裂かれた時の鳴き声からして、恐らくこの四足獣達は狼だろう。

血しぶきがレイドの全身に降りかかったが気にする暇も無く次から次へと狼が崖を飛び降りながら襲ってくる。

狼の鮮血を浴びて一歩、レイドはたじろいだ。そして自分が今置かれた状況に改めて気付く。

後方に広がるのは、落ちたらずまらず生き残れるはずがない奈落の底。前方には奇襲を仕掛けてきた狼の群れ。

明らかに今、自分が置かれている状況は不利だ。

(野獣の狙いは気絶した山賊達ではなく僕達だったのか)

防戦一方を強いられ、逃げ場も無い。

そして、今まさに狼が獠猛そうな牙をぎらつかせながらレイド達へと……。

「 p m # \$ % ! ! ! ! 」

その時だ。何か暗号のようなレイドには解読できない言葉が響き渡った。

すると、今にもレイドとイリアを襲おうと飛び掛ってきたはずの狼の群れが全員、クウーンと情けない鳴き声をあげながら、お座りと命令されたように動かなくなる。

「今の内だ！ 馬車に飛び込め！」

聞き間違いのような無い声がレイドの耳に入ってくる。機械音声にも関わらず感情が伝わってくる、この声は間違いなくロアだ。

レイドが全速力で駆け走り、今にも走り出そうとスピードを上げた始めた馬車の後部に跳躍すると同時に狼達が行動を再開し怒ったような、混乱しているようにも思える鳴き声をあげながら馬車を追い

かけてくる。

「イリアー！」

レイドよりも馬車から離れていたイリアは必然的に取り残される形になってしまった。後ちよつとで追いつく所まで迫ってきていたが、動き出した狼達によって身動きが取れなくなってしまっている。

「 p m # \$ % ! ! ! ! 」

再度、レイドには解読できない言葉が山道に響き渡り、狼達が“待て”と命令されたかのように立ち止まった。その隙を逃さずイリアは何とかレイドの手に掴まるような形で取り残されずに済む。

さっきは焦っていたため、誰の声か考える暇も無かったが今度ははっきりと誰の声か分かったレイドは半信半疑で、その声の主に問いかける。

「あなたが、狼達の動きを止めてくれたんですか？」

それは性別すらも判断できない機械音声の持ち主、ロアだった。

「……話は後だ。後方の援護は任せたぞ」

手綱を引きながらロアは静かに告げる。

レイドとイリアは後方から未だに追いつこうと、巧みに駆け寄ってくる狼達を追い払い、気付いた頃には陽が落ちて、不気味に光る月明かりが夜を照らし始めていた。

「おい。侵入者共は始末できたのか？」

「ふっ、どうしてどうして意外と錬度の高い連中を派遣したみたいだな。今のところ、けしかけた部隊は壊滅。しかも鉾山に侵入してきたグループは複数」

そこは金銀財宝の山で彩られた祭壇。いわば山賊達のロッジ（拠点）でヘッド（リーダー）の総本山でもあり、鉾山内の全ての情報網はロッジに集結していた。

聖王国の自警団や騎士団は山賊を馬鹿にしているようだが、彼らの連携と統率力は賊と呼ぶには相応しくないほどに磨かれている。それこそ一個の軍隊と同等な程に。

長年、鉾山を拠点に暗躍していた山賊達の土地勘は非常に優れており、人が住むには厳しい環境が日常的に彼らを鍛え上げる。

「畜生。もつとド派手に忍び込んだ鼠共を駆逐できる武器は無いのか？」

「ふっ、僕という”パイプ（二者の間をとりもつ存在）”を手に入れた舞い上がっているようだな」

「んだと？」

ヘッドである猪獣人^{イノシシ}が、全身を独特な紋様の入ったロープに包まれた細い男の胸ぐらを掴む。

周りで待機していた手下達が、ざわざわと騒ぎ始めた。あるものは煽り、あるものは怯え、あるものはヘッドである猪獣人を止めよ

うと促している。

「……僕に掴みかかる暇があったら、お前達の土地勘とやらで邪魔な連中を始末したらどうだ？ 僕が君達に関与できるのは物資の補給と情報の供給だけと上から決められている」

フードに隠れて顔は見えないが、薄ら笑いを浮かべているのが声色から嫌でも猪獣人に伝わった。

そう、幾ら組織化された山賊であろうとも最新鋭の狙撃銃なんて仕入れられるはずが無いし、このだっ広い鉱山の全てを把握するなんて所業は難しい。

それを可能にする存在が今、猪獣人が掴んでいる不気味な男なのである。

猪獣人にとって、目の前の存在は態度からして気に食わない。今すぐにでも忌々しいベールを引き剥がして八つ裂きにしてやりたい所だが、失うにはあまりにも惜しい存在。

半年前ほど前、ぼそぼそと聖王国の目につかないような悪行で生きながらえてきた山賊達の元へローブ姿の男は現れた。

目的は不明だが、条件付きで男は山賊達に様々な知恵を教え込ませ、一生を使っても手に入れられないような代物を幾度と無く仕入れてきてくれた。

そして、この男自身の実力が山賊達にとって貴重な戦力でもあったのだ。

「フン」

不満そうに鼻を鳴らしながら、猪獣人はロープ姿の男を金銀財宝の山へ突き飛ばす。

デリケートかつ硬質な素材で作られた宝石の山々に突き飛ばされれば大怪我の一つや二つ負いそうなものだが、ロープ姿の男はむしろ楽しむかのように空中で一回転しながら金銀財宝の山を蹴り飛ばし、何も置かれていない足場へ着地した。

金属類を蹴り飛ばしたにも関わらず音は無い。

まるで、クッションを蹴って跳ねたかのようにロープ姿の男は着地してのけたのだ。

「やれやれ。折角、手に入れた財宝に傷をつけようとするなんて僕には考えられないな」

飄々と、自分の体ではなく金銀財宝の安全を心配しながらロープ姿の男は久しぶりに体を動かしたと言わんばかりに、その場でパフォーマンスのように跳ねたり空を裂くような掌打や蹴りをかまし始める。

けれど、あれでもロープ姿の男にとっては準備運動程度のものにしか値しないのだろう。細々とした体からは想像がつかないほどに、あれはパイプと呼ぶには恐ろしい力を備えている。

だから、だからこそ、得体の知れない存在であろうとも猪獣人はロープ姿の男を手離せない。

”特に今は絶対に手離せない戦力”なのだから。

「で、約束通りに”材料”は揃えてくれたのか？」

「ああ、ちゃんと逃げないように地下牢に保管してるぜ」

意味深な例えを使いながらローブ姿の男は、音もなく自身のローブから何かを取り出す。

それは小さな鉄製のロッド。

イリアのロッドが木製の棍棒（こんぼう）なら、ローブ姿の男が携えるロッドは儀式で取り扱われるような錫杖（しゃくじょう）である。

錫杖には竜のような紋様が刻まれており、ローブ姿の男が放つ異様な存在感を相乗効果で引き上げるかのように不気味な光沢を放っていた。

「上出来。それと”魔鉱石（マーナス）”の管理も嚴重に扱ってくれよ。あれが無くなると僕がここにいる意味も無くなる」

軽く脅すように、猪猡人に用件を述べてから、まるで気体のようにローブ姿の男は霧（もや）となって姿を消した。

その頃、夜の帳が降り不気味な静寂が舞い降りた鉱山道の途中で丁度良い休憩地点を見つけたレイド達は焚き火を囲んで休息を取っていた。

レイドは何とか狼を両断した時に浴びた血のりを拭って、今も手

を忙しなく動かしながらとある魔法の調節をしているイリアの様子を伺いにきていた。

舞い上がった煙で、イリアが放った探査用の魔法陣のように気付かれてしまいそうだがイリアの張った結界によって周りからは『岩壁に囲まれた行き止まり地点』にしか見えないようになっていた。

一見、物凄い魔法に見えるがイリアが言うには、魔力の濃い場所ほど魔法の威力も汎用性も数倍、数十倍と増すらしい。それをコントロールするのにも数倍、数十倍の努力と計算が必要になるらしいが……、

「魔法だって万能じゃないのよ」

はあ……と、イリアが心底疲れた様子で溜め息を吐きながら額に垂れ始めた汗を拭う。

イリアの苦労はレイドにも理解できる。曲がりなりにも魔人の血を引いているレイドは竜人の血を引いているにも関わらず魔力を扱えるからだ。

「僕も何か手伝えれば良いんだけど」

「あなたには無理よ。レイドにはレイドの領分があるんだから見張りとして活躍なさい」

「き、厳しいお言葉」

勿論、「魔力を扱える」というだけであってレイドには魔力というこの世の理から外れた毒素に免疫が無ければ、扱う器量も殆ど無

いので使える魔法のバリエーションは非常に狭く狭い。

応用性も無ければ汎用性も無く、火力も無ければ安定性さえも欠けている。これがレイドの魔法に対する才能であり身体的な限界でもあった。

レイドにはイリアのように派手な炎柱を幾つも出したり、魔力を探查するような精密な魔法も使えない。せいぜい自己治癒能力を促進したり、元からそこで起こっている現象を活発化させたりするのがやっとだ。

ただ、魔人と竜人の絶対的な壁を崩したレイドは周りが出来ないような――それこそレナが反則と言いついてしまおうような独自の武術を扱える特異体質の持ち主でもある。

竜人には”龍脈（りゅうみやく）”と呼ばれる自然エネルギー。

気の流れを把握し操る風水師としての能力が備わっていて、レナが迅槍を振るっただけで頑強な岩をも穿つ風の弾丸を放ったのも龍脈を利用したものだ。

まず自然に吹く風を操作し、圧縮、収束、凝縮させ一個のボール（エネルギー弾）を作り、作ったボールをラケット（迅槍）で狙いたい場所に撃つといった寸法だ。

高地に位置する鉾山には強風が吹き荒れ、風を集めて操るには最高の立地条件だっただろう。

龍脈の元を辿ると風水という言葉が出てくる。

風水とは占いの一種でクレアシオでは単なる言い伝えとされてきたが、空、陸、海、他様々な環境に強い適応力を持った竜人達は、風水を実現してしまう程に卓越した”土地利用術（とちりようじゅつ）”を会得するまでに至ったのだ。

だがしかし、何時から？ どうやって？ どんな因果が重なって竜人が龍脈を実現できるまでの力を得たのかは分からない。

何故、自分にこんな力が備わっているのかはレイドにも分からないし、きつとレナにだって分からないだろう。

生まれたての子馬が必死に立ち上がり、いつか縦横無尽に平原を駆け回れるようになるのと同じで、本能として竜人は皆、生まれた時から力を身につけ、その力を操るために自分を磨き続けているのだから。

だがそれは義務付けられたわけでもなければ、必ず磨かなければいけないという訳でもない。

そもそも、竜人が龍脈を持っていることに理由が必要だろうか？ともレイドは考えたが哲学的な思考は自分には似合わないと思いを切り替えた。

「皆さん。お疲れでしょうが、この辺りで一旦、状況整理をしたいと思います」

レイドは結界内にいる全員に焚き火の近くに集まるよう呼びかけた。

結界を完璧に張り終わつたのか、くたくたに疲れ果てた様子でイリアが焚き火の近くに集まり、次に馬車の点検をしていたルーフェとロア、そしてヴィロがやってきた。

ちなみに捕まえた山賊の一人は未だに気絶して眠っている。そろそろ起きてもいい頃合なのに、何故か起きてくれないのが少し不安だったがレイドは全員が集まったのを確認して軽い会議（ミーティング）のようなものを開始する。

「ルーフェさん。この銃について何か分かりませんか？」

レイドは、こっそりと山賊からくすめ取っていた最新鋭の狙撃銃をルーフェ達の前に置く。

「おや？ どうして僕に銃器について聞くのかな？」

ルーフェが、面白そうなゲームに誘われた子供のときのような目をしながらレイドに聞き返した。

「いえ、護身用でしょうがルーフェさんの服の膨らみが気になって、それ、拳銃ですよね？」

レイドの言葉にイリアが驚いた様子でルーフェの服に何かしら違和感が無いか観察し始める。

一方、ルーフェは恐れ入ったという表情をしながらホルスターに収められた拳銃を取り出した。

「いやはや、完璧に気付かれないよう隠していたつもりだったんだが、流石に戦闘のプロには見抜かれてしまったか」

「いや、戦闘のプロというのは流石に買い被り過ぎかと。もっと僕が冷静な判断をしていれば都合よく事が進んでいたはずですし」

レイドは判断が何度も遅れてしまったことに負い目を感じているのか若干、顔を俯かせる。

「ふふつ、君がいなければ山賊の集団に囲まれた時、僕達は無事じゃなかったかもしれない。それは誇っても良いと思うけどね」

「でも……」

もっと早く気付いていれば、山賊達に後遺症を残すかもしれないような大技を繰り出さずに済んだかもしれない。

言いかけた言葉を呑み込んで、レイドは話の軌道を戻す。

「ゴホン。とりあえず、この狙撃銃について何か分かりませんか？ ルーフェさんを疑っているわけではありませんが、帝国出身のようですし運び屋でもあるので仮に山賊が密輸ルートを使っているなら……」

「有り得ない」

狙撃銃を手に取って満遍（まんべん）なく観察していたルーフェが、キツパリと断言した。

「僕は帝国を離れた身だから現地の状況は詳しく把握していないが、これが666工房の造った狙撃銃であることには間違いない」何処か切羽詰った険しい表情をしながらルーフェは続ける。「666工

房の技術力はクレアシオでは最高峰と呼ばれているが、今現在の技術は他の3国と比べると10年から20年も先をいつているらしい。考えてもみたまえ。そんな大層な技術を他国に。しかも、正規のルートを送らずに輸出させたらどうなるか？」

ルーフェはパワーバランスの均衡が崩れてしまうと答えを言い放った。

例えばの話。売れば一生、贅沢暮らしが出来るような高価な宝石をスラム（貧民街）の子供が手に入れたとする。

それが、貿易商や物の売買に長けた人間ならともかく大金にありつく機会が全く無いスラムの子供には、どうやって宝石を売ればいいのかなんて分からないし、宝石に秘められた価値自体、理解できるかどうか怪しい。

そして、宝石の扱い方を理解できない少年が宝石を持ち続けたらどうなるか？

欲に目の眩んだ集団がこぞって暴動を起こすに違いない。

「自分達の手元にしか置けない程に帝国の技術力は発達し過ぎたのだよ。だから不用意に他国に技術の提供はしない」

「待て、ルーフェ！　あまり帝国に関して喋り過ぎるのは」

ロアが早口でまくし立てたが、ルーフェは首を振って尚も続ける。

「ロア君。僕は帝国から離れた身だよ。それに僕が帝国から離れて早数年。その間に帝国がどれだけだけの進歩を遂げたことか……。僕が

語る内容も時代遅れに違いない」

ルーフェは、狙撃銃を再三見てからレイドに投げ渡した。

「それなんだけどね。モデルやタイプこそ自由国や聖王国に公式で出回っている品だけど、機能は一段階、上の代物かもしれないよ」

「ええっ!?!」

淡々と狙撃銃の観察を終えたルーフェにレイドとイリアが驚きの声をあげる。ヴィロも口には出さなかったが、内心驚いている様子だ。

レイドは、すぐさま投げ渡された狙撃銃の隅から隅まで調べるが自警団や騎士団に使用を許可されているそれと何ら変わらない。

「いやー、単なるフェイクの為に一世代前の狙撃銃を真似たのかもしれないけどね。実際に撃つてみないと分からないが、反動が元来のものより抑えられているし、”レーザーサイト”も――」

「またも専門用語の山となったせいで、訳が分からなくなるレイドであった。」

「——とにかく問題なのは山賊達がこんな代物を入手できてしまっていることだよ。場合によっては国家問題にも発展するかもしれない」

「そうですか。有難うございました」

（状況整理するどころか謎が増すばかりだな……）

レイドは顔を曇らせながら、手元にある狙撃銃を眺める。

（最初に山賊達がけしかけてきたとき、奴らはスリングショットやボウガンを使っていた。あれは、単に僕達を舐めていただけなのか？ いや待てよ……）

「もしかして、山賊は何かを隠してる？」

突然、呟いたレイドにイリアが目を丸くして尋ねる。

「とーとー？」

「いや、最初に山賊達が持っていた武器はまさに山賊らしい武装で構成されていた。にも関わらず今度は、どうやって入手したのか分からないような狙撃銃で僕らを出迎えている」

歯車に潤滑油じゆんかつゆを塗ったかのように、レイドの推測は滑らかに勢い

を増していく。

「僕らを徹底して始末するつもりなら、最初の時点で狙撃銃を携えておけば良かったんじゃないか？」

「聖王国に狙撃銃の所持を悟られないよう、表立って使用したくなかったんだろうね。だが、それだけだと不自然な点があがってくる」

ルーフエの言葉にレイドは頷く。

「二度目の襲撃で急に抵抗が本格化してきた。」別に僕らの目的は山賊の殲滅ではない”のに誤解される何かがあった……」

単純に、仲間がやられたからレイド達を警戒視して本気を出したとも考えられるが、それではあまりにも情報の伝達が早すぎる。

突然、歯車の動きが止まり、レイドは言葉に行き詰まる。後少しで何かの答えを導き出せるような気がして、もどかしくてしょうがない。

「それについてなんだが、お前達は狼の群れが襲ってきたことも視野に入れているか？」

無言で静観していたロアが合間を見計らったかのように口を開いた。(顔は完全に隠れている為、実際に口を開いて喋っているかどうかは見当つかないが)

「そういえば、ロアさんは狼の群れを操作しましたよね」

「如何にも。旅の最中で手に入れた――、」

「単なる小銭稼ぎの芸当に過ぎないんだが、ある程度なら動物に命令信号を送って操ることが出来る」

一瞬、躊躇うかのようにロアが口ごもったが顔も見えず、機械音声で喋っているせいでレイドには何を思ったかは全く悟れない。

「ただ、命令信号というのは野生の動物には効き辛い傾向にあるんだ。しかも複数を相手にするととなると、な」

「じゃ、じゃあ、あれって一種の賭けだったの!？」

危うく、狼の群れに命を奪われかけたイリアが驚愕の声をあげる。

「あくまで”野生の動物”ならな。俺の使った命令信号は、元から受けた命令を逆算して跳ね返すものだったんだ」

ロアの付け足しに、あつ、とレイドは声をあげる。

「そういえば、あの狼の群れ。僕達を最初から狙って動いていた……」

「ふっ、気付いたか」

行き詰まっていたレイドの頭に新しい潤滑油が注がれていく。

「野生の狼なら、無防備な弱い人間を狙う。僕やイリアじゃなく馬車を直接襲っても良かったはずだし、気絶している山賊を狙うのが最もベストな選択だ。でも……それじゃ、まさか」

「そのまさかだ。あれは”軍用犬”。いや正しくは”軍用狼”(ぐ

んようおおかみ()か？ とにかく、山賊が狼を利用していたのは間違いない」

ジョーク交じりの訂正をしながら、ロアが結論を述べる。

軍用狼達は本能に忠実な行動を取らず飢えを満たすことよりも優先して山賊達には目も暮れず、レイド達を襲ってきた。

「ますます、山賊達の正体が掴めなくなってきたわね」

イリアが内心、信じられない様子で呟く。

「でも、これで一層、山賊が何かを隠し通そうとしてる可能性は濃厚になったかもしれない」

後、一押し情報があれば……と、未だに昏睡しているかのように寝ている山賊を恨めしく思いながらレイドは歯噛みする。

「……あ、あの〜」

今まで会話の輪に一切、入ってこなかった声に全員がピクリと耳を傾ける。

そこには、おどおどしい素振りでも会話に入れず困った表情を浮かべるヴィロが立っていた。

いつから、レイド達の会話に加わろうとしていたのだろうか？ それを考えると非常に心が痛むので、レイドは考えるのを後回しにする。

「ヴィロ教授？ 何か気になる点でも？」

「いえ、もしかしたら山賊達が隠そうとしてるものが何か分かった気がしまして……」

いつもに増して小声になっているヴィロを見ていると明らかに放置された拳銃、傷ついているのが全員に伝わってくる。だが、気にすべき部分がそこではないという事も全員に伝わっている。

「皆さんは、”魔鉱石”^{マーナス}と呼ばれる鉱石があるのをご存知ですか？」

ヴィロの言葉にイリアとロア以外の全員が首を傾げる。

「ちょ、ちょっと待ちなさいってば。魔鉱石って、ただの噂話とかおとぎ話の類でしょ？」

イリアが眉をかしげながらヴィロに問い返す。その顔には明らかに信じていないと書かれていた。

「それが実在するのですよ。魔力を生成し放出する鉱石がパワースポットという名目で各地に転がっているんです」

淡々と告げるヴィロに、イリアは目の前の学者の頭が壊れたのかと内心、疑った。けれど、完璧に否定できない情報を自分が掴んでいるせいで半信半疑に陥る。

魔法というオカルトを更に逸したオカルトが存在する。それがイリアには信じられない。信じたら負けな気さえする。

「イリアさん。探查結果を復元できますか？」

無言で、イリアは探査用に散らした魔法陣と同じものを、小型の地図のように縮小化して展開する。

透明感のある円形の魔法陣には波のように、ある一点から拡がる紫色の光が波のように浮かんでいた。イリアは、その魔法陣の最も色の濃い部分に指を指す。

「確かに、この一点から魔力が流れ出してるようにも見えるけど、ただの気のせいじゃないの？ やっぱり魔鉱石が関与してるなんて信じられないわ」

イリアは魔鉱石マーンナスという言葉に覚えがある。ただ文献を漁っていたら見つけただけで実物を見た訳でもなければ、それが実在するなんて信じてはいない。

魔鉱石——それは、この世の理も、法則も、仕組みさえも無視する魔力を生成しクレアシオ全体に漂っている魔力の奔流と謂われる鉱石。そして、魔力によって形作られた別世界へ繋がる門ゲートとさえも呼ばれている。

だが、これは全て想像上の話で文献も曖昧。そもそも、別の世界があるなんてにわかには信じ難いし発見者の名前が、どの書物にも記載されていないのが論より証拠だった。

「これを見てください」

断固として信じないイリアを見兼ねたヴィロが懐から三枚の写真を取り出した。

一枚目は生い茂ったジャングル。遠めに見ると分かるが、オアシ

スを巨大化したかのように砂漠に覆われているのに中心部だけがジャングル地帯になっている。

二枚目は、そのジャングルの内部を撮ったのか不気味に変色した動植物達が顔を見せている。並々と生い茂っているにも関わらず、それら全てに何処か生気が感じられない。この世のものとは思えないと解釈した方が正しいか。

そして三枚目。

「これが魔鉱石とでも？」

イリアが怪訝そうな表情で写真を眺める。

そこには、翠色に輝く大きな鉱石が映されていた。直径300cmはあり、外周は、まるで鉱石を守るように生えた紫色の蔦によって囲まれている。

「ええ。これは自由国の領土で発見されたものなのですが、周囲10kmに相当する範囲で動植物が異常な成長を遂げ、今まで砂漠だった大地がジャングルに変貌しました。私は、その原因を確かめる為に、ある方達とジャングルに侵入。この魔鉱石を発見しまして…」

「やっぱり、信じられない。写真が捏造されてる可能性だってある」

ピシヤリとイリアはヴィロに写真を返して否定する。

「イリア？」

否定するイリアの表情に陰りを感じたレイドは、顔を覗き込もうとした。刺々しい性格の彼女だが、他人を乱暴にあしらう様な行動を取った姿は見た覚えが無い。

「……でも、そうね。依頼も依頼だし、実際に確かめてみないと分からないもの」

途端、陰った一面が嘘のように、普段のマイペースな表情に戻ったイリアは長い髪の毛を掻きながら復元していた魔法陣を閉じる。

「確かに、魔鉱石なんて使い方さえ分かれば森羅万象を扱えるでしょうからね。世間から隠し通して自分達のものだけにしようとする理由にはなるけど。——ねえ、もし本当に魔鉱石があったとして、ここにいる山賊達はいつから、こんな濃度の高い魔力に浸かってる事になるのかしら？」

イリアの推測に全員が、まさかという顔を浮かべる。

「予想的中。レイドッ！」

「ああ！」

レイドはイリアと共に急いで、未だに眠り続けている猫獣人の山賊の元へ駆け寄った。

急場しのぎでこしらえたテントの中で捕縛していた山賊は青白い顔をしながら、やはりというべきか眠り続けている。

「死んではいない」

イリアは慎重に、山賊の額と胸に手を当てる。幸い、息はあったようだが――

「助かる見込みもない」

冷やかに、レイドに結論を言っただけのイリアだが内心では歯を食いしばるような想いをしていた。

ずっと猫獣人が目を覚まさない原因は魔力の多量摂取による中毒症状であろう。

毒素を溜め込んで、溜め込んで、ボロボロになったその体を魔法で癒すなんて出来ない。

傷を癒す魔法をかけても、結局は魔力を、その体に注ぎ込むことになる。

結果は同じ。

むしろ衰弱した体に止めを刺して死を急がせる手向けになるかもしれない。

かといってそれだけでは、

(助けられない理由にもならない)

イリアは、あろうことか術式を展開し指を猫獣人に向けながら呪詛のようなものを唱え始めた。それが毒であると分かっているにもかかわらず、彼女には目の前の命を助けられる自信があった。

「何を？」

訝しげな表情で聞いてくるレイドに視線で「黙ってて」と伝えながらイリアは精密な魔法陣を描いていく。

「あるべきものは あるべき場所へ 万物に干渉せしめる魔性の水

よ 元ある泉へ帰りたまえ」

まるで、超高速の雷を撃たれたかのように猫獣人の体が魚のように飛び跳ねた。

そして、一筋の閃光が猫獣人の口元から飛び出し、イリアの口元へ吸い寄せられていく。

その正体は魔力。イリアは魔力を水の流れに例えて猫獣人が溜め込んでいた魔力を吸い取っているのだ。八子の針に刺された体から毒素を抜くように。

——やがて、もう充分だとイリアが魔力の流れを形作っていた閃光を手刀しゅとうのように断ち切る。

「まっ、後は獣人ならではの生命力に頼るしかないわね。私、医者でも……何でも……ない………し」

はあ………とイリアが溜め息を吐き倒れ込み、咄嗟にレイドが抱き抱える。

(そういえば、イリアだけ動きっぱなしだったな)

「少し塩梅を忘れかけてたわね。私の事は気にしないで」

と言いつつも、自分の力で立ち上がれる気力も損なっているのか腕の中でグツタリと頂垂れているイリアを心配しながらレイドは生氣を取り戻したかのように寝息を立て始める猫獣人を見やる。

「ふむふむ。お楽しみのところ、お邪魔してしまっただかな？」

突然、テントの外から聞こえてきた声に、背筋の凍るような感覚を感じながらレイドは振り返った。悪意のこもった笑みを浮かべながら、ルーフェが立っていた。

「違いますから！」

「おーおー、必死に否定する辺りが、また微笑ましいね。いや本当、良い所でお邪魔をしてしまったようだ」全く反省していない様子でルーフェは「冗談はさておき、眠っていた皇子様が起床なさったみたいだよ」

目を細めながらレイドの先にいる相手を見つめていた。

レイドが、ルーフェの視線を追うと重たそうに眠りから覚め、瞼をあげた猫獣人がこちらを眺めているではないか。

「俺を助けてくれたのは、その嬢ちゃんか？」

猫獣人がレイドとイリアを交互に見ながら、酷く疲弊した、しゃがれた声で問う。

「あら、もうお目覚めなのね。全く……、感謝しなさいよ」

照れ隠しを含めながらイリアは鼻を鳴らし、もう大丈夫だと言わんばかりにレイドから離れ一人で立ち上がった。

「その様子だと私達が、何であなたを助けたのか。もう分かっているみたいね？」

「……………頼みたいことがある」

「は？」

猫獣人が、頂垂れた耳をあげながら啞然とするイリアの目を見る。

「お前達の欲しい情報を今から語ってやる。だから耳の穴かっばじって、一文字も聞き漏らさずに聞けって言ってんだ」

焦っているようにレイドとルーフェにも視点を忙しなく移動させながら猫獣人が一方的に語りだした。

イリアが、何か言おうとしたがルーフェが腕をイリアと猫獣人の間に挟んで静止する。

「ふふつ、その兄さんは分かっているじゃんか。ここは霧地帯ミストと呼ばれてる。魔力の溜まり場だ」

ゴホツゴホツと辛そうに咳き込みながら、猫獣人が一息つく。

「何年前になるやら。亜人戦争が終わって、ようやく安息の地を取り戻せたと信じて坑道を掘ってた連中が魔力の溢れ出す泉を掘り起こしちゃったのは……………」

「それってまさか……………」

「魔力に汚染されて人が住めるような場所じゃなくなった。結果、鉾山は閉鎖。聖王国の為に働いてた連中ごと追放するような形でな」

宙を見ながら、猫獣人は感傷に浸るように語り続ける。

「仕事も住処も失った鉱夫達は汚れ仕事に手を染めるしかなかった。俺もその一人で……この周辺一帯を統率してるヘッドに拾われたんだが……ヘッドは良い人だったあ。常に俺らを導いてくれて、いつか必ず元の生活を取り戻そうと。責任を全て自分だけで抱え込んだまうような人で……だのにあいつらが来てから全部変わっちゃった」

「あいつら？」

レイドが猫獣人の言葉に目を細める。

「半年前ぐらいか。俺らのような底辺と違って、本物のマフィアみたいな得体の知れない連中だった。緩衝地帯にある俺らを狙って交渉を持ちかけてきたあいつらは、ヘッドを取り込んで物資の補給を取引に鉱山の採掘を再開するよう俺らに命令してきたんだ。誰にも悟られないよう、ひっそりとな」

最後まで言わねば気がすまないと言わんばかりに猫獣人が続ける。

「それ以来、ヘッドの性格も変わって、どんな汚れ仕事でも厭いとわないうようになっちゃった。採掘を続けていくうちに魔力の汚染も酷くなつて、そして遂に見つけちゃったんだよ。あいつらが求めている“魔鉱石”とやらを」

「ッ!？」

「頼む……ここにいる連中は全員、人質みたいなものなんだ。ヘッドの目を醒ましてやってくれ。あの道化……クツ、ギアッ! アアアアアアアアアア!」

突然、息が落ち着いてきていたはずの猫獣人が呻きだし捕縛していた縄を強引に引き裂いて苦しそうに自身の首に手を絡め始めた。

「な、何で!? どうして!? 魔力は、ほとんど吸収したはずなのに!？」

イリアが猫獣人の手を抑えながら慌てふためいて叫ぶ。しかし、猫獣人は神経毒でも撃たれたかのようにヒクヒクと痙攣しながら、ゆっくりと息を引き取った。

「人質”か”」

レイドは混乱して真つ青になるイリアを、もう動かない人形のように頂垂れた猫獣人から引き離す。

猫獣人は最初から自分が死ぬのを分かっているレイド達に何かを託したのだろう。だから、こちらの質問に一つ一つ答えず一方的に言葉を連ねていった。

「ふむ。せめてもの手向け。鎮魂歌レクイエムでも送ろうかと思っただが、まだ死んではいないみたいだよ」

ルーフェだけが余裕のある表情を浮かべたまま、猫獣人に手を向ける。

レイドは、すぐにルーフェの言葉を理解し猫獣人の安否を確認し始めたが、イリアの方は疲労とショックが重なったせいであんぐりと口を開けたまま、頭でもおかしくなったのかとルーフェの言葉に耳を疑っている。

「おそらく、溜め込んでいた毒素（魔力）を一気に吸い出した反動で気を失っただけだろう。すぐに手当てをしてやれば、命に別状は無いと思うけどね」

イリアをテントの隅で休ませながら、レイドはルーフェと共に応急措置を施した。

流石は吟遊詩人と言うべきか。多方面から知識を取り入れ、幾つもの国を転々としていただけあって騎士団として基礎的な手当ての仕方を学んだレイドよりも、手際良く応急措置を進めていく。

「そういえば、ルーフェさんは大丈夫なんですか？」

ふと、ルーフェも獣人であることを思い出してレイドがルーフェの顔を覗き込む。だが、その顔はいつもの余裕を醸し出しており、疲れた様子は微塵も見せずに猫獣人の体をゆっくりと横にして応急措置を締め括った。

「ああ、似たような場所を通ったことがあってね。慣れない感覚だが後、数日はもつだろう。心配しないでくれたまえ」

一仕事やり終えて満足したようにマイペースに喋るルーフェを見ていると、自然と励まされているような気になってくる。

「アハハ。頼りになります。ただ、無理はせず、気分が悪くなったらすぐに言っして下さいね」

「ふふつ、最悪の場合は、その眠っていた王子様と同じように僕もイリア君に目覚めのキスを……」

「ねえ、レイド……そいつ、私の代わりに一発殴ってくれないかしら？」

精神的に参っていたイリアも流石に聞き捨てなら無いと言わんばかりに、そこはかたなく殺意を込めた頼みをレイドにしてきた。

「おおっ、もしかしてイリア君が僕を罵りながら殴打で起こしてくれるのかい。それもまた良いかもしれないね」

「二度と起きないぐらい強い殴打でなら喜んでしてあげてもいいわよ」

ああ、それも良いかもしれないと変態じみた発言を連発するルーフェと黒い笑みを浮かべながら段々、冗談と本音が入り混じり始めたイリアの仲裁に入るため、レイドは自分の身を犠牲にして間に入る。

「二人ともストップ。ルーフェさんも、あんまりイリアをからかうのはやめてくださいよ」

「な、何よそれ！ まるで、私が悪ふざけにまんまと釣られて弄ばれてる子供みたいじゃない」

「ええっ！？ いや、違うって。ち、違います。断じて違いますよ。イリアさん！ これは言葉の綾あやでして」

仲裁に入るところか、状況を険悪化させてしまったレイドは、何故だか更に状況が悪化する爆弾が投下されそうな気がして、背後にいる白兎獣人こと変態兎にも気を配る。

「おや？ 別に僕はからかってもないし悪ふざけもしていないよ」

それはつまり、今までの言葉が本気である事を意味しているわけ
で、

「だが、イリア君の代わりにレイド君に叩き起こされるといっても
悪くない。呆れながらも、何だかんだ優しく起こしてくれて朝ごは
んの支度を」

瞬間、その場の空気が絶対零度の如く凍りついた。

ルーフェだけが妄想を膨らみながら破廉恥な笑みを浮かべ、グ
ーグーと再度、寝息をたてはじめた猫獣人のいびきが更に混沌とし
た空気に拍車をかける。

「ストオオオopp！ ていうか、これ以上話をややこしくしない
てくださいよ！」

悲痛の叫び、もとい悲痛の突っ込みを入れたレイドによって、そ
の場は一段落を終えた。

「ところでレイド君。彼が言っていた言葉の中に気になる名称は無
かったかい？」

「え？」

ルーフェが真剣そうな眼差しで試すようにレイドを見据える。レ
イドは何ともスイッチの切り替えが早い人だと思ったが、猫獣人が
伝えた言葉を思い出してみる。

「彼、この鉱山を何と呼んでいた？」

「確か、霧地帯……あつ！」

レイドは自分の発した言葉に目を丸くした。

引っ掛かっていた何かが外れて、頭の巡りが高速化していく。出来れば自分の考えを否定したい。でも、それ以上に疑惑が沸いてくる。

『……そろそろ霧地帯か。おい、運び屋。受け取っとけ』

レナは最後に何と言っていた？

『ここは霧地帯と呼ばれてる。魔力の溜まり場だ』

レナは去り際に、猫獣人と同じ名称で鉱山の名を呼んだ。これは、まるで最初から危険な地帯であることを知っていたようではないか。そして、

『後は単独で動いた方が都合が良いんだよ』

途中下車で一同の前から立ち去った。

「まだ、彼女が黒と判断するには情報が少な過ぎます。——でも、警戒しておいて損は無いでしょっかね」

けれど、レイドはまだ決め付けるには早いと考えた。

ルーフェは首を縦に振りながら、静かに目を瞑ってフルートを奏で始める。その音色を聴いていると、今日一日の疲れが抜けていくようでとても澄み切っていて心地よい。

レイドはルーフェの奏でる音色が木霊する中で、魔鉱石の危険性。山賊を影で操っている何者か。あらゆる可能性を試行錯誤しながら明日に向けて準備をする。

準備を終えたら、イリアの様子を見に行きたいとレイドはテントの外へ目を向けた。

まだ、先程の獣人が助からなかったかもしれないというショックが残っているかもしれない。

「準備も程々にして、イリア君の様子を見に行ったらどうかかな？
女の子を待たせるのは、あまり感心しないよ」

サーベルの手入れや、防具の点検等を行っていたレイドにルーフェが声をかける。

「で、でも……」

「フフ。僕達も旅には慣れているのさ。ある程度なら君の装備の点検だって出来るよ。ほら早く」

まるで背中を押すようにルーフェが放った言葉にレイドは頭を下げながらテントの外に出た。

「おやおや、あんなに駆け足で探しに行くなんて」

ルーフェは微かに見えたレイドの必死な表情に、ほくそ笑みながらわざわざ背中を押す必要も無かったかと作業に戻った。

【蒼の巻】 魔鉱石 3 魔力（毒）（後書き）

書いてる側も励まされるようなキャラを書きたいと思って思いついたのが実はルーフェだったりします。自己陶醉になってしまいかもしれませんが、今まで書いた作品の中ではルーフェのキャラ性が一番気に入ってたり。

次回は別視点からもお話が展開され始めます。

もし、クローズファンタジーがお気に召しましたら次回も読んで下さると嬉しいです。

【蒼の巻】 魔鉱石 4 動き出す影（前書き）

レイド達こ一行が動いている最中、他の場所でも動きだす者達がい
た。

【蒼の巻】 魔鉱石 4 動き出す影

同日 20:00

強風吹き荒れる崖の上でロープを靡かせながら、竜の紋章が描かれたロッドを振りかざす男が立っていた。

空を飛んだり、魔法で空間移動テレポートでもしない限り登れないような崖の上にいるロープ姿の男には生憎、翼も無ければ空間移動など言っただけ高貴な魔法も無い。

「来い。ヴェイン！」

ならば、どうしてロープ姿の男は崖の上に佇んでいるのか？ その答えは轟々しい音で羽ばたき雄叫びをあげながら崖の目の前、いわば足場のない空に現れた。

巨大な二本の翼、強靱な鱗に覆われたその体躯。二本足は鳥の鉤爪をより鋭利に研ぎ澄ましたかのような形をしている。

それは竜人ではなく、まさしく本物の竜。分類するなら飛竜ワイバーンと呼ばれる存在。

「良い子だ」

ロープ姿の男が手を差し伸べると、飛竜は翼で仰いただけで強風が巻き起こる巨体を子犬のように摺り寄せる。

その首を撫でてやりながらロープ姿の男は満足げに微笑んだ。雲さえも突き抜けて天空を優雅に飛び回る飛竜の背に乗れば、断崖絶壁の頂上に居座るなど容易い。

「フフ、じゃれているところ申し訳ないんだけど」

ともすれば、他者の声が聞こえるのは非常に不自然で、飛竜と戯れていたローブ姿の男にとっては耳障りな事この上ない存在が現れた。

それは竜人でも鳥人でもない。増してや、ローブ姿の男と同じように飛竜の背に乗って崖の上までやってきたわけでもない。移動という手順を省いて、この場にやってきた。

一人が収まるぐらいの赤い煙が立ちこみ始め、一人の少年が煙から飛び出してきた。その姿を忌々しげにローブ姿の男は睨みつける。

その姿は、ローブ姿の男も充分なほどに不気味な雰囲気を漂わせていたが、それすらも凌駕するほどに異様だった。

ローブ姿の男が不気味と表現されるなら、煙から飛び出してきた少年は奇抜で、奇妙で、妖艶な雰囲気を漂わせている。

ピエロのような格好をしたその少年は赤色のスーツを纏い、服装とは対照的な青色の髪、顔には変てこな三日月のような模様を刻み込んでおり、不敵に笑いながらローブ姿の男と飛竜を眺めていた。

テレポート
空間移動。

どんな影響も受けずに、この世の法則を無視して別の場所に移動する能力。いや、厳密に言えば能力ではなくて、少年が使用している”魔法”である。

一步、間違えれば出口の無い壁の中に埋まったり、体の半分だけが取り残されたままになる空間移動は魔法の中でも禁忌とされ、そもそも使おうと考える人間すらいに等しいのだが目の前の少年は、その空間移動を何度も何度も使用しており、失敗した光景をローブ姿の男は一度も見えていない。

というよりも、この少年が今までに空間移動以外の手段で現れた瞬間を見たことが無かった。

「……何の用だ？」

「いやー、計画に支障が出ると困るじゃない。こつやって、わざわざ報告の為に出向いたって訳」

「話せ」

飛竜から手を離し、ローブ姿の男が不機嫌な様子で少年に面と向かって立つ。

「僕が折角敷いたオモチヤが台無しにされちゃったんだよね。一体のお人形さんとは”糸を切る”ハメになっちゃったし」

残念そうに少年は無邪気な表情を浮かべる。それはオモチヤを壊された子供そのままであり、不自然な点はないように見える。

「ああ、でも”糸を切った”のは僕だし。はあ、危うく猫のおじさんに君の名前をバラされるところだったよ」

道化師プルチネイラ、実名であるかどうかはローブ姿の男にも分

からないが目の前の少年には、外見に相応しい通り名がついていた。

「無駄に情報を密告^{リーク}される前に記憶を消してあげたけど、バラされるぐらいだったら口封じの為に体をバラしてあげたほうがよかったかな？」

無邪気で純粹で、にも関わらず狂気に溢れたその言葉は道化師たる所以か、ただの演技なのか、ローブ姿の男には検討もつかなかったが、

「相変わらずの悪趣味だな」

おそらく、この少年の姿も仮初なのだろう。

プルチネイラの不愉快極まりない言動にローブ姿の男は聞かなければ良かったとそっぽを向く。

「それと、もう一つ情報がある。まあ、そっちにも行き届いてるだろうけど鼠が数匹、セツティング中の舞台に紛れ込んだみたいだね」

「牙竜国の竜人に聖都の騎士団か。チツ、”生贄^{ニヒ}”まで逃げ出したというのに」

「飛び入り役者は僕としては大歓迎なんだけどね」

まるで演劇のような例えを使ってプルチネイラは心から愉しそうに口元を歪める。

、プルチネイラにとってはまさに劇のようにしか映っていないのだろう。

鉱山内で行われている衝突もアトラクションとして愉しんでいるに違いない。

「ふふっ、早速、一匹目の鼠が勇猛果敢に飛び込んできたみたいだよ」

「そうか……ヴェイン」

ローブ姿の男は待機させていたヴェインという名の飛竜に声をかけると、その背中に跳躍する。

「ああ、魔鉱石の方向にも鼠が数匹紛れ込んでるみたいだね。そっちは僕に任せて」

豪！と手の平に炎を灯しながらプルチネイラは飛竜の背に向けて叫んだ。

「ふふっ、少女の脱走劇というのも興味深いけど」

ローブ姿の男が手を振るのを確認してからプルチネイラは表現し難い歪んだ笑みを全面に浮かべながら、

「まだ、舞台は開幕すらしていない。レイド、君が何処まで強くなつたか僕に見せてよ」

遠くでもあり、近い場所にもいる一人の青年の名を呟きながらプルチネイラは赤い煙に巻かれて屋気楼のように姿を消していった。

【蒼の巻】 魔鉱石 5 脱兎

——コッソ

——コッソ

——コッソ

「もう、何なのよ」

荒い息をあげながら、背中に弓と矢筒を。そして胸にたぐり寄せるように大事にお札を手に持った少女が、今にも蠟が溶け切っつて消えてしまいそうな微かな松明を頼りに地下通路を走っていた。

ひたすらに、見えない敵から逃げて逃げて、何処に逃げればいいのか。何処が安全なのか。そもそも今は何処にいるのか全く検討のつかない少女だったが、それでも走り続けていた。

「おい、どっちにいったか分かるか!？」

「ッ!」

「手分けして探せ。さもないとヘッドの頭が沸騰しちまう!」

背後から聞こえてきた声に少女は頭を抱えて隅に縮みこむ。これなら、大人しく幽閉されてたほうが良かったのでは? そう思えるぐらいに長い逃走劇を繰り返していた。

少女の名はコトネという。何処にでもいる、極平凡な、むしろ非

凡なぐら^{リアル}いに日常を送っていた彼女にとって眼前で起こる全ての出来事^{オカルト}が非現実^{オカルト}にしか見えなかった。

ケンタウロスのような—— 獣人と呼ぶべきなのだろうか？

液晶画面の中で動き回るような存在が目の前にいる。

”この世”ではなく”あの世（二次元）”に飛んできてしまったのではないかと頭が混乱する。

（と、とにかく現状打破しないと。落ち着きなさい私）

コトネは普通の学園生活を送っていた少女であり、外見容姿からスタンダードそのものであり、特にこれといった特技も見栄えも無いベーシックな女の子である。

そんな極平凡で、むしろ非凡なぐら^{リアル}いの日常を送っていた彼女が、こんなSFファンタジーチックでアクションシーン満載の中、冷静に逃げ回れているだけ強運と呼ぶべきか。

いや、こんな不幸でハチャメチャで無茶苦茶な目に遭っているのは自分ぐら^{リアル}いだろうし、むしろ悪運なのかもしれないとコトネは心の中で溜め息を吐く。

……もしかしたら夢のように死ぬような目に遭えば元いた場所に戻れるのでは？とも考えたが現実味のある感覚には、それを躊躇わせる何かがあった。

そもそも、死ぬような目に既に何度も遭っているので戻れるなら既に戻っているとコトネは首を振って現状に目を向ける。

「こっちにいたぞ！」

ビクリと背後から響いてきた怒鳴り声に驚愕し、近くにあった松明を咄嗟に倒す。

「うおっ！」

横倒しになった松明は狭い、空調の効いていない通路を絶つように炎が舞い上がる。

幸運にも炎は絶えず燃え上がり、追跡者の移動を妨げた。逃走者の行動に驚いたのか追跡者は一瞬、たじろいだがお次は逃走者が驚く番だった。

何と、パチパチと軽快な火花をあげる松明を強引にへし折って距離を詰めてきたのだ。

その姿は、神話や伝承、ロールプレイングゲーム RPGに出てきそうなワーウルフ（狼男）にしか見えない。

コトネをぎらつく瞳で睨みつけながら鋭い爪をあげて捕まえようと走ってくる狼男を振り払うために幾つにも分岐する地下通路を小刻みに走る。

コトネは、ちょっと運動神経が高いぐらいで、特にこれといった特技は無いし走る速度も大したものではない。

大の大人、しかも見るからに速そうな狼男を振り払うなど、まず不可能な訳なのだが、それでも今まで逃げ切っているという事実は

存在する。

「畜生。ちょこまかと逃げ回りやがって」

背後から響いてくる悪態には目も暮れず、コトネは更に右へ左へ迷路の如く枝分かれしている地下通路を走っていく。

狼男は、コトネの二倍は早い速度で追いかけてきているが、その早さが仇となり曲がり角に到着する度に方向転換の為に立ち止まらなければならぬ。

結果的に両者の速度は同列になる——訳が無かった。

狼男は、壁を足場にして曲がり角で方向転換する手間を省き、むしろスピードをあげながら超人じみた勢いで追いかけてくる。

おそらく、コトネは手加減されていたのだろう。

人間のそれとはかけ離れた身体能力を持ってますよと言わんばかりに肉体美を見せ付ける狼男。

そもそも追跡者より逃走者のほうが地の利を理解しているなんて事もなく、コトネが疲れきって転ぶまでグルグルと回るように同じ場所を走らされていたに過ぎなかったのだ。

付け加えて言ってしまうえば、狼男ともう一人。別の男がコトネを見つけたと連絡しあったことから分かるように相手は二人。華奢な少女を捕まえるなど本気を出せば造作も無いというのに弄ばれていたに過ぎない。

ダンツ！と、地を踏み鳴らしながら背後に迫る狼男に驚いてコトネは転んだ。

標的を失った狼男は宙を掴みながらコトネを超えた遙か先で、ようやく地に足をつく。

偶然、コトネが転んで狼男が頭上を飛んでいったわけではない。かといってコトネが計算して取った行動でもない。

(そのまま、3メートル後方にある右の通路に迂回してください。進むと階段があります)

ここに連れて来られてから度々、天からの助言のような声がコトネには聞こえていた。耳ではなく脳裏に直接伝わってくるような形で。

それこそ自分の頭が壊れたのではないかと疑ったが声の通りに動いた結果、今の自分がいる。

ずっとではなく不定期にしか聞こえてこないのだが、助言の言う通りに立ち回れば上手く事が進んだ。

脱走した時だって、この助言を頼りに動いたらすんなりと逃げられたのである。

(後、10、325秒で左通路から二人目がやってきます。早くしてください)

細かい秒数まで導き出す助言の声に、すかさずコトネは立ち上がり言われたとおりに右の通路に入った。

左の通路から別の影がコトネを捕えようと手を広げてきたが、すんでのところで腕の間を掻い潜り走り抜ける。

やがて、助言通りに階段が見えてきた。転げ落ちそうになりながらも、二段飛ばしで階段を駆け下り長い廊下へと躍り出る。

そこには、牢屋が幾つも幾つも立ち並んでおり、砂埃が立ち込める不衛生空間の中に人がいる気配は無いに等しい。

コトネは一瞬、元の牢屋に戻ってきてしまった？　とも考えたが自分が幽閉されていた場所には他に誰もおらず、今いる場所よりも遥かに狭い廊下だった。

「(どうして、あなただけ別の部屋に閉じ込められてたのか。不思議でならないんですが、まあ、外部の人間がいたのは好都合です)」

二重で反響するように脳裏と耳越し両方に伝わってくる音がコトネを困惑させる。

「ああ、肉声でも聞こえる距離に来ましたか。どうか、その南京錠を施錠せじょうしてはくれませんかね？」

意識していなかったただけなのか、脳裏に伝わってきた声にそもそも判別という要素が含まれていなかったのか。

詳しいことは分からないが、今までの声と同一であろう人物が”肉声”で独り言のようにコトネに語りかけてきた。その声は、薄暗

い牢屋の奥から聞こえてくる。

「あなたが、ここまで私を誘き寄せたの？」

「誘き寄せたといえば誘き寄せましたが……時間がありません。あの、キメてる山賊達に再度捕まるか僕を連れてここから逃げ出すか後、0.5秒できめてくだ——」

「分かりました！ 分かりましたよ、はいはいはい！」

有無を言わせぬ0.5秒にコトネはノーなんて言える筈がない。

急いで近くの壁に立て掛けられている無駄に豪華な見た目の鍵を南京錠に刺し込み、黒板を爪で引っ掻くよりも嫌な音が地下通路に響く。

一方通行だったら山賊に階段を降りてこられて終わりだが、ここまで自分を連れて来た声の主である。

きつと活路を見出してくれるに間違いないと信じるしかコトネには精神的にも、物理的にも、現実的にも道が無い。

ガチャリ——

もう後戻りは出来ない。そもそもリターンなんて出来ない状況下だが何だか、この牢屋の鍵を開けたら人生における分岐点が全て一新されるような気がした。

「ありがとうございます」

ゾクリ、と疲弊したような声が薄暗く空気の悪い牢屋の奥底から

聞こえてくる。

それはのそりのそりという効果音が似合いそうな動きをしながら、氷付けになったかのように硬直するコトネへ近付いてきて――

「やっと……出れ……た」

「えっ!?!」

コトネはその異形を咄嗟に抱きしめた。何せ、最後の力を使い果たしたかのように”それ”はコトネの体へ倒れこんできたのだから流れて抱きしめるしかない。

(いど……も?)

改めて、コトネは声の主であろう”それ”の姿を凝視する。

”それ”は幼い男の子の姿をしていて、山羊のような顔と獣毛を纏った異様な……コトネには化物のようにしか見えない。見えないのだが、今まで見た異形の中では最も、か弱く儂く、目の前のヒト?を助けたいと思う気持ちがあつとコトネに芽生えてくる。

プツリと途絶えた声。微かに伝わってくる吐息。意識は無いはずなのに、何処か安堵の表情を浮かべるその姿。

はっきり言って拍子抜けだった。

もつとこう、恐怖の塊のような得体の知れない存在だけれども頼もしい強さで山賊達から自分を救い出してくれる。

そんなダークヒーロー的な存在を心の奥底でコトネは期待していた。

折角、ここまで来て助言の主を助けたというのに、最早、力を使い果たして手の中で動かなくなっているそれに助けを求められない絶望感がコトネの身を包み込む。

すぐにも山賊が階段を駆け下りてきて、この男の子ごと自分を捕まえに来るだろう。

もしかしたら、逃がそうとした罰で酷いことをされるかもしれない。絶望感と恐怖心が絶妙に絡み合い、唯一の希望を追って決死の想いで脱走劇を繰り広げたコトネをどん底へと突き落とす。

——なのに、なのになのに今手の中にいる男の子を放って一人逃げるなんてことはコトネの正義感が決して許してはくれなかった。

というか、罪悪感が自身を蝕んで殺す気がしてならない。

それが例え化物のような姿をしていて何を考えているのかさえ分からない得体の知れない存在であったとしても、だ。

「あーもう。どうにでもなっちゃえ！」

腕の中で動かぬ男の子。恐らくコトネより2、3歳下の少年を担いだまま逃げ道を探す。

(お、おもっ……)

5歳程度の少年少女を持ち上げるのとは訳が違う。

痩せ細った体型がせめてもの幸運か。重い荷物を担ぎ上げながらコトネは胸元にたくり寄せていたお札を思い出す。

肌身離さず、コトネが捨てずに持ち続けていたそれは淡い輝きを放ちながら、こっちだと言わんばかりに矢印マークの閃光を地面に奔らせていた。いつから光っていたのだろうか？

「、っ……」

急かすように明滅する光の矢印を前にコトネは一瞬、躊躇ったが背後から狼男の怒声と階段を駆け下りる声が響いてきて選択肢を失った。

逃げる。

それが今の自分に出来る最善の選択であり、一つしかないルートであると理屈ではなく直感で確信してコトネは足を走らせる。

【蒼の巻】 魔鉱石 6 待ち合わせは噴水広場で

一方その頃――

蒼翼をたなびかせながら、半竜半魔人のハーフの青年。レイドは疲れて地べたに横たわりながら夜空を眺めているイリアを見つけた。

「不自然のパノラマ」と呼ぶべきかしら

空を眺めながら、レイドの姿に気付いてイリアが呟く。

結界で大空を包み込んでいるせいだろう。まるで空は波立つ水面のように光景を歪ませ、水中の中にいるかのような錯覚に襲われたが、今はもう慣れてしまった。

「もう、調整とか補強とかしなくても大丈夫なの？」

レイドは寝転がって静かに佇むイリアに訊ねる。夕方から夜にかけて、まばたきをする暇もなくイリアは結界に一片の穴さえも開かないよう細心の注意を図りながら魔法陣を構築していった。

それは構築し終えた後でも同じ事で、点検作業のように内側から結界を満遍なくチェックし、今も続いているはずなのだが……。

「ああ、それならヴィロ教授が交代してくれたの。細かい魔法なら得意みたいよ」

攻撃的な魔法は使えないらしいけど、と付け足しながらイリアは奇妙な星空を眺め続ける。

そういえば、猫獣人の治療にあたっていた時もイリアは結界には目も暮れず魔力の吸収に全力を注いでいた。その間もヴィロが結界の管理を担っていたのだろう。

「魔法があれば、この満天の夜空に新しい”本当の星”を作るなんて事も可能かもしれないのにね——」

「え？」

「覚えてる？ 私達が初めて会った時のこと」

小さく呟いた言葉を誤魔化すかのように、イリアは立て続けにレイドに顔を向けた。どっこいしょっとおじさんのような一言で立ち上がり、強張っていた筋肉を解すように盛大に伸びをするイリアの前にレイドは過去を振り返る。

「ハハ、あの日は本当に色々あり過ぎて困ったね」

「あー確か、ふてくされてるあんたを私がイジってたら港町の不良連中に絡まれて……」

暫く、イリアとの思い出話が続いた。

まるで、昔に戻ったかのような感覚に襲われる。

「そういえばあの時のあれ。まだ大切に持ってるの？」

「えっ、勿論持ってるに決まってるじゃない。騎士団本部の私室に大切に保管してるわよ」

「ハハ、意外とイリアも女の子らしい趣味持ってるよね」

「何ですって！」

イリアと初めて出会った日、それは約9年前に遡る。燦々と夕陽が眩しく照りつける聖都。親子連れが遊びの場として利用し、恋人達は待ち合わせに利用し、小動物達が水を飲みに来てくれる公共の噴水広場。眩し過ぎるほどに明るい空間。そこがレイドとイリアの初めて会った場所だった。

「……………」

親子連れが遊びの場として利用し、恋人達は待ち合わせに利用し、小動物達が水を飲みに来てくれる公共の噴水広場において、そんな明るい雰囲気とはどう考えても合致しない陰鬱な表情をした少年が木陰のベンチで寝転がっていた。

その少年は蒼く歪な形をした翼に地面に垂れ下がった尻尾を有している。幼き日のレイドの姿だ。

噴水から微かに飛んでくる水滴が程よく体を冷やしてくれて心地よい。

しかし、それでもレイドは悶々としながら、「ある人を待ち続けている」。

時折、「そんなに暗い顔してどうしたの？」とか「もしかして迷子？」等といった、心配する声が聞こえてくるが耳障りだと言わんばかりにレイドは耳を背けて無視していた。

何せ、自警団にでも保護されるハメになったら”ある人”と合流するのが難しくなる。

”ある人”というのは、孤独に彷徨っていたレイドを迫害から守り、聖都シャルティエに連れて来てくれた恩人のことだ。

その名はヴァッシュ。騎士団の設立者であり、不動の名を冠する剣士でもあり、かの亜人戦争を引き止めた英雄でもあり、と、ありあり尽くしの一見凄そうな人間に見えるのだが実際の所は、騎士団の経理や物資の補給などは他の騎士に任せており、レイドはヴァッシュが真面目に何かに取り組んでいる姿を見たことが無かった。

加えて言えば「少し野暮用が入っちまってな。ここで待っていてくれ」と、レイドを噴水広場に残したまま何処かへフラリと消えて2時間以上待たせているような怠け人である。

それでも、約束を破って噴水広場から離れないのは一人で歩くと迷子になってしまうからであって、決して助けてもらった相手を裏切りたくないからではないとレイドは自身に言い聞かせる。

「おっそいなア」

憎らしいほどに広がる青い空と雄大に佇む雲を眺めながら悪態をついた。

「何だよあのおっさん。少し野暮用が入ったとか抜かしといて、どんでけ待たせりゃ気が済むんだ」

続けて呟かれる言動の数々は、今のレイドに比べて荒々しい。

「ねえねえ。その君」

また、誰かが話しかけてきた。

レイドは、今までと同じように寝返りを打って聞き流し、

(どうして、こんなにお節介な連中が多いんだ……)

心の中で毒づく。

聖都の人々は非常に優しい。魔人、獣人、竜人という種族の隔た
りを感じさせず、強引な程に周囲との交流に積極的な者達。余裕と
ゆとりと、広い心を持った者達。

それは、悪名高い化物であるレイドにとって、受け入れ難く、理
解しがたく、受け止められない優しさだ。

それは、冷たい世界でしか生きてこなかったレイドにとって、甘
いとは解釈できない世界だ。

「だああああ、もう！ 起きろっつってんのよ。可愛くない！」

それ故に、聖都の人間に寝返りを打った背中を全力で蹴られよう
とはレイドには想像もつかなかった。

「いってえな。何すんだよ！」

突然の出来事にレイドは起き上がり、嫌な音を立てた背中をさす

りながら犬歯を剥き出しにして喚き散らす。

「人様が折角、心配して話しかけてやってんのにガン無視するアンタが悪いんでしょうが！」

コッソ、と鈍器で叩かれたような音がレイドの頭の天辺てっぺんから全身に渡って響き渡る。

痛いに痛いを重ね掛けされたレイドは涙ぐみながら、自分の背中を蹴りつけ、更に頭まで殴りつけてきた相手に目を向けた。丁寧に結われたツインテールに、何処か不機嫌そうに映る顔。そして、自分の背丈を優に越しそうな木製のロッドを持った女の子だ。

「何だよお前。いきなり殴りつけやがっ……」

最後まで言わせずに、三度目の打撃がレイドの尻尾に降り注ぐ。

背中を蹴りつけられようと、頭を棍棒で殴られようと、そこまで堪こたえなかったレイドだが流石に尻尾目がけて真上から棍棒を振り下るたまされたら堪たまったものではない。

「ふうん、体つきはそこそこ。型に嵌はまってないけどキチンと鍛えられてるみたいじゃない。でも、急所をあっけらかんにしてるのは減点対象かな」

上から目線で注がれる、人を見下す表情と辛辣な言葉にレイドは面食らった。

「チクシヨツ……人の話ぐらい聞けよ……ふっ、あは、アハハハハ」

涙が頬から垂れ落ちる。

ちなみにレイドは尻尾に棍棒が振り下ろされて痛い訳ではない。

尻尾は一種の器官のようなものであり息苦しくなるぐらいに、くすぐりたいのだ。

「ほれ。反撃の一つでもしてみたらどうかね？ ウリウリ」

ニヤリ、と黒い笑みを浮かべながら女の子は棍棒でレイドの尻尾を突つつき回す。強く、弱く、真上から、斜め上から、レイドの反応を楽しむ様に力加減を変えていく女の子に徐々に苛立ち始め、

「——やめろってば!？」

息も絶え絶えにレイドは腕を振るい、女の子は「おっと」と少し驚いた様子で後ずさる。

「えへへ。君って紋章エンブレムから見る限り、騎士見習いでしょ？ 私はイリア・ホーネット。まあ、先輩から厳しいご指摘を受けたと思って精進なさい」

棍棒による拷問という名の攪りから開放されたレイドは、咳込みながら改めて相手の外見を改めて見た。

紋章エンブレムというのは、騎士団の証。強いて言えば、証明書のようなものであり、交差クロスした矛と盾が刻まれたそれを、イリアは誇示するよにネックレスで繋ぎ止め首から架けている。

「でも、それって俺と同じ見習いカラーじゃないか」

レイドは一步、たじろぎながらイリアが着けている紋章を指し、その指で自身の服も指す。

そこにはイリアの紋章と同じ柄が刻まれている。

「そうね。そうよね？ そうなのよね!？」

何が、そんなに気になるのだろうか？ と怖くなるぐらいにレイドに詰め寄ってくる。

「どうしてよ。今年に入ってから新規に騎士見習いに昇格したのって私だけだったはずなのに……ええい。名を名乗りなさい。同じ騎士見習いとして決闘を申し込ませてもらうわ」

「無茶苦茶じゃないか。それに俺は好きで騎士になったわけじゃない」

あまりにも我侫わがままな要求にレイドは頬を膨らませて怒る。

「はあ？ もう一体全体、何なのよ。イーシユ師匠は、どっか行っちゃうしクロア師匠もろくに取り合ってくれないし……あの怠けたおっさんに聞いてみるしかないか」

顔色が目まぐるしく二転三転するその姿にレイドは置いてきぼりにされたまま、困ったような様子で顎に手を乗せるイリアを睨む。

周りには何事かと少数の野次馬が集まってきている、がイリアは気にする様子もなく暫くしてからレイドの顔を覗き込み、

「ちょっと。君の獲物って何？」

「獲物？」

「自分の使う武器のことよ。武器！」

イリアは自身の棍棒を指差しながらまくし立てる。

「武器？ そんなの無いぞ」

素で不思議そうな表情になる。

何せ、使えるものといえばサバイバル用のナイフぐらいで武器と言われると使い道が異なってくるのだから。

「有り得ない……ハッ！？ さては自分の武器を隠して情報戦で有利に立つって魂胆ね。騎士なら正々堂々としなさいっての」

「そもそも隠すもんが無いっつってんだよ！！」

腸煮えくり返ってきたレイドは剣幕張り立てて、一人で突っ走っているイリアに怒鳴りつけた。

瞬間、驚いたのかイリアの体が硬直し、

「おっと、ごめん」

不意をついたかのように誰かがイリアにぶつかり、そのまま通り過ぎていく。

「うわ、こちらこそすいませんでした」

ヒートアップしていた事にようやく気付いたのか、ぶつかっていった人影、背丈からして同い年ぐら

いの子供に頭を下げてイリアがレイドに向き直った。

「……？」

おかしい。

こちらを睨みつけているはずのレイドの視線が、通り過ぎていった人影とイリアを交差して落ち着きを見せていない。

「お前、何か失くしてないか？」

怪訝そうな、何処か真面目な顔つきでレイドに言われた言葉にイリアはハツとして自身の服に探りを入れる。

「無い」

先程までの威勢の良さが嘘のようにイリアの顔がみるみるうちに青くなっていく。

そんな姿をレイドは呆れながら、爬虫類のような眼で見つめる。

「多分、さっきのにスられたんじゃない？」

そんな事は分かっていると青い顔をしていたイリアは紅潮し、人影の去っていった方向に視線を変えた。

何かがおかしかったのだ。

たかが子供の喧嘩のように見えたであろう現場にどうして、少数の野次馬が集^{たか}っていたのか。

（流石に放つとくのは悪いかな）

レイドはヴァッシュとの約束と、少女の行方を天秤にかけ、後者を選んだ。

不意をつかれたのは明らかに自分が叫んだせいだろうし、このままヴァッシュを待ち続けるというのも退屈だ。それに、このまま無視というのは何だか気が引ける。

「ほら、とつとと行かないと逃げられちゃう」

未だ、混乱しているイリアの背中を叩いてレイドは人影を追う事にした。

【蒼の巻】 魔鉱石 7 不思議な少女

「ん……」

朝焼けが眩しい。

どうやら思い出語りをしている間に、それは夢という形になり眠りこけてしまったようだ。

しかし、イリアの姿は無く、レイドは一人だけ取り残される形となっていた。

寝起きのせいで頭の回りが鈍いが、視界だけは鮮明に見開かれており、二度目だが本当にクツキリと朝焼けが眩しい。

つまり、それは夜空を歪めていた結界が解除されていることを意味していた。

反射的に起き上がり、周りを見渡すレイドだったが馬車や荷物はそのまま誰かが襲ってきた痕跡は無い。

しかし、イリア達の姿も無い。

「う、わわわわわわわ。お願いします。食べないで。この通り私なんて美味しくないですし、地味ですし、淡泊以下だと思えますので！」

何やら、聞いたことの無い女の子の声がレイドの元へと響いてきた。

それは、丁度レイドのいる場所から死角になっている少し離れた草が生い茂った岩壁の裏から聞こえてくる。

「うーん。もしかして私たち。化物か何かと間違われちゃってる？」

「……俺は離れていた方が無難か」

「フフ、可愛い仔猫ちゃん。僕達は無害だから安心したま……」

「その口調と笑顔が怖がられる要因だつてんのよ。この馬鹿兎！」

近付いてみると、イリアやルーフェ、ロアの聞き慣れた声も聞こえてきた。

何やら一悶着起きているみたいだが、何処か緊張感に欠けるものを感じてレイドは安心する。

「ルーフェさん！何かあつたんですか？」

岩壁の裏に回って、レイドはイリア達の姿を確認した。

ルーフェの頭を叩くイリアに、その場から一步離れて静かに佇んでいるロア。更に一步離れた場所ではヴィロ教授が現場を静観していた。何故だかその表情がレイドの登場を目の当たりにした途端、歪んだ気がする。

そして、レイドが見たことの無い黒髪にポニーテールの少女が立っていた。その表情はレイドの姿を見ると凍り出し、

「変な人がまた増えたあああああああああああああああああ
あッ!？」

少女のかん高い悲鳴兼奇声が拳がる。

イリアが、あーあーと言った表情で顔に手を当てている辺り、ど
うやら泥沼に更に泥を加えてしまったようだ。しかも、とびきり大
きな泥を……。

少女は、どうやってかは知らないが結界を掻い潜って来たらしい。
その外見は衛生的とは言えない程にやつれて見えた。そして、一際
目を惹くのが背中に担いでいたらしい山羊獣人の少年だ。

その少年は寝ているらしく、ヒューヒューと何処か苦しそうに寝
息を立てている。

「それで、ここまで男の子担いで逃げてきたって訳？ 何ていうか、
凄いわね」

流石に岩陰で話すというのも難だ。

一同は、猫獣人を休ませているテント付近へ移動して、名前をコ
トネというらしい謎の少女からあれやこれやと事情を聞いていた。

と言っても、どちらかと言えば質問責めにされるのはレイド達の
方だったりする。既に数十回と質問を質問で返されている。

「だから、私は何も分からないんです」

「本当に？ そうだ。聖王国出身とか帝国出身とかが分かるだけで

も充分なんだけど」

比較的、穏やかな口調でイリアがコトネに質問をしている。理由は分からないが、獣人のルーフェや竜人の血が混ざったレイドの姿を終止、混乱した様子の少女は怖がるからだ。ロアの外見は言わずもがなで、ヴィロ教授と共に容態が芳しくない少年の手当てにあたっている。

「せいおうこく？ テイコク？ ……やっぱり夢なのかな」

「あなた。もしかして、国の名前とかも分からないの？」

返ってきた問いに目を丸くするイリアに対してコクリと頷くコトネ。

その後も、質問は続く。『どうしてこんな所にいるの？』とか、『誰か知り合いは？』とか数えているとキリが無いほどに。

けれど、返ってくる答えの大半は『分からない』なのだ。イリアも流石に降参といった表情で、一度レイドやルーフェを集めることにした。

「何だか、三種族についても分からないというよりかは全然”理解が追いついてない”みたい」

「なるほど。もしかや記憶喪失の類……」

ルーフェの推測にレイドは有り得ないと断言する。

「僕と違って、彼女は以前の記憶をちゃんと持つてるように見えた

よ。何だか、その記憶が僕達のそれとは違ってみただけだ」

「私もレイドと同意かしら。何だかあの子。今自分が置かれている状況を夢か何かと誤認しているみたい。それに私が知らない言葉も色々覚えていてみたいだし」

うつむ、と一同は首を傾げる。

コトネという少女は記憶喪失というにはあまりにも所持している情報が多いのと同時に飲み込みが遅いのだ。” 忘れた” ではなく元から” 知らなかった” という印象の方が強い。

「まあ、とにかくにも今考えるべきは現状よね」

イリアの言葉にレイドは苦い表情をする。

レイド達が今から向かう場所にコトネ達も同行させるというのは無理がある。かといって、今から聖都まで送るというのも時間的課題と当初の予定を考えると殊勝な判断とは思えない。

馬車の中で待機させる、という選択肢もレイドは考えたが先日の急襲から考えると安全とは言い切れないし、

「ここにいて事は山賊達と接触していてもおかしくないよね」

ふと気付いた事をレイドは呟いてみる。

「確かに」

レイド達の動きにいち早く気付いた山賊達。そんな彼らの視野が

らコトネが外れていたとは思えない。

数時間前――

「はあ…… はあ…… ケホツ、ケホツ」

疲労を訴え、漏れ出す声が咳へと変わる。

高低の激しい足場に砂埃。そしてコトネを掻き立てる焦燥感と恐怖が整った息継ぎをさせてくれなかった。背中に一人の少年？を担いでいるのだから尚更だ。

しかし歩みを止めてはいけない。背後にコトネを恐怖のどん底へ突き落とそうと迫ってくる者達がいるのだから。

（次はどっちに行けばいいの）

念じるようにお札が指し示す方向を探す。

ここまでコトネが逃げ続けられたのは、今は気を失っている少年と手元にある謎のお札が逃げ道を教えてくれていたからだ。

お札は地面を伝って、まるでリードを引くかのように白い線を描いていく。この線を辿っていけば、ひとまず捕まらないとコトネは信じている。というか信じないとやっていられなかった。

少しでも足元を狂わせたら死んでしまいそうな強風吹き荒れる崖の上を歩かされたり、前も見えぬ生い茂った森林の中を歩かされたりしたが、やはりお札の記すルートを辿っていけば背後からの追っ手との距離は離れこそしないものの縮みもしない。

聞こえは悪いが、大した取り得も無ければ地味な運動能力と知識しか持ち合わせていない凡人な少女が少年を担いで、大の大人。しかも人のそれとは一線を画す外見と身体能力を持った輩二人と五分五分の逃走劇を繰り広げているのだ。

自然と足腰に溜まった疲労が蓄積され始めているが、

(このまま進めば逃げ切れる)

コトネは根拠の無い自信を頼りに走り続ける。

それは疲労によって冷静な判断を見失っているせいかな。

あるいは現実逃避に思考が傾いてしまったのか。そんな事は分からない。

「あつ——」

だが、しかし現実はそのなにごくはない。

まるで、コトネの甘ったれた考えに手を差し伸べるのを辞めたか

のようにお札が描いてくれていた白い線がプツリと途絶えた。

その先には崖しか無い。

飛び降りて死ねとでも言うのだろうか？

散々ここまで引つ張っておいて、あまりにも酷い仕打ちではないか。

「やっと追いついたぞ。たくっ、手間取らせやがって」

背後からは、あの狼男が王手と言わんばかりに迫り寄ってくる。

結局、誰も助けはくれなかったのだ。結局、誰も私の事なんて……と、わなわなと震える体をコトネは断崖絶壁の傍まで移動させた。

「お、おいおい。まさか飛び降りるとかいわねーだろうな、おいッ
!?!」

狼男が焦った表情を浮かべる。

その姿と崖下の光景を交互に見てから、コトネはほんの少しの笑みを浮かべて、

——落ちた。

真つ逆さまに、背中に担いでいた少年を抱き抱えるように手繰り寄せながらコトネは崖から落ちた。

バギン、と擬音ですら表現し難い音が夜の山奥に鳴り響く。

木々はざわめき、何事かと鳥達が朝の日差しが登り始めた空へ飛んでいく。

「……この高さから落ちたんだ。流石に死んだよな」

狼男は苦い顔をしながら崖の真下を覗き込んだが、すぐに立ち眩みを感じて離れた。

「あいたたたたた」

コトネは生きていた。

怪我一つなく着地して、今は頭に降ってきた枯れ葉や枯れ木を振り払っている。

崖から落ちる寸前、確かにコトネは狼男の反応に笑いを見せた。

それは自身に降りかかってきた災難に絶望し、自暴自棄になったからではない。

活路を見出したからだ。

矢印はプツリと途絶えた訳でも、コトネを見放した訳でも無かった。

崖を真つ逆さまに矢印は下くだっていたのだ。

これは落ちれば助かるという道しるべだとコトネは信じて飛び降り自殺を演じて見せた。

(にしても、さっきの何だったんだろう)

確かにコトネは助かった。少年も無事である。

ただ、バギン、と音を立てて落ちたのもまた事実なのだが、その理由が本人にも分からない。

地面に降り立つ寸前、まるで空気が軽くなったかのように体が浮いた。

バギン、と音が鳴ったのはその時だ。何かを通り抜けたような、砕いてしまったような感覚をコトネは感じたが命綱無しでの飛び降り記憶を曖昧にさせる。

考えても無駄とコトネは開き直る。

自分は助かったのだ。

追っ手の気配も無さそうだし死んだと思われたに違いない。

それだけで今は充分だとコトネは、ようやく手に入れた一時の安全に幸福感を得る。

「結界が破られて……、何者だ！」

だから、突然かけられた刺々しい声にコトネは頭が真っ白になってしまふのであった。

まるで、ようやく完成までありつけた絵画に真っ白なペンキをぶちまけられたように。

かくして、コトネは良く分からない質問責めに遭って困っている最中だ。

幸いにもコトネ及び、あの少年に危害を加えるといった様子には見えない。

かといって、何だか得体の知れない物騒な凶器を持った変な人達の集団には変わりないので終止怯えながらコトネは縮こまってしまふ。

あの少年も誘拐……ではなくて手当ての為にコトネとは離されてしまった。

「ねえ、コトネちゃん……だったかしら。もしも話せたらでいいんだけど今までの経緯を教えてくれないかしら？」

別にそこまで前からでなくて良いの。いつからこの山にいるのかとか

反射的に体が跳ねる。

コトネは恐る恐る声の方向に目を向けた。

確か名前はイリアだったと思う。

動き辛いからなのか、お洒落の為なのか。

ツインテールに結いであるものの解けば足元まで届きそうなほどに、その女性の髪は長かった。

そして背中には自身の身長を超えそうな程に長い、棒高跳にでも使えそうな棒ロッドを携えている。

「は、はあ。経緯ですか……」

イリアに対しては比較的、怖がらずに接せられる。

他の面子がコスプレとは思えないような生えているという表現に相応しい翼を有していたり、何処かの御伽噺に出てきそうな兎の獣人がいたり、全身をフードか何かで覆い隠して男か女かも分からない不審者だったりと怖過ぎるといのが大体の理由ではあるのだが。

いや、それでもやはり、イリアの接し方は優しく感じられる。

女性にしては高身長にあたるであろう体を曲げて、コトネと同じ位置に視線を合わせてくれている。

心地よい安心感があった。

「自分でも良く分かってないんですけど――」

コトネは話す。

今までの経緯をかいつままで話すことにした。

どうせその前の話をして誰も信じてはくれないだろうから……。

「目が覚めたときには山奥にいて、敵つい人達に捕まって。えーとそれから――」

落ち着いた素振りでは話の道筋が逸れたとしても、大して咎めもせず聞いてくれるイリアに対してコトネは、まるでお隣さんに愚痴を聞いてもらっているような感覚に陥ってきていた。

今まで、まともに話を聞いてくれる相手がいなかったから、尚更なのかもしれない。

「――それでお札ふだに連れられてここまで逃げてきたんです」
自分でも言つてて意味が分からない。

お札に連れられてここまで逃げてきたなんて、誰が信じるものかとコトネは自身が紡いだ言葉を否定する。が、目の前にいる比較的優しい女性は至極真剣そうな表情で何処か思い悩むように顎に手を乗せていた。

「お札……東方に伝わる呪術の類かしら？ いや、守護神か何かを紙に封じ込めてる？」

何やらブツブツとコトネには理解不能な言葉を連ねている。

その姿に怪訝そうな表情をするコトネだったが、一方イリアは頭の中に入っている魔法からコトネの言っていたお札について一致するものがあるかどうか熟考していた。そして熟考した末に辿り付いた答えにイリアは溜め息を漏らす。

（お札自体が何らかの意志を持って働いていたとしたら”魔導獣”まどうじゅう、”妖術”の類かしら。でも、あつちは私の専門外だし）

イリアは陣術と呼ばれる、自身の構成した陣の中で超常現象を引き起こす魔法に長けている。

魔法と言っても様々な種類、適性、法則が存在し、それら全てが

『この世の法則を無視した別の法則で働いている』事から魔法と一緒くたに呼ばれるようになったらしい。

らしいと言うからにはイリアにも魔法の原点など分からない。ただ一つ言えることがあるとすればイリアにはコトネの持っていたお札の構造は解読出来ないという事だ。

”この魔術師は炎を操る事に長けているが水を操ることは出来ない”といった具合に、魔法を扱う人間によって専門とする分野や属性は違う。そうでなければ世界のバランスは崩壊し、本当に何でも出来る世の中になってしまふから。魔法は誰でも使えないようにする為に、個々に法を定め、わざとややこしくしたとも言えられているぐらいだ。

それ故、イリアは陣術に関しては他に類を見ない知識と実力を誇るが他は専門外。お札が安全なものか危険なものかを判断するには聖都に戻ってから詳しい人間に調べてもらうしかない。それまでは、「コトネちゃん。何が起こるか分からないから少しの間だけ、そのお札預けてくれないかな？」

魔法に知識のある人間が持っていた方がまだ安全だろうと考えたイリアはコトネが今も大事そうに肌身離さず持っているお札を手に取りろうとした。

「あっ、駄目です！」

イリアがお札に触れた途端、まるで静電気を数十倍にも跳ね上げたような電気がイリアの手とお札の間に迸った。コトネの叫び声で反射的に手を離していなければ火傷を負っていたかもしれない。

「これって……？」

「私にも良く分からないんですけど、私以外の人が触れると拒絶反応を起こすみたいです」

イリアは顔をしかめる。

これでは、お札が呪具の類になってしまつし一見、コトネは護られている様で呪われている事になってしまふ。

「馬車の準備が終わったよ。いつでも出発できる！」

ヒヒン、とルーフェとロアが乗りこなしている愛馬が鳴き声をあげる。

さてどうしたものか。イリアはコトネという一人の少女を目に留めながら考えた。

現状、彼女の持つお札がどんな力を秘めているのかは不明。特にそれが周囲に危害を及ぼすものか否か。これを解明するには一度、聖都へ戻らなければ行けない訳だが、容易に戻れない事情がこちらにはあり、選択肢は彼女を連れて行くか。見捨てるかの二択になってしまう。

危険な場所に放置するか、危険な場所に連れ込むかの二択。

(……私は何の為に騎士団に入ったのよ？ 危険な場所に連れ込んでも守れば良いじゃない)

連れて行くっ。

イリアは自分の冷徹な思考を叱咤し、コトネを受け入れる事にした。それが周りに危害を加える可能性があったとしても、単なる足手まとい以下になったとしても、だ。

「私達はこれから……恐らく、あなたを監禁していた連中のアジトに向かう」

この上なく分かりやすいストレートなイリアの言葉に、この上なく分かりやすい挙動でコトネが驚きを表す。

「どうする？ 私達は目的を達成次第、安全な場所に帰るつもり。そこまで行けばあなたのこれからについても少なからず分かってく

るかもしれない。でも、あなたが私達と同行するのを嫌だと言つたら私達はあなたを置いて出発する」

その言葉はコトネにとつて、あまりにも冷たくて、鋭い刃で胸を突き刺されるような感覚がコトネを襲った。

決して、イリアはコトネの心を上げて落としてどん底に突き落とすような、冷酷な目的で問いかけた訳ではないのだろう。しかし、今のコトネの精神は、裏切られたという被害妄想に思考が傾いてしまつほどに弱っていた。

「わ、私は……」

今まで何度も裏切られ続けた。今まで何度も何度も、何度だって期待して信頼して信用して、他人を信じ切つて裏切られた。

そんな人生を送つてきたコトネには耐えられない。

目の前が視えない。

「ッ！」

気付いた時には走り出していた。理性が働く前に、コトネの感情が爆発し、全てを吹き飛ばしてしまった。

「あつ、待ちなさい！」

イリアの静止を訴える声も虚しく、コトネは自分でもここまで出ると思つていなかったであろう速度で走つていつてしまつた。

その、あまりにも唐突で予想外なリアクションにイリアは騎士の一人であるにも関わらず、すぐには動けなかった。

何処だか、昔の自分を見ているようで動けなかった――。

「飛んで火にいる夏の少女、かな」

コトネは呆気なく捕まった。イリアではなく、馬車の近くに屯していた人達でもなく、山賊達でもない相手に。

捕まった場所は木々が生い茂り、その中央に位置するように大きく開いた平地だ。

「は、離してっ！」

首に掛けられた小さな腕を振り解こうと、コトネは暴れる。

だが、その小さな腕は見かけによらず非常に力強い拘束力でコトネを離してはくれない。自身の身にリアルタイムで襲い掛かってきた危機感が、逆にコトネから失っていた理性を取り戻してくれる。

「

まあまあ、落ち着きなつて。ボクはそんなに怖い人に見えるかな？」

陽気な声で敵意は無いと伝えながらも、行動が矛盾している相手をコトネは睨みつけた。

そこにいたのは少年だ。本当に、いたいけな笑みを浮かべながら佇む少年。こんな所にいるのが不自然な程に。

「もしかしてお姉さん。その年齢でピエロが怖いクチ？」

少年に何か特徴があるとすれば、道化師ピエロのような赤色調のスーツを纏い、服装とは対照的な青色の長髪、そして目と鼻の間を駆け抜けていくように奇妙な三日月のマークが顔に描かれている。あるいは刺青のように刻み込まれていた。

「まあ、折角だし良い情報を提供してあげる。」ハヤト” だったっけ？ 彼、獄竜島ごくりゅうとうって場所に向かっている筈だよ。行けば会えるんじゃないかな」

少年の言葉に胸を刃で突き刺されるような感覚を味わいながらコトネは唾を呑み込む。なぜ、この少年から”ハヤト”の名前が出てくる。

朗らかに笑う少年は、コトネの抵抗力に合わせながらまるで機械のように腕に入れている力を程よく調節しながら前方を見据えていた。

「大人二人がかりで”子供二人”を相手にするつもり？ 大人気ないな」

え？ と、コトネが小さな声を漏らした。

”今この少年は何と言った？”

「その子から離れなさい！」

少年が見据える先、前方にはイリアが立っていた。彼女は少年を睨みつけながらも困惑した様子で時折、コトネにも視線を向けている。

そしてイリアより一歩突き進んだ形で、背中に蒼い翼を生やした青年がサーベルを構えている。

「離してあげても良いけどさあ。ねえねえお二人さん。結界を壊したのは何処の誰でしょうか？」

まさか、この少年は……！？　そこまで考えてコトネは自身の口が開かないことに気付いた。

誰かに細工をされた訳ではなく、彼女の精神状態が発声することを許してはくれない。「あ……あ」といった言葉にもならない声がか細く発せられるだけだ。

「正解は、今僕が動かないよう抑えているこの子です　本当にありがとう。君のおかげで鼠の居場所が突き止められた」
ゾツ……。

背筋だけでなく全身が凍りつくような感覚をコトネは感じた。少年は今までとは違う、まるでワニが口を開けたように口元を裂かせて笑い始めたのだから。

「何が言いたい」

冷たい氷柱のような言葉が少年へ向かって放たれた。

「視認不可能な結界を打ち破れちゃうような子なんだよ？　僕がこうやって抑制してないと君達を八つ裂きにしちゃうかもしれないね。こんなお人形さんみたいに可愛い顔してるのにさあ」

それに対して、少年は黒い微笑みを顔に刻み込みながらコトネから手を離れた。まるでイリア達に向けて差し向けるかのように。

「この子が言っていることは嘘だ。私を信じて」とコトネは叫びたいのにグチャグチャに崩された脳は酸素を喉まで通してくれない。交差する悪意と敵意がコトネを両方から貫いた。

蒼い翼を羽ばたかせて青年がサーベルを構えながら冷め切った形相で突撃してくる。突風が吹き荒び、剣の切っ先がコトネの体を、「なっ!?!」

突き抜けずに、まるで戦場から離れると言うように蒼い翼を羽ばたかせる青年がコトネを蹴り飛ばす。

そのまま、青年は少年へサーベルの柄で腹部を殴るように腰を低くする。が、少年は驚きの声をあげつつも飛び退いて直撃すれば気絶させられたであろう青年の峰打ちを回避する。

蹴り飛ばされた痛みが麻痺するほどに驚愕しているコトネをイリアが優しく受け止められた。

「ごめんなさい。彼、不器用だからレディに対しても容赦無かったりするのよ」

静かに呟くイリアはコトネを疑ってなどいなかった。たった一日すら経っていない関係だというのに、一切の迷いを見せずに、

「コトネ。あなたを正式に我らハイデルヴェルグ騎士団の保護対象とする」

宣言した。

そつと、コトネを地面に降ろしてくれたイリアの目は先程、コトネを利用した少年へ向けられている。

「おっかしいな。その子が君達に危害を加えないって保障は無いはずなのに」

少年はポリポリと頭を掻きながら、イリア達を面白い見世物でも鑑賞している幼い子供のような笑みを零しながら疑問を口にした。

「……騎士として、まずは名乗らせてもらおうか。我が名はレイド・コール。竜騎士ドラグーンの階位を所有する身だ」

殺気とも違う、覇気のようなものがレイドと名乗った青年を中心に周囲を包み込み始める。

それだけで守られているであろう側のコトネでさえ怖気づいてしまつというのに、あのピエロのような少年は全く動じずに、むしろこれぐらいじゃないと愉しめないと言わんばかりの表情でレイドと向かい合った。

イリアはその場に加勢する事なく、コトネを戦場から出来るだけ遠ざけるように距離を離してゆく。

「わざわざ、自己紹介とは強者の怠慢かい？」

確かにレイドの行動は戦いにおいて怠慢と取られてもおかしくない。実際そうだ。だが、騎士である彼にとって身分を明かすことは流儀であり何よりも、

「勘違いしているみたいだから一つ言っておくよ。死にたくなければ立ち去れ。ここは、お前のような子供がいてもいい場所じゃない」
敵でさえも守ろうという志の表れでもある。初段の奇襲を避けら

れた時点でレイド（奇襲）の本領は発揮できないというのに。

「素敵で綺麗なご忠告ありがとう。でも子供だからって甘く見ちゃうのは駄目だ、よ」

変化が起きた。

少年から笑みが消える。周囲の空気が圧迫され、心なしか息苦しくなる。それは、気迫だとか雰囲気だとか精神的な概念からくるものではない。もっと危険なもの。

”火”だ。

「自由に舞いし炎の踊り子よ我が名において此処に顕現し燃え滾る饗宴を形作り――」

少年の右手から三百度は超えるであろう炎の弾が、咄嗟に飛び退いたレイドの足元へ被弾する。

「――その力を以って目前に座す観客を持って成し熱狂の渦に巻き込め！」

一拍も置かずに早口で少年が”詠唱”を口ずさむ。

別に詠唱が無くても魔法は発動する。が、魔法の正確さと水準火力は術者の精神に大きく左右される。高度な計算が必要になる魔法ほど、計算を狂わせない為にも、意思を高揚させる為にも、大半の魔人に必要不可欠なのが詠唱だ。つまり、少年が発動しようとしている魔法は”高度な計算が必要になる強力な魔法”という事になる。

「炎の鞭？」

レイドは戸惑いを声にして漏らした。少年の魔法は完成した。それは周りに散漫している酸素と魔力を吸い上げながら更に濃度を増していくと同時に不安定に蠢いていた形を整えてゆく。

「まあ、このまま僕だけ自己紹介しないっていうのも無礼に値するだろうし、君は僕の事をすっかり忘れてるみたいだから名乗ってあげるよ」

右手に携えた凶器。少年の手から垂れ下がるように炎で形成された鞭のようなもので地面を打ち据えながら、

「僕の名前はプルチネイラ」

名乗った。炎の鞭によって打ち据えられた地面は抉り取られ、急速に加熱された土砂が所構わず撒き散らされる。少年の形成した炎は最早、燃焼によって引き起こされる現象ではなく、一つの固体として働いているようだ。

「なっ!？」

少年の名前にレイドは覚えがあった。いや、忘れられるようなものではない。何故、今まで思い出せなかったのだろうか。鮮明に過去が脳裏を過ぎり目の前の視界を遮るように映し出された。そのせいで反応が遅れる。

「子供相手だからって手加減されるのもシヤクだし……、君達に僕と戦う理由をあげよう。君達もろとも、そこにいる女の子をドロツドロの蠟人形に変えられなくなかったら、僕と遊んで勝利してみなよ!」

宣戦布告の合図と共に、少しでもずれれば自身の体に大火傷を負わせるであろう炎の鞭を、プルチネイラと名乗った少年は振り上げて、振り下ろす。

単純な二段動作がレイドを襲った。

レイドとプルチネイラの距離はおよそ5m。突き詰めれば簡単に間合いに入る距離だというのにレイドはその距離を詰められない。むしろ炎の鞭から大げさに距離を取るように斜め後ろへ飛びすぎる。端から見れば臆病者と捉えられたかもしれない、その行動は結果的に冷静な判断として結果を生む。

「ッ!」

確かに”全ての攻撃を避けた”筈なのに額を掠めた熱に、レイドは顔をしかめた。

炎の鞭は見た目通りの威力を持っている。無論、あれを警戒しないことには話にならないのだが、レイドが多く距離を取ったのは視認出来ない攻撃を避ける為だ。

轟々と今も尚、酸素と魔力を食い荒らしながら拡大していく炎の鞭は、同時に炎熱を放出し続けている。それに触れれば大火傷を負って即アウト。衣服に触れようものなら自然発火を引き起こし自滅を促進し、空気を吸い込めば肺から体を焼き尽くす。

熱を最大限に利用した波状攻撃。

見えない炎熱がレイドとプルチネイラの距離を縮める事を許さない。

「ほらつと」

容赦の無い二段動作が足場すら整えていないレイドに繰り返し襲い掛かる。

(今度は斜め!?)

レイドが回避する方向を読んだのか。斜め左に炎の鞭が振り上げられる。

固形物として襲い掛かる鞭は反射的に防御の構えを取らせようと錯覚させるが回避に徹しなければ、サーベルごとレイドの体を焼き尽くすに違いない。

咄嗟に斜め右へ跳躍。これを回避する。

が、振り上げられた炎の鞭は二段動作の中間部分を通り過ぎ、今度は斜め右に向かつて振り下ろされた。

すんでのところでレイドは覚束ない翼を羽ばたかせ旋回。二段目もかわして退け、朝日の反射を受けながら銀色に閃く剣先をプルチネイラに向ける。

標的を見失った炎の鞭は、バチンツと鈍くも鋭い音を立てながら地面の土を抉り取り粉塵すらも灰に変えてバチバチと火の粉をあげた。

レイドは着地と同時に足元に膝をつく。

「ゴホツ……ケホツカハツ……ケホ」

喉が詰まる。息が途絶える。呼吸が乱れる。咳と共に鉄の味が滲み出す。背中から嫌な汗が溢れ出し、体は熱を帯びているというのには凍えるように冷え込みはじめるといふ。

やられた。

火と熱の波状攻撃は酸素さえも汲み取って、こちらの取り分（酸素）を奪い取る。有害な黒煙は、レイドの器官を内側から汚している。そして何よりも、

「もう息あがっちゃったの？ まだまだこれからなのにさあ」

魔力による毒素がレイドの体の中に流れる竜人の血を汚染していた。

プルチネイラの挑発的な言動にレイドは答えない。

代わりに口元から赤黒い血を流しているにも関わらず、悠然と立ち上がる。

自身の尻尾目掛けて血を吐き捨てながらレイドはプルチネイラを睨みつけた。ここからが本番だと言わんばかりの眼光をぎらつかせながら。

どうして？

コトネは戦場を目の当たりにしながら疑問をぶつけていた。

何故、彼らは自分を信じてくれたのか。それが全く理解できない。

「別にあなたの事を信用している訳じゃないわよ。これは、あの道化師があれこれ言う前から思ってた」

容赦なく浴びせられる言葉。

「ただね。保証人がいるのよ」

目前で起きている戦いを見守りながら、イリアはコトネを静かに降ろす。

「そこから先は僕がご説明しましょう」

何処か、聞き慣れた声がコトネの耳を掠めてゆく。この丁寧な口調と若々しい声質は確か……。

「またお会いしましたね。ここでは彼の戦いを妨害してしまうでしょう。どうかこちらへ」

最初に会った時よりも、疲労が少し薄れたように見える山羊と人間を足して割ったようなあの少年が立っていた。

おざなり程度に調整された木の杖をつきながらの姿は少々、痛々しくも映るが杖を持っていない方の手でコトネに手招きをしている。その手つきもまた、弱々しい。

「その子が、あなたの保証人」

静かに告げたイリアに促され、コトネは……獣人だったか？ そんな呼び名で呼ばれているらしい種族の少年へ視線を向ける。

が、戦場から送られてきた爆音と熱気に彼女はつい足を止めた。

振り返った先に映る光景は砂埃と黒煙と塵気楼が入り混じり、非常に視界が悪い。

そんな中、辛うじて見えたのは自分を守る為に戦ってくれているであろうあの青年が片足について真上に掲げられた炎の鞭を前に苦戦している姿だった。

何回目だろうか？ 酸欠状態によって意識が朦朧とする中、レイ

ドは炎の鞭を横に転がりながら避ける。決り取られた土砂と舞い散る落ち葉が凶器へと変貌し、転がったレイドの背面を強打した。

骨が折れなかったのが幸いか。それでも嫌な音を軋ませながら悲鳴をあげる身体を無理やりに動かしてレイドは次の攻撃に身構える。二段動作、と言っても炎の鞭の変則的な動きは文字通り変幻自在でありレイドを着実に甚振っていた。

プルチネイラが発狂した笑いを発しながら、二回三回と体ごと炎の鞭を横に回転させる。

今まで縦向きに振るわれていた炎の鞭のリズムが崩れ、不意をつ

かれたレイドは頬を掠める炎熱に冷や汗をかく。

それでも、レイドは身を屈ませたり、地面スレスレを凪いでいく死の縄跳びを跳躍して潜り抜けながら眼前の敵に焦点を合わせ続ける。

しかし、その視界は時折、背後を向いてはイリア達の方角と距離に気を配っていた。

炎熱と突風が織り交ざった炎の波がレイドのすぐ後方の樹木に傷をつけ、発火する。

「その余裕。気に食わない！」

レイドの態度が癪に障ったのだろうか。プルチネイラが激情を露にしながら炎の鞭を振り上げた。

ブウンと限界まで酸素を吸い上げた炎の鞭が強引に振り下ろされる。

「ゴホツ!？」

不意に喉から込み上げてきた違和感にレイドの動きが止まった。消耗戦において遂に限界を来した体が悲鳴をあげ、炎の鞭が容赦なく襲い掛かる。

が、それはレイドを直撃せず少し横に逸れた地面へ衝突した。熱風がレイドの体を吹き飛ばす。

(こいつ?)

全身の痛みにうろたえつつも確実な手応えをレイドは感じた。

再度、7mにまで伸びた炎の鞭がレイドへと襲い掛かるがそれらは全て、照準を見定めずに空を切り地面を無作為に抉り取る。

(もしかして、操作が効かなくなってきた?)

あまりにも大きな炎の鞭は、言わずもがな魔法で形成されたものだろう。周囲の空気と魔力を喰い散らかしながら排出して、その規模をデカくしていく。巨大化した鞭は質量を増やし強化される。

だが、だからこそ重過ぎる鞭が少年を振り回しているようにレイドには見えた。今までの動きと違い、付け入る隙すら見えてくる。

炎熱の壁を前に距離を置くことしか出来なかったレイドに新たな

希望が見え始める。

（わざわざ”これ”を使わなくても大丈夫そうかな？）

自分で自分に問いかける。

レイドは長期戦を見越して、ある魔法を発動させる為の術式を形成。起動の準備に入っていた。わざわざ手間隙をかけて作り上げた魔法を使わないというのも勿体無い気がするが魔力の無駄遣いは避けたい。

いける。このままいけば優勢が優勢に移り変わる。

そう信じて、レイドは剣を構え、間合いを詰めた。

「らあっ！」

炎の鞭を撓らせながらプルチネイラが叫ぶ。

レイドもそれに応えて接近戦に持ち込もうと地面を蹴って駆け出す。

「なっ!？」

だが、炎の鞭の軌道は予想を外れてイリア達の元へと向かっていった。

相手も長期戦での消耗試合はこれ以上、通用しないと察したのだろう。今まで使わなかったのが不思議なぐらいの奥の手に走る。

怒りで頭が真っ白になりかけたレイドだったがイリア達を守るように、自身を壁にするかのように炎の鞭へと自ら当たっていく。駆けて行く時に尻尾が地面を擦れて血痕を残していった。

コトネは確かに見た。レイドがサーベルを構えることすら止めて自分達を庇ってくれた姿を。

あまりにも速過ぎて目で追った光景が脳で処理されるまでに、かなりの時間を有したが――、素人以下の知識しか持っていないコトネでさえも分かる。

300 は超えるであろう不可思議な形状を保ったあの炎が、自分達を庇ってくれたレイドを燃えるという表現が不適切な程に、溶かしているであろう光景が簡単に想像出来た。

けれども、現実はず違った。

レイドは人間の体なんて簡単に裂いてしまえる炎の鞭を片手で抑えながら持ち上げていた。

「ミシミシパシッ、と炎の鞭が異音を立てながら石へと姿を変えていく。」

「彼の属性は……、見た感じ氷でしょうか」

静かに山羊の少年が呟いた。

「コトネはその言葉に眉をしかめる。」氷」？

かなり率直な印象だが、氷は炎に弱いというのが典型例ではなからうか？ コトネには氷である炎に太刀打ちできるとは思えない。

溶かされてしまうのが関の山のはず。

「要は物量よ物量」

まるで間に入ったらレイドの邪魔になると言わんばかりに、コトネ達の傍で待機しているイリアが口を開く。

物量と言われてもコトネには分からない。

分かることがあるとすれば今まで攻め手に回っていた少年、プルチネイラが余裕の無くなった表情で炎の鞭に対し手を掲げ続けるレイドを見据えていることぐらいだろうか。

「と、そういえば自己紹介がまだでした」

不健康そうな顔を上げながら山羊の少年がコトネに視点を変えた。二つのどんぐり眼がこちらを覗いている。

「僕の名前はハロルド・ヴァリスタ」

動かすだけでも辛そうな体を律儀に折り曲げながら、ハロルドはお辞儀をした。

「バース最大ギルド。『ボンド』に属する身、と言ってもあなたには分かりませんよね。適当にハロルドとでもお呼びください」

ハロルドと言う名の少年は、そこそこの名知れたギルドと呼ばれる組織の一員だったらしい。と言っても、そんなことをコトネが知る由も無く、彼の人徳のおかげで自分が救われた事を知ったのは暫くしてからである。

「有り得ない……」

プルチネイラから絶句した一言が零れ落ちる。

「ど、どんな小細工を。魔法を発動させる余裕なんて無かった筈だ」
300度を凌駕し、400度にさえも到達しようとしていた炎の鞭を掴み取られ、ただの石に変えられた。ものの数秒で周囲の炎が姿を消してゆく。

どう考えても人間業で成せる領域ではない。ともすれば魔法で何かしら手を打ったというのが妥当だが、どんな魔法にせよ準備が必要。そんな余裕はレイドに無かった筈なのに一体どうやって……。滑稽にも敵に向かって説明を求めるプルチネイラ。無論、それにレイドは答えるつもりも余裕も無い。

情けも容赦も加減も知らない一撃が瞬時に間合いを詰めたレイドのサーベルから放たれ、プルチネイラの胴体を両断する。

「借りは返したぞ」

「ハ、……ハハ。やっぱ、り、あ、——時よりも強くなって……凄……いやあ」

上半分になつた身体を宙に漂わせながらプルチネイラが途切れ途切れに賞賛と皮肉に塗れた言葉^{まみ}をレイドに送り、散つてゆく。

その体は、宙を舞いながら赤い霧状へと変化し地面に衝突するや否や衣類と共に土へと変わった。

「泥人形^{ゴレム}……属性は土。特性は再生。何度でも蘇る、か」

恐らく、プルチネイラの本体は別の何処かにあり途中ですり替わっていたのであろう。あるいは最初から偽者だったか。複数の個体を有しているのか。土属性の魔法を利用して造られた泥人形^{ゴレム}である事ぐらいしかレイドには推測できない。

忌々しい、とレイドは思う。同時に相手が得体の知れない存在であるうとも殺めるまでに至らなかつた安心感がレイドの心を右往左

往している。

体を両断されたにも関わらず血痕一つさえ流さなかったプルチネイラの残骸へ冷やかな視線を送りながらレイドはサーベルを専用の布で拭う。斬った感触だけが生々しく残っていた。

「魔法陣を形成したのは僕の血だよ」

聞こえていないのを承知の上でレイドはプルチネイラが先程、問いかけてきた質問に答えてやる。尻尾で地面を箒のように払いながら、剣筒にサーベルを収めた。

「ただ逃げ回っていた訳じゃない」

たったの二言で終わらせてレイドは視界を広げる。幸いにも山火事へ発展はしていない。イリアが後方支援で消化にでも回ってくれていたのだろうか。

地面にはレイドの吐き捨てた血反吐が尻尾という筆を以って何かしらの印を描いていた。これが、レイドが魔法を発動させる歯車の役目を果たしてくれたのだ。後は宣言を回してプルチネイラの攻撃に合わせて反撃を行えば良かったのである。

これでも極力、吸わない様にしていた毒素を吐き出しながら、ようやく濁りを薄くし始めた空気を盛大に吸い上げながらレイドはイリア達の元へと歩き出す。

全く、山賊達の拠点にすら辿り付いていないというのに、とんだイレギュラーと出くわした。プルチネイラがどんな理由で山賊達に介入していたのかは検討がつかないが相手の戦力が掴めなくなってしまった。

道化師プルチネイラ。目的も動機も一切不明の犯罪者で奇妙な魔法を巧みに操り、消息を掴ませないことで有名な少年。

外見こそ少年そのものだが、実年齢は誤魔化しているのだろう。

レイドは9年前にプルチネイラと会ったことがある。

(次から次へと……本当に何なんだ)

心の中で毒づきながらも、レイドは雑念を振り払った。障害はひ

とまず去ったのだから。

【蒼の巻】 魔鉱石 11 恐怖激励

「で、お仲間がまだ捕らえられていると？」

緊迫した空気が過ぎ去り、安心出来るとは言いがたいものの落ち着ける場所を取り戻したことで、溜め込んでいた疲労を回復させながらレイドは名門ギルド『ボンド』に属する少年。

ハロルド・ヴァリスタへと目を向けた。

「はい。僕らだけではなく民間人も何人が捕らえられているようです。出身地問わずで」

聖都の負い目だ、とレイドは責めるような言い含めをしたハロルドを見て思った。まさか、他の国の人間にまで被害が出ていたなんて……。

パカロツパカロツと馬が軽快な蹄かひの音を立てながら景色が目まぐるしく変わる。

やっとこさ出発した馬車の中で、レイドは壁際に身を預けるようにして座っていた。

「まあ、そういった行方不明者の情報を手に入れて僕らが動いていた訳ですが……、やられました」

馬車の音で掻き消えそうなほどにハロルドの声は小さい。

「聖都には元々、別の用件で赴いていました。二人で行動していたのですが、その仲間とは引き離されてしまいました。舐めてかかり

過ぎた」

本音が見え隠れするハオルドの言葉が、レイドやイリアの胸に深く突き刺さった。

自国の問題を他国が解消しようと。しかもこちらが気付く前に行動していたと考えると重い責任が押し掛かる。

「お仲間さんの外見は？」

イリアが尋ねる。

「名はラテイル・フィード。蜥蜴とかげ獣人です。鱗は赤色で年齢は30歳半ばの男性。喋り方が独特なので見つければすぐ分かると思います」

これまた随分と異色な面子だ。

衣類に触れなかったのは、それだけ捕らえられていた時間が長かったことを意味する。今のハオルドの服装は汚れた布切れを縫って合わせたような、かなり、がさつなものだ。衛生的にも見栄えも悪い。

登山時にこのような衣服を着る筈がないし、捕らえた人間が保険として、逃走された際に下山が困難となる衣服へ着替えさせられたというのが正しいだろう。

そう考えれば蜥蜴獣人のお仲間、ラテイル・フィードが今現在纏っている衣服を別々の場所に監禁されたハオルドは知らない事になる。

それにしても、

「君ってまだ十二歳ぐらいだよな？　こんな危ない仕事を請け負わなくても良かったんじゃない？」

ギルドというのは、要は簡単に言ってしまうえば何でも屋だ。金や、それ相応に見合った代物を渡せば一部例外を除いてどんな仕事でも請け負うといったもの。

自由国バーロスの治安維持やその他、経営管理等は全てギルドが担っており、聖都の騎士団や帝国の軍人とは違い、面倒なしがらみに捉われず動けるといふ利点がある。それ故、今回も他国の問題に何の躊躇いも無く介入出来たのだろう。だが、そうなると依頼主は誰なのか？　レイドはハロルドの年齢も踏まえながら問い質す。

「別に若いからギルドの人間になってはいけないなんてルールは無いでしょう。それと僕は十四です」

ハロルドの淡々とした言葉にレイドは具体的な否定が思い浮かばない。きつと、バーロスでは認められている事なのだろう。

「まあ、とにもかくにもラティールさんと合流しないとそっちも話にならないんでしょ？」

遠慮の無いイリアの言葉にハロルドは眉をつりあげたが、余計な体力を微塵も使いたくないのか溜め息を吐きながら俯く。

「というわけで、面倒な事は後回しにして目の前の問題に取り掛かりましょう」

強引かつ綺麗にイリアが話の流れをもっていく。

「……あの」

その時だ。突然、馬車に乗るのは初めてなのか軽く酔い気味のコトネがレイド達の会話に入ってきた。

「どうかした？」

声をかけてきた相手の外見のせいで少し動揺したコトネだったが、戦っていた時とは全然違う穏やかな笑みを浮かべるレイドの姿を見てホッと胸を撫で下ろす。

「あの、さっきの……プルチネイラって子について詳しく教えて欲しいんです」

予想外の質問にレイドもイリアも目を丸くした。

「どうして君が奴に興味を抱くんだい？」

丸くしていた目を細めて、レイドがコトネの顔に視線を向けた。その気迫に負けてコトネは目を逸らしてしまう。

「あの子は、私の友人の名前を知っていました。名前はハヤトって言うんですけど、ゴクリユウトウに向かっているって……」

コトネの言葉に耳を疑った。

獄竜島は言葉通り、地獄のような島である。

「その、ハヤト君っていうのは何歳ぐらいなのかな？ 外見とかも分かれれば教えて欲しいんだけど」

目の色が変わったレイド達にコトネはハヤトという少年について話します。

年齢は十六でコトネと同じ年らしい。

大人なら行ってもいいという場所ではないが、子供が行くなら尚更危ない場所に間違いは無い。

外見は”セイフク”を着た学生らしいが、レイド達にはセイフクと呼ばれるような衣服は聞いたことが無かった。

やはり、彼女は自分達とは異なる知識を持っているのだろうか？

とりあえず、黒い髪のショートで背丈は170を越えた辺り。横幅は痩せてもなく太ってもいないという大まかな外見だけは理解出来た。

外見は理解出来たのだが……、

「どうして、そのハヤトって子が獄竜島に向かう必要があるの？ あそこは一般人の立ち入りが禁じられた危険区域よ」

イリアの訝しげな表情にコトネは顔を真っ青にしたが、自身を鼓舞する為か横に頭を数回振ってから、分からないと答えた。

そんなコトネの姿を見たレイドは、

「獄竜島には行かない方が良い」

プルチネイラがコトネに嘘を吐いていると推測した。

目的も動機も分からない相手の言う事を鵜呑みにするのは良くない。疑ってかかるべきだ。

「でも、でもハヤトの名前が出てくる事自体おかしいんですよ！もしかしてハヤトもこっちに……」

何やら切羽詰った表情のコトネにレイドは首を傾げ、困った様子でイリアへ視線を変えた。

彼女も彼女で何やら考え込んでいるようだが、これ以上は混乱させてしまうとレイドに念を押してからコトネの傍に寄り添う。

「とりあえず、手掛かりも無いんだし、こんな所で話しても埒が明かないわよ」

イリアの言葉にコトネは俯いた。

よっぼど、ハヤトという少年の事が心配なのだろうか。

「ふむ。僕は獄竜島がどんな場所か知らないが、そんなに危険な場所なのかね？」

耳元で、珍しく黙りながら流れを観察していたルーフェが囁くようにレイドに問いかけてきた。

「冒険者や旅人。要人でさえも専門家を引き連れなければ立ち入りが禁じられているような場所です」

というよりも、そもそも獄竜島に向かうメリットが無いのだ。

聖王国の最東端には『シャコガイ』という港町がある。

その港町を中心にした湾岸地帯はU字に広がっており、西の山岳地帯から流れてくる川水と海水が溶け込みあつた特殊な地形が相まって珍しい淡水魚や海の生物が多い事で有名である。

そして何よりも、U字に広がった湾岸地帯の中心にある孤島が曲者で――、

「あの場所は潮の満ち引きが激しい上に満潮時には特殊な海流が生まれます。これに吞まれて生きて帰ってきたものはいないと云われる程ですよ」

言うまでも無く今、レイドが語っている孤島の名前こそが獄竜島。

この島は特殊な地形を更に引き立たせ、U字に広がった湾岸へ魚を閉じ込める役割を持っている。おかげで港町の漁業は年がら年中、大漁の成果をあげられる事から獄竜島という名前とは裏腹に恵みの象徴として奉られているらしい。

が、それと同時に獄竜島には『海のヌシ』がいるとされ、特殊な海流を引き起こしているのも、この海のヌシの仕業と噂されている。

人々に恩恵を与えると同時に踏み入った者達を例外なく海の底へと引きずり込む”獄竜島”と”海のヌシ”。

「ふむ。では、どうしてハヤト君とやらはそこに行こうとしているのかな」

「僕もそれが分からないんです。プルチネイラに唆そされて誘導そされてるのかも」

獄竜島という島自体にはこれといって利益になるようなものは拳がっていない。

行くとすれば相当な物好きか、運悪く海流に流されて島に流れ着いてしまった漁師。あるいは港町シャコガイの漁業に支障が来たさないよう、年に一度、調査と点検へ向かう専門家ぐらいである。

少年が行くような場所では決して無いと思う。

「……道化師だったか。君はプルチネイラと何やら険悪な関係にいるようだが、視野を固定し過ぎていないかい？」

まるで、もつと遠く彼方を眺めているような眼差しでルーフェは大人びた声を発した。

しかし、その視線はレイドを直線的に見つめて離さない。

「どういう事ですか？」

「何があつたかは僕の知るところでは無いが、君はプルチネイラが怖いのかい？ 慎重に足を運ぶのは大切だ。彼が何かしら罠を仕掛けている可能性もゼロでは無いだろう。」

だが、プルチネイラという存在に捉われ過ぎて他の可能性を見向

きをしないというのは感心できない」

ルーフエの鋭い指摘にレイドは口をつぐむ。

自分でも気付かないほどに、プルチネイラに対して警戒心という名の視点を置きすぎていたのだろう。それこそ盲点を生み出してしまっぐらいに。

それは何故か？ —— 怖いからだ。

ルーフエの言う通り、レイドはプルチネイラという存在が怖い。

「……恐らく、あの猫獣人が言っていた”人質”とは奴の力によるものでしょう。奴は空間を操ることに長けている」

九年前、レイドはプルチネイラと戦った事があった。

戦闘の最中、プルチネイラが名乗った時に狼狽したのは、これが原因だ。

「無数の糸を張り巡らせ、人形に取り付ける。後は魔力さえあれば何だって奴の手の平の上で踊ります」

魔力さえ無ければレイドだってプルチネイラに勝てると思う。魔力さえ無ければ外見通りの子供なのだから。

しかし、ここまで魔力で満ち足りた場でプルチネイラに勝てるのはレイドには到底思えない。

だから怖い。

こんな場所で奴と出くわすという展開自体が既にレイドの神経を磨り減らし、心を蝕んでいる。

「でも、何となく奴がここにいる理由も分かってきました」

ルーフェから視線を逸らし、俯いていた顔をあげながらレイドは言葉を紡ぐ。

「奴の力の大本は魔力から来ています。だったら魔鉱石に何かしらの興味や執着を抱いて^{いた}ても可笑しくはない」

この世の理も、法則も、仕組みさえも無視する魔力を生成し、クレアシオ全体に流す魔力の奔流と謂われる鉱石。

プルチネイラにとっては喉から手が出るほどに欲す対象になるのではないか。

「確かに、君の言うことにも一理ある。だが、強さや戦力を求めるのはあくまでも何かを成し遂げる為の手段。下準備ではないかね？」

流石は各国を渡り歩いている吟遊詩人というだけある。

年季の入った冷静なルーフェの言葉にレイドも同意の意を込めて頷いた。

「そうですね。だから、ここにいる理由は何となく掴めても目的までは分からない。良からぬことを企んでいるのは間違いないですが」

山賊を利用し、違法な流通ルートまで使って武装を充実させ、誘拐まで行わせる。果てには、その山賊達までも人質として扱っているのだから底知れぬ目的、野望のようなものがあるに違いない。

「僕は奴に勝とうとは思いません。でも、だからと言って目の前で起こっている事を見過ごす訳にもいかない」

恐怖に勝った正義感がレイドに再び活力を与える。恐怖からくる勇気とも言えようか。

ふつつつと湧き上がる思念は一つの形としてレイドの脳裏に焼きついた。

(騎士の誇りにかけて、捕まっている人達も、山賊達も救い出して今ここで起きている問題も突き止める)

それは強い信念。ただ、ひたすらに目の前の問題を解決したいという一見すれば偽善にも似た意思。

いや、言葉通り偽善なのだろう。

騎士の誇りというのは単なる建前で、レイドはただ自分の歪んだ心を満たしたいだけなのかもしれない。

しかし、偽善も貫き通せば建前や欺瞞きまんを覆い尽くして強大な力に変わる。

レイドが決意を新たにしていると、ガタン、と何かに引っ掛かる音を立てて馬車が動きを止めた。

【蒼の巻】 魔鉱石 12 魔性

「ここから先は徒歩でしか進めないみたいだ」

むしろ、こんな山奥まで進めたのを誇るべきか。ロアの操縦テクニクもさることながら優秀な馬である。

「探索と待機に人員を分けた方が良いかな」

いち早く降りたレイドは前方の細い上り坂を見据えながら呟いた。周囲に敵の気配が無いことを確認してから、ルーフェ達にも降りるよう伝える。

「俺は魔力に耐性がある。ルーフェは馬車で待っていてくれ」

ロアが馬を一撫でしながらルーフェに声をかける。

「ふむ。魔鉱石マナーナスが実際にあるなら一目拝んでみたかったが……ロア君の頼みなら仕方が無い」

待機するメンバーは馬車の運転と点検が可能なルーフェ。体調が芳しくないハロルド。そしてコトネ。最後に彼ら三人を守る為にイリアが残る事になった。

探索にあたるのは残る三人となる。

「でも、本当に大丈夫？ さっきの戦闘でも大分、消耗してるみたいだし」

竜人の血が半分を占めているレイドの体は魔人ほど魔力に対しての耐性が無い。先程もプルチネイラの魔法が放出していた魔力によって血を吐いていた。探索にあたるのなら、レイドに残ってもらう方が良いに決まっている。だが、

「僕の戦い方はどちらかと言えば攻めに向いているんだ。これから向かう先に山賊達の残党がいるのは間違いない。プルチネイラの本体がまだいるかもしれないし、イリアには守りに徹して欲しい」

無理をしている。それはレイド自身、自分の体だから分かっているし、騎士団での付き合いが長いイリアにも見抜かれている事だろ

う。

「……はあ、しょうがないわね。ここは私が絶対に死守するからさっさと帰ってきなさい」

しかし、イリアはレイドを止めない。どうせ止めようとしても無駄だと思っし、レイドの言う通り、イリアはどちらかと言えば守りを専門とした根っからの騎士だ。

イリアが得意とする陣術は戦場が二転三転する戦場では展開しづらい。逆に言えば一箇所に留まっていれば十二分にその真価を発揮できる。

逆にレイドは騎士であるにも関わらず攻撃に特化した戦法と剣術に秀でている。防戦一方を強いられたプルチネイラとの戦いでは苦戦していたが、攻めに転じられれば圧倒的な強さを誇るのだ。

それに、何よりもイリアはレイドを信頼している。戦闘力から情報分析力まで、少し悔しいがイリアはレイドに勝てる気がしない。だからこそ、その強さを知っているからこそ頼もしい背中を素直に見送ることが出来る。

「うん。必ず帰ってくる。捕まってる人達も全員連れ戻します」

イリアに笑みを送ってからハロルドにも聞こえるようにレイドは宣言した。

山風がレイド達の肌を掠^{かす}めていく。

「行くとするか」

機械音声越しに放たれたロアの言葉にレイドは頷き、押し黙っていたヴィロ教授も足を動かし始めた。

「……熱と土の人口生命体」
ホムンクルス

プルチネイラの人形と呼ぶべきか。あの人形を形成していたモノ

は魔法で人型に練り上げた土とそれに魂を吹き込む為の炎。厳密に言えば繊細に熱を加えていき造られた導力器だ。

これ等が備わり、人間とほぼ同じ外見をした一体の人形を創り上げていた。

ここは、空気がこれでもかというぐらいに濁った洞窟の中。

埃を払った石造りの椅子に腰掛けながら、全身に独特の紋様が入ったローブを着込んでいる男は溜め息を吐いた。崖の上でプルチネイラと会話をしていた男だ。

人形は本体ではない。

遠隔操作で制御されている人形には細かい調整が効かない。空間魔法なんて頭の痛くなるような演算が必要になる魔法は人形如きに扱えないし、炎の鞭を強化し過ぎるあまり、自分の手に余る程に重くなってしまうという誤算も人形であるが故に生じたもの。

恐らく、敗因はそこにあると密かに戦いを監視していたローブ姿の男は考えたが、レイド・コールと自ら名乗った騎士が取った作戦と魔法の前には幾ら戦術のミスを改善しても人形であるプルチネイラでは、どのみち勝てなかったのかもしれない。

「やれやれ。結果を急ぐ必要があるそうだ」

ローブ姿の男はフードを捲りあげながら立ち上がる。

ショートの銀髪が見え隠れし、肌白の顔を僅かに覗かせた。

ローブ姿の男が見つめる先には紫色に発光する全長4mは越すであろう巨大なクリスタルが聳え立っていた。その周囲には工具が転がっており、幾つもの木の板を嵌めて作った足場がクリスタルを中心に造られている。

魔鉱石。

元は鉱夫であった山賊達を貧困へと追い込み、この周辺を人目の

つかない辺境へと変貌させ、拳句の果てには自分達のような山賊達とは大きく異なる心根から悪に染まった者達に利用されるような代物。

あらゆるものに大きな歪みを発生させている原因が堂々かつ異様な存在感を醸し出していた。

「オイ！　ここまで立ち入るのは許してないはずだぞ」

背後からかけられた猪獣人の大声が大空洞に反響し、ローブ姿の男は耳障りだと顔をしかめた。

「これは失礼」

「……それよりもお前に折り入って話したいことがある」

突然、態度がデカかった猪獣人が何処か弱った様子でローブ姿の男に近付く。

物資を山賊達に補給する為の細かい伝達を任されていたパイプ役であるローブ姿の男でさえ立ち入り禁止と念を押されていた場所に勝手に入り込んだというのに、猪獣人は”それよりも”の一言で片付けてしまった。

ローブ姿の男にとって、それは予想外の反応であり、同時に事が上手く運び過ぎていて苦笑が込み上げるのを抑えるようなものだった。

「何だ？」

「俺達の縄張りに侵入してきた騎士団の連中と、変な少年の戦いを見たが、ありや人間同士の戦いとは思えねえ。あんなのがここまで迫ってきたら、もう俺達には後がねえんだよ」

どうやら、山賊達もレイドとプルチネイラの一戦を見ていたらしい。

確かに彼らにとっては、人間同士の戦いと表現するには些か次元が違い過ぎるものなのだろう。人間ではない別の存在に捉えてしまったのだろう。

それがここまで迫ってくるともなれば恐怖するのも理解できる。

「……秘策がある。侵入者共を纏めて叩ける秘策がな」

「それは何だ！？俺はヘッドとして仲間をこれからも養っていかなくちゃならねエ。教えてくれ！」

「それはな」

竜の紋様が刻まれた錫杖を取り出してローブ姿の男は、

「こうするんだよ」

突然、錫杖を猪獣人に向けて刺した。

錫杖の先端部分からは眩い光を発する三叉槍が顔を出していた。

ズブリ、と音ではなくどちらかと言えば猪獣人の肉を貫く感触がローブ姿の男に伝わってくる。

「ガハッ、グエヒア……」

何をされたのか理解が追いついていないのか、猪獣人は焦点の合わない眼球をうごめかせながら喘ぎ声をあげる。

「生贄を逃がしたお前が悪い。代替以下の質しか持ち合わせていないだろうが、その体で代償はしつかり支払ってもらおう」

ローブ姿の男は猪獣人の安否など気にせず、その体を突き刺したままの三叉槍を上へ上へと持ち上げた。

「グッ、ルシイ……ア……ギャ」

苦しそうにもがく猪獣人の体から血が垂れ落ちる。

そんな猪獣人の様子には目も暮れずにローブ姿の男は三叉槍を持ち上げたまま魔鉱石の元へと歩いていった。

一步、歩く度に三叉槍を伝う衝撃が猪獣人の肉を引き上げ、引き下げ、抉っていく感触に不快感を得ながらも、ローブ姿の男は魔鉱石のすぐ傍まで移動して、ようやく三叉槍を猪獣人の体から引き抜いてやる。

引き抜かれた瞬間、傷口から大量の血が噴出し、ショックで猪獣人は気を失った。

ここまで良く耐えた方だとローブ姿の男は地面に突っ伏した猪獣人を腕で持ち上げ、魔鉱石に猪獣人の傷口を擦りつけた。

「ここまで恥辱に震わされれば、魔鉱石の”主”も顔を出してくれ

る筈なんだがな」

ローブ姿の男は溜め息を吐きながらも瀕死の猪獣人に治療を始めた。その腕から緑色のオーラののようなものが発せられる。

獣人にとって魔力は毒だ。

既に瀕死に陥っている猪獣人にこれ以上、魔力を注ぎ込むのは拷問に近い所業だが、延命の魔法をローブ姿の男は猪獣人に無理やり施す。

「他の連中は約束通り、助けてやるよ。死ななければ、立ち直れる可能性ぐらいは保障されるだろ」

嘲笑しながら、ローブ姿の男は三叉槍へと変貌した錫杖を頭上へ掲げて叫ぶ。

「泥の底に潜む異形よ。我は”魔導師”。我の言葉に命じ、その力を存分に発揮しろ」

ローブ姿の男が叫び終えた数秒後、地鳴りのような轟音が鳴り響き、この大地一帯に眠っていた化物の片鱗が呼び覚まされる。

眠りを妨げられた化物達は地中で暴れ回りながら、睡眠の代わりとなる欲望を満たしたいが為に地上へ昇ってくる。

飢えに飢えた食欲を満たす為に。怒気に満ちた感情をぶつける為に。その全力を以って地上へ顔を出した。

【蒼の巻】 魔鉱石 13 不良瘴気

瘴気に満ち溢れた空気は吸うだけで気分が悪くなる。

異臭はしない。魔力は無臭だ。

だが、無臭だからこそ気付いた時にはもう遅いという危険性が纏わりついてくる。危険の二文字が全身を撫でるように這いよってくる不快感を覚えながら、レイド達は慎重に歩みを進める。

「何処もかしこも穴だらけ。これでは全て探す前に日が暮れてしま
う」

男とも女とも判別できない機械音声でロアが周囲を見渡した。

「魔力の源を探すといっても、ここまで充滿していると根源を見つ
けるのは骨が折れそうですね」

眼鏡に纏わりついた砂塵を布で拭き取りながらヴィロが弱音を吐
く。

今、レイド達がいるのは恐らく山頂付近だろう。一帯にはどうや
って建造したのか穴倉のような構造の家が幾つも建て並んでいた。

山賊達の休憩所といったところか。

元はここを拠点にして、鉱夫達が家族を養いながら鉱石を掘る仕
事に就いていたのだろう。

だが、そんな面影は今ももう無い。一粒たりとも残っていないように見える。

静まり返った休憩所には風だけが虚しく吹き荒れていた。

「……気配が無い？」

静けさが漂う休憩所には人の気配が一切無い。

こんな環境だ。人がいなくて至極当然のようにも思えるが胸につかえるものをレイドは感じた。

試しにレイドは近くに転がっていた石ころを一つ摘み上げ、遠くへと投げ飛ばしてみる。

石ころは風化した建物にぶつかり、二回三回と地面を跳ねながら何事も無かったかのように静かな大地へと溶け込んでゆく。

「反応も無しか」

本当に誰もいないのだろうか。

——それとも罠か？

レイドは先頭に立ちながら慎重に安全な道を確保していく。

「待て。一旦止まれ」

ロアが後ろからレイドの腕を掴んで引き寄せせる。

「何かが近付いてきている」

早口にまくし立てたロアは自身の剣帯に吊るしてあるエストックを抜き出しながら構えた。

それに呼応してレイドも常に構えていたサーベルに力を加えて、ヴィロを守るように立ち位置を調整していく。

数秒後、異変は地鳴りと共に真下から襲ってきた。

嫌な音を立てながら足場が崩れていき、人工的に作られたと思しき空洞がその姿を現す。

「まずっ!?!」

気付いた時にはもう遅く、レイド達は足場を失い空洞へと落ちていった。

咄嗟にレイドはヴィロの体に手を伸ばし、滑り落ちる流れに身を任せた。無理に落ちるのを拒否すれば、突出した岩に体を引き裂かれてしまう。

「ロア!」

「こちらは大丈夫だ」

異変にいち早く気付いたロアだけは空洞へ落ちずに頭上からこちらを覗くように見下ろしていた。

滑り落ちるとこまで落ちて、ようやく動けるようになったレイド

は砂埃を払いながら周りに目を向ける。

横幅が大して無い廊下のような場所だ。

ヴィロが突然の出来事に困惑しながら落とした眼鏡を探しているところだった。

岩の間に引っ掛かるようにして落ちていた黒縁の眼鏡をヴィロに手渡す。

「ありがとうございます。にしても、ここは一体？」

「落とし穴だと思いますよ」

レイドは光の差し込む頭上を見上げながら崩落した部分に手を当てて答えた。

サラサラした砂と、適当に積み上げましたと言わんばかりに不安定な耐久性を施された土。蟻地獄を応用したような仕掛けが為されている。

偶然、老朽化していた足場が事故で崩れたとは考え難い。

「どつする？」

自分に自分で問いかける。

しかし、レイドの問いかけにレイド自身の答えは返ってこない。

「この場所。元は連絡道だったのでは？」

ヴィロが渡された眼鏡のピントを合わせながら目の前に広がる暗がりを指差した。

「もしかしたら他に道があるかもしれません」

確かに、ヴィロの言う通りかもしれないと、レイドは思った。

地中に作り上げられた連絡道。毛細血管のように広がった通路は迷路のように入り組んでいるかもしれないが、上へあがれる道もあるに違いない。

「灯火よ」

ヴィロが手元から取り出した小枝の杖で落書きのように地面に魔法陣を描いた。

ポウつと杖の先端部分に光が灯り、今まで暗闇に身を潜めていた道が姿を現す。

細長い道はヴィロが魔法で灯した光でも照らし出せないほどに長細かったが、それは同時に道が続いていることを意味していた。

行き止まり宣言をされるよりは幾分かマシだ。

「何をしている馬鹿者共が！早くそこから離れろ！」

そんな事を考えていたら真上から響いてきた怒号にレイドは我に

返った。

瞬時、ヴィロの手を引いてその場から駆け出す。

爆音と共に左右の壁が掘り崩され、衝撃がレイドの背中を襲った。

ロアは何と言っていた？

レイドとヴィロが空洞に落ちる少し前、何かが近付いてきていると警告していたではないか。

「クツ……」

粉塵のマントを翻してサーベルを突き立てながらレイドは歯軋りした。突き立てた先には大きく長細い影がある。

最初は爆薬か何かが仕込まれており、段階的に地面を崩落させてからレイド達を木っ端微塵にする仕掛けだと予測していた。

だが、爆薬なんて一個も仕込まれた形跡は無く、その代わりに生命の溢れる姿が顔を見せる。

そこにいたのは茶色い体躯に目も鼻もない顔を突き出しながら真っ赤な口を開ける化物だった。

嫌な叫び声と体液を撒き散らしながら飛び出してきた化物の体を、レイドは真っ二つに引き裂き、更に剣を振るい続ける。

敵は一匹だけではない。

「走って！」

地鳴りが地割れへ変貌し、レイド達を生き埋めにしようと岩壁が崩落の兆しを見せる。

後方からは大口を開けただけで人一人は飲み込めそうな化物が牙を剥き出しにして襲い掛かってきていた。

逃げ道は前方のみ。

とにかく走るようヴィロに伝えながら、レイドは化物達をあしらいつつ、バックステップの要領で後ずさる。

「ええい」

次から次へと縦横無尽に壁を掘り起こしてくる化物達に苛立ちを声にしながら、レイドは眼前まで迫ってきていた岩の一つを両断した。

「レイドさん。道が……」

ヴィロの悲鳴にレイドは背後を振り返る。

そこには行き止まりを示す茶色の壁が立ち塞がっていた。

右も左も無く、ただただ壁だけが迫ってきている。

「伏せて」

振り返りざま、レイドは回転斬りで迫り来る化物を切り裂きなが

ら跳躍。

目の前に立ち塞がる壁を一刀両断する。

(予想通り)

推測が外れていたらどうしようかと迷ったが躊躇わずに衝撃を加えて正解だった。

目の前に立ち塞がっていた壁は偽者^{フェイク}。建前で作られただけの柔らかい土だ。周囲とは似ても似つかない土色のおかげで判別がついた。そのまま勢いに任せてヴィロを担ぎ上げ、レイドは一直線に崩れていく壁を突き抜けていく。

今までの廊下状とは打って変わって、大広間のような大空洞がレイド達の眼前に広がった。

「な!?!」

その大広間のような大空洞の中央に生えるように立っている存在にレイドは絶句した。隣でヴィロが息を呑む音が聞こえる。

紫色に発光する四メートルは越すであろう高さのクリスタルがそこにはあった。

体表から靄のように放出されている魔力が妖艶さを引き立たせている。その強大な魔力に化物達は近付けないのか大空洞の外側で唸りをあげて怯えている。

「まさか、これが魔鉱石^{マイナス}」

ヴィロが存在を肯定し、イリアが存在を否定していた鉱石の名前

が、レイドの脳裏を過った。

「まさか、これが魔鉱石」

クリスタルの外周を周るように移動しながらレイドは呟いた。

そして気付いてしまう。

岩壁は全て風化しているというのに傷一つ無い魔鉱石に粘着質の赤黒い何かがこびり付いている事に。見るだけで嗚咽感を加速させるものがあることに。

「流石に、あの程度の魔導獣じゃ切り抜けられてしまうか」

背後から聞こえてきた声にレイドは振り返る。

フードとローブで全身を包み隠した、あからさまに怪しい青年が立っていた。

「あなたが、やったんですか？」

レイドは、ローブ姿の青年にサーベルを向けながら、魔鉱石へ体をもたれかけながら意識を失っている猪獣人を視線で示した。粘着質の赤黒い何かの正体は、この猪獣人の血液だろう。

「そいつの血だけじゃ足りないらしい」

「その言葉。自白という事で良いんですよね？」

「ああ、そう解釈してくれて構わない」

臨戦態勢に入ったのか、ローブ姿の男が右手に携えていた錫杖しゃくじょうを頭上に掲げた。

先端部分から三叉さんちくに分かれた刃が出現し、錫杖が三叉槍へと変形する。

何の為に、ローブ姿の男がここにいるのかは分からない。だが、敵である事は間違いないだろう。

「ヴィロ教授。僕があいつを引きつけますから、魔鉱石の裏に周って隠れていてください」

ローブ姿の男に気付かれぬよう、小さな声で早口にまくし立てながらレイドは剣を振り上げて突撃した。

火花が散る。

金属と金属がぶつかり合う振動が、腕から全身を伝って響いていく。

「プルチネイラが世話になったな」

「貴様ツ！ プルチネイラの仲間か」

フードに隠された顔が、二人の間に吹き荒れた衝撃によって露わになった。

銀髪のシヨートに整った顔立ち。予想よりも若い顔つきはレイドと同一年ぐらいに思える。

「魔人と竜人のハーフ。噂には聞いていたが、本当にこんな混ざりものが実在したのか」

サーベルに加える力をあげると、力勝負では勝てないと悟ったのか、ローブ姿の男が三叉槍を盾に三步ほど距離を取った。

しかし、レイドは距離を取ろうとするローブ姿の男に暇を与えず畳み掛ける。

余裕の顔つきをしていたローブ姿の男はレイドの猛攻に対し、舌打ち交じりに罵言を放った。

「中々どうして強いな。お前のような化物、プルチネイラが気に入るのも納得だ」

気にも留めずに、レイドは防御の緩んだ脇腹へと蹴りを入れる。

「なっ!?!」

レイドの蹴りを、ローブ姿の男は空いた左手で受け止めながら三叉槍を突き出した。虚をつかれたレイドの顔面に刃が迫る。

それを、サーベルで受け止めると、今度は左足が突き上げられた。レイドの猛攻によって、二人の間合いは極限まで詰められている。死角から襲い掛かってきた膝蹴りにレイドは自分の体が浮くを感じた。

視界が暗転し、背後に聳えたつ魔鉱石に背中を打ちながらレイドは悶えた。

「おいおい。この程度か？」

嘲笑しながらローブ姿の男が走ってくるのが見える。

レイドは身の危険を感じて咄嗟に頭を伏せた。

三叉槍が頭上を掠めて魔鉱石へ衝突する。魔鉱石には傷一つつかず、そのあまりの硬さに、ローブ姿の男の方がよろめいた。

チャンスを逃さず、レイドはその体に掴みかかりながら頭突きを加える。

勢いに任せて押し倒しながら、レイドはサーベルをローブ姿の男の首に突き付けた。

「お前達の目的は何だ？ 魔鉱石を使って何をしようとしている」

「答えると思うか？」

「答えなければ死ぬだけだ」

ローブ姿の男の首は細かった。この程度なら、いつでも首をへし折れる。

しかし未だ、余裕の表情を浮かべるローブ姿の男に面喰いながら、レイドは何かが目み上げてくるのを感じて口を塞いだ。

(まずい)

魔力中毒。

咄嗟に過ぎる四文字。

有害な毒素に満ち溢れた空間で、レイドの体は知らぬ間に浸食され悲鳴をあげていた。

視界が揺らぐ。ローブ姿の男を拘束していた力が入らなくなり、

「尋問するなら場所を選べ。素人が」

腹部に強烈な掌打を加えられ、レイドは地面を転がる。

喉元から鉄の味が溢れ出し、体が思うように動かない。魔力を体に浴び過ぎたせいではなく、ローブ姿の男が放った掌打の力によってだ。神経が麻痺したかのように脳の命令を体が無視する。

唯一、動かさせた眼球を真上に向けると、三叉槍を振り下ろそうとするローブ姿の男がいた。

(動け)

心の中で願っても体は動いてはくれない。

「見つけたぞ。この竜泥棒がああああああ!!」

レイドが死を覚悟したその時だ。

女性的な雰囲気を感じさせない、男勝りな声が大空洞に木霊した。この声にレイドは聞き覚えがあった。

ビュウ、と突風が吹き荒れ、ロープ姿の男が横殴りに吹っ飛ばされていく。

「そんな所で寝てんじゃねえぞ」

紫の鱗が特徴的な女竜人。レナが迅槍じんそうを背中に担ぎながら立っていた。

強引に道を切り開いてきたのか、突風が吹き荒れた方向には大穴が空いており、その中心でレナは不機嫌そうな表情を浮かべている。

「レナ。どうして君がここに」

麻痺していた体の神経が時間の経過と共に戻ってくる。

レイドは、ふらふらと立ち上がりながらレナの姿に目を疑った。

荒療治の後のような包帯が左手に巻かれており、火傷を負ったような跡が、あちこちに残っている。

「その竜泥棒にやられた」

「竜泥棒？」

いまいち、状況が把握できない。レナはロープ姿の男を指差して、何やら怒りに似た感情を投げつけているように見える。

「ロード・ピアッチェ。牙竜国の魔導師だった男だ。そして、魔導獣であるワイバーンを奪って逃走した犯罪者だ！俺は、こいつの足取りを追って聖都までやってきた」

レナの怒号が響き渡る。戦局は変わった。

その頃、馬車で待機していたはずのイリアは山賊達の拠点の中を疾走していた。

「待ちなさい！」

「駄目。呼ばれてる」

理由は、今イリアの目の前を走っている少女にある。

華奢な体躯に東洋の出で立ちをした少女。コトネだ。

イリアの静止を、上の空といった様子で無視したコトネは、二度目だが様子がおかしい。まるで、何かに憑りつかれているかのよう
に何処かへ向かっている。その手には、お札が握られており、紫色の電流のようなものを奔らせながら光っていた。

その背を追いながらイリアは、

「ああもつ。邪魔しないで！」

良く撓しなるロッドで山賊の腹を横殴りにして、コトネの背中を追いかける。

コトネの足は、そこまで速くない。一方、イリアはそれなりに鍛えられた脚力を活かして走っているが、一向に追いつける気配が無い。矛盾している。

この矛盾には明確な訳がある、とイリアは推測していた。

恐らく、あの禍々しく映る発光を引き起こしているお札に原因があるのだろう。

「その御札を捨てて、こっちに來なさい！」

「駄目」

頑なにイリアを拒むコトネはお札を離さない。山道だというのに片手を塞いでまで持っているのだ。

あれが大切なものであろうことは誰が見ても明白だった。

（困ったわね。幸いにも怪我してないから良いんだけど……あれ？）

イリアは違和感に気付く。

誰一人としてコトネに危害を加えていない。山賊達は彼女の姿を見ても一拍置いてから、はっと我に返ったように、コトネの背中を追っているイリアへと攻撃を仕掛けてくるのだ。

（なるほど。不幸中の幸いか）

結果的に御札はコトネを守っているのだろう。

目的は不明だが、少なくとも山賊達からコトネを遠ざけているのかもしれない。だがそうになると、イリアにもコトネから遠ざけられるような細工を施されているのか。もしも、予想が当たっているとすると何かと面倒だ。

そうこうしている内に、開けた遺跡のような場所までコトネは走って行ってしまふ。

そこで、ようやく止まってくれた。もう、進める道が無くなったとも言える。今、コトネが立っている場所は高台のようになっていて、眼前には横幅で人間二人は納まるであろう大きさの碑石ひせきが佇んでいた。

「見つけた……」

碑石は黒曜石で造られているようで表面を削って描いたのか、黒い鳥の羽ばたく姿が描かれている。

更にその表面には、コトネの持つ御札と同じ紫色の発光が起きている。紫色の発光は削って描かれた黒い鳥のラインに沿って流れるように発生しており、まるで、この碑石に描かれた黒い鳥が生きているように見えた。

しかし、それよりも目を引くのは碑石と連結するように造られた足場である。足場には液体を流すことを目的にしたのか幾つかに枝分かれした溝が線を引いており、地中に向かって伸びている。

この碑石が足場とワンセットであるなら、L字型の造形物と例えて良いだろう。

(でも、これじゃまるで……)

何かの祭壇のようだ。碑石が象徴的なものであるとするならば足場は何かを捧げる場所に思える。直観的に嫌な予感を感じたイリアはコトネを引き寄せなるべく走った。

だが、やはりコトネには近付けない。絶対的な力場が、同じ極を合わせた磁石のようにイリアを少女の元から引き離す。

見えない風のようなものに弾かれながら、イリアは碑石に霧が掛かっているのを見た。

妖気、靈気、邪気、瘴気。

ネガティブな二文字ばかりが頭に浮かび、咄嗟に叫んだ。

「その子から離れなさい！」

手を伸ばす。手が届かない。手を伸ばしたら伸ばしただけ跳ね除けられる。

「離れなさいって言うてんのよ!!」

イリアの発した怒気と焦燥が魔力に変換される。宙に舞った自身の取り分(魔力)で魔法陣を描きながらイリアは強引に一步、更に一步とコトネに詰め寄っていく。

後、少しなのだ。後、少しで、あの禍々しい妖気から少女を助けることが出来る。

「……彼は怒ってる。自分の地を荒らされた事に。力場の流れを変えられた事に。私達がいる事にも」

冷静とも取れる淡々とした声でコトネが言った。

「息苦しいの？ 今、そこから出してあげる」

あろうことが、コトネは得体の知れない碑石の黒い鳥に手を触れて優しい声色で、子供を慰めるように囁いた。

瞬間、イリアの視界は遮られる。黒い羽根が万遍なく眼前に映る光景を塗り潰したからだ。何十何百何千と敷き詰めるかのように舞っている、黒い羽根の大群を払い除けながら腕を前に出す。

「駄目！」

イリアは全力で叫んだが、ぶわさ！ と、鳥が羽ばたくような音によって虚しくかき消される。黒い羽根の横断幕が羽ばたく音と同時に四方八方へ飛散した。遮られていた視界の先にいたものを見てイリアは絶句し、ある一言を口にする。

「魔導獣……？」

【蒼の巻】 魔鉱石 15 渾身の意思をぶつけよ

魔導師、まどうし魔導獣。まどうじゅう

知らない言葉が次々と飛び交い、レイドの顔は困惑の色に染まる。イリアなら何か知っているかもしれないが、肝心のイリアが今はいない。

とりあえず、牙竜国にとってローブ姿の男、ロード・ピアッチェは国外逃亡した犯罪者であるという事は理解できた。

「全く、しぶとい女だな」

いつの間にか、突風に吹き飛ばされた筈のロードが立ち上がり、先程とは似ても似つかぬ感情的な目つきでレナを睨んでいた。

レナも負けず劣らず、睨み返しながら迅槍を肩の上で数回、揺らした。

「リベンジマッチと行こうじゃねーか。竜泥棒」

迅槍を振り上げて、是非を問う暇も与えずに、レナが突風の塊を飛ばす。

ロードは、それを難なくかわして、レナの元へと駆け走っていく。

加勢するべきか？

レイドは暫し悩んでから、ヴィロの元へ向かう事にした。猪獣人

の安否も気になる。

「グイロ教授。何か分かりましたか？」

魔鉱石を手袋越しに触りながら難しい顔をしているグイロにレイドは声をかける。しかし、相当、熱中しているのかレイドの声はグイロの耳に届かなかった。

仕方がないと、レイドは猪獣人の安否を確認する。

死んではない。だが、植物状態のように意識を失ったまま目覚める気配もない。

「……」

思わず、レイドは息を呑む。猪獣人の体には生々しい切り傷が刻まれているが、それらは応急措置で塞がれており血も止まっているけれど、このままでは、いつ死んでもおかしくない。

なのに、レイドには目の前の人間を救う手立てが思いつかない。無力さを痛感しながら歯噛みすることしか出来ない。

「……る」

気を失っていたはずの猪獣人が口を開いた。

微かに零れた、その声のニュアンスにレイドは本能的に武器を構える。

猪獣人が腰のベルトに垂れ下げていた苗刀を手にとって、レイド

へと襲い掛かってきた。幾度となく使い続けたサーベルが苗刀の重量に圧されて軋み出す。

「クッ！」

先程まで死にかけていたとは思えない力にレイドは立ち向かう。

「なるほど。人形というのは汎用性が高いな。瀕死の人間を無理やりに突き動かすことさえ出来るとは……」

ロードの言葉に、レイドはサーベル越しに映る猪獣人を睨む。これも、プルチネイラの仕業だと言うのか。

「てめえの相手はこの俺だ。よそ見してんじゃねえ」

豪快に振り回される迅槍を、やり過ぎしながらロードは尚も続ける。

「しかし、魔鉱石の力は死人を蘇らせる事さえ容易に実現してしまうのか」

「よそ見してんじゃねえって言うてんだろっが！」

豪！ と暴風が吹き荒れ、ロードは目の前の相手に集中し出す。

（死人を蘇らせる？ つまり、この人は既に……）

死んでいる。

では、この力の源は一体どこから来ているというのか。猪獣人と

罅迫り合い（つばぜりあい）を繰り広げながらレイドは思索する。

これも、魔力の為せる業だと言うのか。

「あなたは自分が何をしているか分かっているのですか？」

レイドは、ある一つの可能性に気づき猪獣人へ問いかけた。

「俺は…俺は…ここに…いる…奴ら…助ける…」

一語一句に間を置いた喋り方。だが、しかし猪獣人には理性が残っているようだ。いや、残っているのではなく蘇ったと言った方が正しいか。レイドは自分の予想が当たったことに内心、驚きながら会話を紡ぐ。

「僕が、僕達が、ここにいる人達を救い出してみせます。だから、お願いだから剣を引いて」

徐々に後ろへと後退させられる、レイドの苦し紛れの要求に一瞬だけ猪獣人の苗刀に加える力が弱まった。すかさずレイドは押し返すが、罅迫り合いは拮抗を続ける。

「嘘だ。お前達は…俺達を…追い詰めて」

レイドは目を疑った。

猪獣人の理性が更に戻ってきている。口調と口数がそれを証明するかのように人間味を帯びていく。

「お前達…聖都の連中は…俺達を何処まで…追い詰めりゃ気

が済むんだ！」

人間味を増すと同時、苗刀に加わる力も増していく。

「お前達のせいで、俺達が……どんなに理不尽な労働を強いられて、きたと思っただがやる！」

ぎらつく眼光に生気が宿り、憎しみの色に染まっていく。

「お前達さえいなけりゃ、聖都の腐った正義感が無ければ俺達はまだ……」

「いい加減にしてください」

重みを載せた言葉をレイドは叫んだ。

「その言葉を、同じ言葉を！ あなた達が攫った人達にも言えますか？」

圧力の増した苗刀に呼応して、サーベルに加える力を高めながらレイドは猪獣人の顔を真っ直ぐに見据えた。

目を逸らす訳にはいかない。悠々と当たり前のように与えられてきた聖都の平和が、彼ら山賊達の人生を食い潰していたことに対する事実を受け止めながら、猪獣人の憤りに応える。

「どうして、どうして、こんな非道なことを仕出かしてまで、あなた達は聖都に助けを求めようと考えなかった！」

聖都が、彼らをどん底に突き落としたのは今ではなく過去の事で

はないか。

「ふざけんな！ 求めたところで救われぬ。どうせ待ち受けているのは牢屋の中だ」

猪猡人達は後戻りが出来ない所まで来ていたのだろう。

社会に助けを求めたところで、正義という名の非条理的な鉄槌を下される。犯罪者という印を捺されるぐらいなら墮ちる所まで墮ちた方がマシ。そして、そんな荒んだ感情をプルチネイラやロードに利用された。

「ふざけているのは、どっちだ」

胸に込み上げてくる思いをレイドは吐き出す。

「罪は結局、どこまで行っても罪なんだ。償う氣を失ったあなた達に罰の先にある解放なんて、いつまで経ってもやってこない！」

自分で言っていて何て非情な言葉だろうと思う。結局の所、彼らを不幸の淵に貶めたのが聖都であることに変わりはない。

聖王国の政治の殆どを握っているのは聖都だ。だからこそ、聖都は平和でなければならない。平和というイメージを植え付けなければならない。

つまり、聖都が平和の象徴的存在とされているだけで、別に聖王国全体が平和な訳では無いのだ。あくまでも治安が良い国とされているだけで、聖王国にも亜人戦争の残した傷跡が至る所に蔓延っている。

その結果、欲に目が眩み、ろくに地質調査もせずに鉱石を掘らせ続けた政府のせいで、元鉱夫だった山賊達は運悪く、魔鉱石を掘り当ててしまったのだろう。

充分、彼らは罰を受けたでは無いか？ 罪も無いというのに充分すぎるほどの罰を強いられていたではないか。これ以上、彼らの心と体を痛めつける必要なんて無いじゃないか。

——だが、だからこそ、レイドは疑念を抱かない。これ以上、彼らが罪を重ね続ける結末だけは絶対に食い止めてみせる。

「ふ……ざけるなああああ！」

当然の怒りが全力となってレイドに襲い掛かった。

それでも、レイドはたじろがず、じつと猪獣人の顔面を見据える。

「ハハツ、ハツ。全身に力が漲ってくるぜ。こんなすげえ力があるなら聖都だって潰せる。聖王国をもっと良い国に変えられる。手始めにお前を血祭りにあげてやるぜ」

「……」

最早、言葉はいらなかった。

ただ握っている剣に全てを込めて、ぶつければ良い。

「どうした？ さっきまでの軽口は何処いきやがった？ 悔しかった」

たら返してみろよオ！」

レイドのサーベルと、猪獣人の苗刀がこれまでに無いほどの力を発して衝突した。

許容量を超えた金属が砕け散る。サーベルが鈍い音を立てて折れたのだ。しかし、それはレイドの持つ武器に限った話ではない。

猪獣人の持っていた苗刀がサーベルと共に粉碎し、重心を失った二人の体が詰め寄せられる。

一度、全部壊すべきなのだ。こうして力と力が重なり合い壊れてしまった剣のように、聖王国の間によって犠牲になった山賊と、その山賊達を見過ごし続けた聖都との関係を。

「確かに聖王国は、あなた達に不幸な道を歩ませ、それを糧に造られた聖都の豊かさは皮肉に映ったしれない。でも——」

後戻りの出来ない道筋なんて壊してリセットすればいい。何度だってやり直せばいい。その為の手助けなら、それが聖王国の為にも繋がるというのなら、レイドは喜んで協力する。

「まだ、お前達には、やり直せるチャンスがある。そのチャンスが潰えないように。これ以上、聖都が愚を犯さない為にも、」

双方の武器が壊れることを見越して、体重を載せていた左拳を猪獣人の顔面へと突き出す。

「僕達が腐った正義を変えてみせる」

レイドは全力を込めた拳を猪獣人に浴びせながら宣言する。どれだけ無責任な宣言でも、誰かが立ち上がらなければ始まらない。

今ここに、騎士団長であるヴァッシュがいれば同じ台詞を吐いていたかもしれないと、レイドは心の中で想像した。

「亜人戦争の名残を受けて設立されたのがハイデルヴェルグ騎士団だ。僕達が行っているのは治安維持だけじゃない。維持すべき治安に穴があれば、それを修正する為に動く」

全体重を載せた拳によって、背に聳えたつ魔鉱石の元まで突き飛ばされた猪獣人は、カハッコホツと血反吐を吐きながら言葉を発する。

「どいつもこいつもおせえんだよ。お前みたいな奴が、もっと前からいたら……もっと早くに来てくれていたら」

今まで自分を支えていた歪んだ柱を壊された猪獣人は涙を流し、

「あんな奴らに手を貸しちまう事も無かったのに……自分のツケを払う事すら出来ねえなんて……俺だって分かってたよ。昔の出来事を今の聖都のせいにしちまうなんて……結局、八つ当たりでしか無い事ぐらい……、」

「畜生。その減らず口が嘘にならないように、せいぜい頑張りやがれ」

二度目の死を迎えた。

元々、限界を超えていたであろう体が活動を止めたのだ。

プルチネイラの呆れた声と共に一筋の閃光が降り注ぎ、レイドの周囲を覆うように無数の穴が空いた。

戦力差は歴然。

だが、レイドは鬼の形相を崩さず見えない敵に向けて敵意を注ぎ続ける。

『良い目になったねえ』

覇気とは違う、禍々しい狂気のようなものが眼圧となってレイドに襲い掛かった。

威嚇にも似たそれは、獲物の気が緩む隙を伺う蛇のように食らいついてくる。ただ、プルチネイラが意識を注いでいるだけなのに、金縛りに合ったかのようにレイドは全身が痺れるのを感じながらも標的から目を逸らさない。逸らせない。逸らして堪えるものか。

「何やってんだ、反則野郎！ てめえが攻めずにどうする!？」

レナの責める声が聞こえる。いや、悲鳴に近い。

三叉槍によって絡め取られた迅槍が、弧を描いてロードの足元に落ちたからだ。虚しい反響音が勝敗の審判を決めるかのように大空洞に波紋を呼ぶ。

膝をついて片目を瞑ったレナの首元に三叉槍が差し向けられる。

高台に旋風が吹き荒れる。

バサリ、という音も無く、羽根とは違うものが肩にかかってイリアは眉をひそめた。

(髪の毛?)

それは、あまりにも重量が無さ過ぎて落ちてきたという実感をイリアに与えない。肩にかかった黒髪を見て一瞬、自分のものかと目を疑ったが違う。

これは別のニンゲンの髪の毛だ。

「凄いやなあ。そんだけで俺っちとの契約を終えちまうんだからよ
軽快に放たれた声にイリアは背中に携えていたロッドを両手に持
って構える。」

「その子を離しなさい!」

「別に離しても構わないけど、怪我させちまうぞ?」

返ってきた言葉にイリアは齒軋りする。

声の主は地面から頭三個分ほど浮いていた。上下にゆっくりと浮上と降下を繰り返すその姿は、ふわりと浮いているといった表現が

相応しい。

「御札に封印されていた妖怪って所かしら。何が目的？」

強行突破で殴りに行きたい衝動を抑えながら、イリアは相手の目的を窺う。

「ん〜、まあ色んな盟約に縛られるのが嫌になったつ〜か、そんな感じ？」

「ふざけんのも大概にしなさい」

緊張感すら感じさせない飄々とした態度と曖昧な理由にイリアは顔を歪ませた。

「誤解されてるのは面倒だな。ただ、誤解を解くのはその数倍めんど〜」

声の主は心底、面倒くさそうにイリアへ目を向ける。

その姿は、一見すれば獣人のそれと変わらない外見だった。

鳥のような細い脚をもちながら人間の骨格も有した五本足。無数の羽根に覆われた二枚の翼羽と嘴クチバシが特徴的な頭頂部。全身にはビッシリと黒い羽毛が纏わりついている。

衣服は東方の出で立ちで修道着のようなものの上に何重にも羽織られた着物を着込んでいる。更に、首元には髑髏の頭を紐で通した悪趣味というよりかは不気味な装飾品を召していた。

他にも細かな装飾品をじゃらつかせていたが、それよりも特徴的なのは、今は鞘に納められているが肩にぶら下げた刀と、広げれば人一人は隠し切れるであろう大きな扇子を着物の帯の部分に引っ掛けてある事だろう。

「あなた。魔導獣まどうじゅうなの？」

慎重な声色で問いかける。

この世には魔人以外にも魔力を扱える存在がいる。

魔力に耐性を持ち、体内に溜め込んだ魔力を利用できる動物達、《魔導獣》だ。その数は非常に少なく、動物が魔導獣となる経過は不明とされているが、大半は魔力に強い影響を受けて突然変異で生まれるものらしい。

「そういう風に呼ばれてるなあ。正確にはここの地主なんだけどよ」
力加減を間違えたら羽毛ごと引き千切ってしまいそうな鋭い鉤爪で顔を掻きながら、鴉天狗は返す。

敵意は無いのだろうか？ 野太い声だが非常にのんびりとした口調だ。

「守護獣とでも呼べば良いのかしら？」

「まあ、そんな感じ」

適当に言っただけの鴉天狗にイリアは、

「嘘仰い。この地主である守護獣なら、今の現状に呑気に構えるなんて有り得ない」

はつきりと矛盾を突きつけて言い返す。

守護獣とは言葉通り、何かを守護する獣である。そして今、この地主と名乗った鴉天狗は所有者として、この山岳地帯を守護すべき存在ではなかるうか。

「うんにゃ。何を言ってるのかサッパリなんだけど、俺っちが眠ってる間に何があったってんだ？」

「は？」

初めて、怪訝な表情を浮かべた鴉天狗にイリアも釣られて怪訝な顔をする。

鴉天狗は、今ここで起きている事態を知らないのだろうか？ 魔力の異常発生。山賊とその裏に潜む何か。その他諸々、あらゆる問題も騒ぎも知らないというのか？

「俺っちが起きたのはついさっき。無意識下の内に契約者を助けたみたいだが……意識を取り戻したのはついさっきなんだよな」

目を細めて鴉天狗は遠くを眺める。景色を眺めるには丁度良い高台だ。

「だから、何でここが荒れ果ててんのかさっぱり。村も無くなっちゃまってるしよ」

現状を把握したのか鴉天狗の表情が変わる。

「ここで長話をしてもし方がないわね。簡単な確認だけさせて」

「何だよ？」

「あなたは敵？ 味方？ その子に危害を加えるつもりは一切無いの？」

「俺っちの今の契約者は、この娘だよ。危害は加えないし、むしろ最優先に守護するべき対象。そして、土地を汚す奴等は俺っちの敵で土地を育む奴等は俺っちの味方」

鴉天狗の言葉に引つ掛かる部分が幾つかあったが、イリアはそれらを呑み込む。

「ねえ、この土地を守りたいなら私に協力して」

「つまり言い換えれば、俺っちに協力してくれる訳？」

「そうとも言える。時間が惜しいから、さっさと用件だけ話すわ」

得体の知れぬ相手を前にイリアは交渉を開始した。

膝をついて片目を瞑ったレナの首元に三叉槍が差し向けられている。

あのレナでさえ、半ば諦めたように、死を覚悟した目で冷たい顔をしたロードを見上げている。

「あつた！ これで魔力供給だけを行える！」

緊迫した場の状況を変えたのは意外な人物からの喜色に溢れた叫びだった。

黒々しい紫色に発光していた魔鉱石が突然、周囲の魔力を吸い上げ出し、一帯を覆い尽くしていた魔力の源が絶たれた。

ヴィロ教授は裏に隠れていた訳ではなく、魔鉱石についてあれこれ調べを入れていたのだろう。そして、どうやってかは分からないが魔鉱石の循環機能を停止する方法を見つけたようだ。

「隙あり！」

「チッ」

ロードの集中が魔鉱石の異変へ傾いたことにより、レナは速度の鈍った三叉槍を屈んでやり過ごし、力任せに片手で三叉槍を掴み取る。更に空いた片手で地面に落ちた迅槍を掬い取り、形成は逆転した。

「俺の勝ちだ」

勝ち誇った声をあげながら、レナがロードの首元に迅槍を突き付ける。

「……馬鹿か、お前達は」

ロードは表情に陰りを見せながら呟いた。

「ああ？ 良く聞こえねえなあ」

「ほら、やって来るぞ」

嘲笑と共に吐き捨てられた言葉はレナには届かなかった。

大空洞の外周。真つ暗闇の地中で唸りをあげていた化物達が襲ってきたのだ。レイドはヴィロを抱えて跳躍。急襲から逃れる。

『僕はあくまでも舞台裏。直接、相手をするのは僕じゃなくてこいつらね』

跳躍するレイドに向けて、プルチネイラのテレパシーのような言葉が脳に響いてきた。

放出が止まっても残った魔力が今も漂っている。それを利用しているのだろう。

『どうやって魔鉱石を止めたかは知らないけど、結果的に魔鉱石を嫌がって近付いてこなかった連中をわざわざ引き入れちゃった訳だ』

プルチネイラの言葉にレイドは耳を貸さない。

騎士道精神・熊の型・爆^{はく}洞^{どう}掌^{しょう}

前方で大口を開けた化物に突っ込む形で、レイドは掌を化物に押し当てた。

龍脈によつて凝縮した風を、魔力で掌に収めながら放つたのだ。

頭頂部にクレーターのような穴が開き、化物は奇声をあげながら落下していく。その姿には目も暮れずにレイドは他の化物の相手に専念した。

「クツ、剣があれば」

サーベルは猪獣人との戦いで壊してしまった。ストックは持ち合わせていない。

落下する感覚を肌で感じながら、レイドは真下に待っている化物達に背筋が凍る。レイドの不完全な翼では、これ以上の飛行は困難。

万事休すだ。

「（食欲並びにそれに準ずる行動を廃棄）」

大空洞に男性とも女性とも判別のつかない機械音声が響いた。

「（優先順位AをBに変更。生命活動の維持の為、休眠に移行せよ）」

大口を開いていた化物達が突然、静まり出し、地中に体を潜らせて立ち去っていく。

レイドは出来るだけ凹凸の少ない足場に降り立ちながら、声の主を探した。

「ロア！」

「やれやれ。ギリギリ間に合ったか」

全身をローブで包み隠した上で更にマスクで顔を隠している人物。ロアだ。

どうやら、彼は狼以外にも命令信号を送ることが出来るらしい。レイドには何を言っていたのかサッパリなので詳しくは分からないが……、これで完全に形勢は覆された。

「魔導獣を操つただと!?!」

ロードが少し驚いたようにしかめっ面をした。三叉槍を振り回して、レナと距離を取りながら叫ぶ。

「お前は何者だ！」

声を荒げながら、ロードはロアに対して叫ぶ。

「単なる用心棒さ」

機械越しでも分かる、何処か馬鹿にした口調でロアは返した。その姿に、ロードは今までの余裕が嘘のように全身を小刻みに震わせながら眉間に皺を寄せる。崩れた顔の上で銀髪が揺れる。

「この人数相手にまだ戦いますか？」

プルチネイラの存在にも気を配りながら、レイドは適当に地面に落ちていた武器を手にとって構えた。

古ぼけた刀である。どうやら、地面には幾つもの刀剣類が隠されているらしい。偶然、土を被って隠されていたのか意図的に隠されていたものなのかは不明だが、古ぼけて錆びた刃は年代物のような気がする。

レイドの言葉にロードは三叉槍を擡^{もた}げて魔法を放つ。先端部分から放たれた雷撃がレナを後退させた。

「人数に差がある？ 笑わせてくれる」

またもや、地鳴りが響いてきた。しかし、今度は下からではなく上から。

「ヴェイン！」

ロードの叫びと同時に、天井が崩壊し、強引に何か降り立ってきた。コウモリのような翼に鋭利な爪を頂く二本足。研ぎ澄まされた眼光に大きな尻尾と、その大きさに対応した大きな体躯。

ワイバーン
飛竜だ。

爪を立てて強引に天井へ衝撃を加えたのか。崩された土砂が降り注ぎ、粉塵が視界を遮る。

「クツ……」

これがレナの言っていた魔導獣なのだろうか。レイドは開けてきた視界に目を凝らした。

天井が崩れたものの不幸中の幸いか。ヴィロもロアも無事だ。レナもきつと無事だろう。暗闇の中にあつた大空洞に光が差し込んでくる。

「さっきまでの威勢の良さは何処へ行った？」

ロードが、体を低くしたヴェインの背中に乗り上がる。

魔人でありながら物理的な正面对決でレナと張り合っていたのは、魔力によって肉体を強化していたからだろう。それが無くなった今、ロードは不利な立場にいる筈だが、飛竜フイバーンの存在が遥かに大きい。

「てめえ、その飛竜をこっちに寄越しやがれ」

「断る。ヴェインは牙竜国の所有物ではない」

ヴェインというのは飛竜の名前だろうか？

むんず、と長い首をあげながら飛竜が口を大きく開ける。口の中が明滅し、ガス状のプレスが吐き出される。

赤でも青でもなく、黒色をした炎がレイド達を襲った。どういう原理か不明だが、物質そのものを焼いていく炎は足場を削るように燃え上がっていく。

（魔力？）

レイドは、飛竜から放たれたプレスが引き起こした現象に対して違和感を覚えた。

「レナ、一旦離れる！」

尚も攻めに徹しようとするレナに離れるよう伝えてから、レイドは地面を蹴って背後へ移動する。

先程まで、レイドが居た場所に火の弾が直撃し、被弾した周囲を真っ黒に焦がして、燃やしていく。

後退したレイドだったが、手に持っていた刀の柄の部分までが黒く変色していた。火の弾を避けた時、火花が燃え移ったのだらう。

「うわっ!？」

まるで毒が侵食するかのように溶解していく刀に、ギョっとしてレイドは遠くへ投げ飛ばした。

みるみるうちに刀は形状を失い、黒煙となって宙に散漫する。

「これは魔力を直接、叩き込んでいるのでしょうか？」

ヴィロが脂汗を滲ませながら推測の言葉を唱える。

「んなこたあ、とつくのとうに分かってんだよ。ありや魔導獣だ」

忌々しそうに言い放つレナに、背後で静かに飛竜を見上げていた
ロアが頷いた。

「魔導獣。突然変異で魔力に適應した肉体を持つ事に成功した生き
物達の事だが、あれは別格だな」

二本足で飛び上がった飛竜は邪魔者を薙ぎ払うようにブレスを吐
く。

真っ黒な炎柱が数十本とあがり、高熱の壁を作り出す。プルチネ
イラの人形が使っていた炎の鞭と特性は似ているように思えるが、
こちらの方が数段厄介な気がする。

炎熱だの、酸素を吸い上げるだの、そういった概念を抜きにして
純粋に魔力の桁が違う。触れただけで火傷と同時に魔力が全身を毒
してしまいそうだ。

その上、折角、魔鉱石が吸い取ってくれた魔力が再度、周囲には
撒かれてしまった。

「……あの炎。厄介ったらありやしねえ」

忌々しそうに語るレナは包帯の巻かれた腕とは別の腕を動かして、
迅槍を威嚇するように振り回す。

竜人は自然治癒力においては他種族に群を抜いている。

例えば、レイドは前日から戦い続けだろうと倒れていないし、次の戦いに疲労を残していない。

となれば、竜人一筋の血を引いているレナの治癒力はレイド以上のものであり、火傷程度なら一晩休めば治るものだが……。

炎に含まれた魔力が治癒を妨害しているのだろう。刺さった相手の体から鏃やじりが簡単に引き抜けないようになっていたのと同じようなもの。

いや、じわじわと追い詰めていく蛇の毒牙と言ってもいいだろう。

「だが、どうやって近付く？」

ロアが、手ぶらのレイドに自分の剣を渡しながら尋ねる。
護身用に使っているのか、自分よりも専門の人間に渡した方が良いと判断したのだろう。レイドは、ロアから手渡された剣の形状を眺める。どちらかと言えば切るより突く事を専門にしたエストックに似ているが、普段使っているサーベルと大差は無い。

「無理に近付こうとすると危険です。逃げる手も――」

「ああ！？ 俺は逃げねーぞ。あいつ取り捕まえなきゃ気が済まねえ」

最後まで言わずに、レイドの言葉を遮ったレナは飛んできた火弾を避けながら続けて叫ぶ。

「畜生。これじゃ罅ひまが開かない。俺に提案があるから従いやがれ！」

喋っている間にも飛竜は勢いを止めない。

まるで、爆心地の跡のようになっていく穴ぼこだらけの地面を駆け走り、レイドはレナに指示通りにヴィロを大空洞の端まで避難させてから、自分の持ち場へ移動する。

丁度、ロアが反対側に移動しているのが見えた。

そんな中、レナは大空洞の中央。飛竜がいる場所へと猪突猛進していく。

飛竜は背中に立っているロードを守るかのように、近付いてくる相手を優先して狙ってきた。昂ぶっていた興奮を吐き出すかのように、口の中で轟々と燃え上がるブレスを放出する。

「それを待ってたんだよ！」

迅槍じゆんそうを地面に深々と突き刺しながら、レナが叫んだ。

叫ぶと同時に、彼女の顔面手前を中心にして空気の流れが操作される。無風の空間がレナによって編み出され、空気が散漫しないように隔絶される。

そして、燃え上がっていた全ての炎と熱気がレナの口元へ吸い上げられ、竜巻状の気流が生み出される。

竜巻状の気流は熱に押されるように上昇し、飛竜に向けて放たれた。

更に、ロアが両手を前方に翳し、魔法らしきものを発動する。ロアの両手から突風が巻き起こり、砂埃を撒き散らしながら一つの形

となる。

それは龍だった。東方に伝わる大蛇たいじゃのような長い体躯を持ち得た龍。それを模した風の奔流ほんりゅうが飛竜とレナの間割り込む。

交差するかのように三つの力がぶつかり合い、他のエネルギーを食ひ荒らす。

「魔法つてのは便利だよなア？ 好き勝手にやりたい放題、法則も変えたい放題だ。だがよ、魔法で引き起こした現象が”こつちの世界”の干渉を受けない訳じゃないだろ？」

こつちの世界、というのは恐らく龍脈りゅうみやくの事だろう。つまり、自然界の法則に足をつっ込んだ魔法が自然界の干渉を受けるのも当然という理論だ。

何となくだがレナが、これからやろうとしている。もしくは既に行動に移している作戦の大体が呑み込めた。

その光景をレイドは、じっと見つめる。今は一瞬の間を見逃さず、自分の領分で自分の本領を際限なく発揮する機会を窺う時だ。

失敗は許されない。

【蒼の巻】 魔鉱石 第18話 火炎旋風

その光景をレイドは、じっと見つめる。今は一瞬の間を見逃さず、自分の領分で自分の本領を際限なく発揮する機会を窺う時だ。

「ヴェイン、離れる！」

ロードが叫ぶ。

変化が訪れた。

豪快な音をあげながら凝縮されて一点に集中した熱、気流、その他諸々が纏めて上昇する。三つの大きな力が衝突し、一つの奔流を作り出す。

「かえんせんぱう火炎旋風……」

大げさな名前だが、周囲の空気を吸うだけ吸って局地的な上昇気流を発生させる、れっきとした自然現象である。

それをレナは龍脈の才を利用して再現してみせた。魔法で創られた風と炎さえも、龍脈の力で捻じ伏せ、コントロールしたのだ。

お互いを食い合うように絡み合いながら、飛竜の黒い炎とロアの魔法の風。そしてレナの自然界の流れを集約した力が一体化し、上昇気流によって発生した大きな竜巻が轟々と唸りをあげる。

高みへと昇るかのように上昇していく力の動きは、既に一つの方

向へ標準を向けるように龍脈で調整されていた。

「真っ黒に焦げちまいな！」

最早、熱線に近い形となった竜巻が頭上高くにいる飛竜の腹を突き抜けていく。

竜巻が周囲のもの全てを巻き込み焼却する音。飛竜が腹を貫かれた痛みに悲鳴をあげる音。そして、

「ヴェイン！！」

今までのすまし顔が嘘のように、顔を崩しながらロードが叫ぶ音が大空洞に木霊した。

竜巻に貫かれた飛竜の腹は、血の一滴すら流すことを許されない程に熱に溶かされ、焼け爛れていく。

その体に手を当てながら、ロードは必死に回復の魔法を唱える。

唱えることによって精神を安定させ、魔法を操作しようとしているのだから、その声は震えており余計に焦燥と不安を助長させているように見えた。

今のロードの表情には悪人のそれを一切感じない。人間が誰しも抱くであろう純粋な悲劇の色で塗り固まっていた。

だが、そんな、ロードの姿を見ても尚、レイドの心は揺らぐ、容赦も加減もしない。

「あなた達が何を企んでいるかなんて僕には理解が及ばない。だが、一つだけ言えることがある」

聖王国の陰を知り、今まで自分の信じてきた正義と、守ってきたものに対して疑問を覚えたレイドに、ある意味で道標を遺してくれた山賊達の為にも。これからの聖王国の為にも――

「お前達の野望は絶対に阻止する」

野望というのは少し脚色し過ぎかもしれないと、レイドは心の中で思った。

だが、そこにどんな目的があれば、聖都に危害を加えるのならば、レイドはそれを全力で阻止する。その決意が構えた剣に並々と注がれていく。

騎士道精神・竜の型皆伝・大雪斬たいせつざん

独自で編み出してきた剣技の中でも優れた型をレイドは選んだ。シンプルかつ威力の高い一撃。

前へ一歩踏み出し、剣を両手で構えながら更に勢いを込めて跳躍する。そして、無防備なロードに向けて剣を振り上げた。

「野望……か」

悲壮感を漂わせていたロードが突然、顔色を変えて嘲笑する。

ロードが手に持つ、三叉槍が鋭い輝きを発しながら、レイドへと差し向けられる。元は錫杖の形をしていた三叉槍には特殊な紋様が

刻まれていた。

思うと、ローブに描かれた紋様といい、それ自体が魔法陣としての働きをしていたのではないか？

もし、そうだとしたら肉体強化を維持し続けていた理由も、三叉槍が鋭い輝きを放ちながら異様なオーラを漂わせている訳にも納得がいく。

結論から言ってしまうと、レイドはロードの力を過信していた。

レイドの剣とロードの三叉槍が衝突した。

魔法によって強化されている三叉槍は、レイドの剣技でさえも、いとも簡単に相殺してしまう。

「ああ、そうだ。俺には国を敵に回してでも”守りたい野望”がある」

バチバチ、と鋭い音を立てながら三叉槍に加わる力が増す。

「だから、こんな所でくたばる訳にはいかないんだよおおおおお！」

血眼でレイドを睨みつけるロードは怒気と信念の織り交ざった複雑な顔をしていた。

(こいつが強いのは魔力の扱い方に長けているからじゃない……)

レイドはロードの顔を見て察した。その信念が何であれ、ロード

の精神の強さが魔力に大きな影響を与えているのだ。

——だから、こんなにも強い。

「うわあっ!?!」

下から響いてきた複数の悲鳴にレイドは気を取られた。

ロードが放ったのだらう数千本にも枝分かれした雷撃が目にも止まらぬ早さで、レナ達を襲ったのだ。全身が痺れている程度らしく、致命傷を負う程では無さそうだが……。

レナ達の心配をしていたレイドに鋭い痛みが迸った。1秒足らずで流れた電流が、レイドの全身を麻痺させたのだ。

「ヴェインの借りは必ず返す」

そう言い残して、身動きの取れなくなったレイドを蹴り飛ばし、ロードは飛竜の背中に乗って空高くへと飛んで行ってしまふ。

ロードが飛竜から手を離れたあの時、既に飛竜の治療は終わっていたようだ。

(待………て………)

言葉が出ない。

代わりに落ちていく感覚にレイドは神経を集中した。

咄嗟に着地の体勢に入る。出来るだけ衝撃を抑え、地面との衝突

に備える。

大量の砂埃を巻き上げながら、レイドは地面に激突した。

手を盾にして頭を守る。幸運にも骨折はしなかったが、言いようのない痛みが走る。

「チツ、逃がしたか」

いち早く立ち上がったレナが舌打ちを零した。

「とにかく、今はここから離れるぞ」

ロアが、フラフラと立ち上がりながら言う。ロードが手当たり次第に上空から爆撃しているのか大きな爆発音と共に大空洞が崩壊してきている。

このままでは全員、下敷きだ。

「ヴィロ教授。立てますか？」

腰を抜かしているヴィロを何とか立たせながら、レイドは痛みを堪えて走り出す。

崩壊していく大空洞に残された、猪獣人の亡骸を見捨てるという心の痛みを堪えながら――

【蒼の巻】 魔鉱石 第19話 ラティール

その頃、山賊に取り押さえられた者達の多くが收容されている場所で一人の男が瞑想していた。薄暗い空間の中で、蠟燭の灯りだけを頼りに神経を集中させていた。

その男の名をラティール・フィールと言う。

頭髮一つ無い代わりに全身を艶のある鱗に覆われた蜥蜴獣人だ。

自由国バーロスのギルドに所属する彼には一つの任務が課せられていた。ハロルド・ヴァリスタという少年の護衛である。が、護衛するどころか今こうして山賊達に捕えられてしまっている。

だから、彼は瞑想に浸り、脱獄のチャンスを見計らっていた。まさか、助けが来るはずもないと考えていた彼は自力で脱出し、ハロルドを助けようと考えていた。

「お勤めご苦労さん」

まさか、と言うからには予想外の事態が発生したことを意味している。

看守の役目を果たしていた山賊が悲鳴一つあげずに倒れた。ガチャリと錠前の音が聞こえ、ドアが開いた。

そこから差しのべられた手にラティールは僅かに眉をひそめる。警戒を解いてはいけない。常に最悪なケースを考えて行動せよ。

「お前は誰だ？」

久しぶりに発した声。しゃがれた声。何時振りかにか放った言葉は相手に伝わってくれたようだ。

「あなたがラテイルさんかしら？ 私の名前はイリア・ホーネット。騎士団の人間よ」

視線をあげる。そこにはツインテールが特徴的な女性が立っていた。

「如何にも、俺がラテイル・フィールだが……」

「まあ、積もる話は置いといて、ハロルド君は無事。さっさと逃げ出しましょう」

淡々と告げるイリアの背後には、鴉天狗と一人の少女がいた。

ラテイルは、ハロルドの名前が出たことに内心ホツとしつつも警戒を更に強める。それほどに、ハロルドの存在は彼にとっていや、彼の所属するギルドにとって大きい。

「何が目的だ？」

ラテイルは疑いの目をイリアという女にかける。

「何も企んでなんかないわよ」

肩をすくめるイリアの脇で、鴉天狗が扇子を大きく広げた。廊下

に均等に並べられた牢屋が次々と解放されていく。どんな手を使つたのかはラテイルには分からないが、見渡せる限り全ての牢屋の扉が開かれる。

「さあ、別に残るって言うなら放っておくけど、手伝ってくれるなら手伝って」

囚人達……ただの一般人であろう者達が喜びを露にしながら外へ出る。これといって罪を負った人間はいそくに無い。理不尽な理由を突き付けられ、ここに閉じ込められていたのだろう。

「俺は何をすればいい？」

その光景に感化されたラテイルは準備運動程度に首を捻りながらイリアに言った。

【蒼の巻】 魔鉱石 第20話 闘争逃走

予想以上の堅物にイリアは内心、面食っていた。この手の人間は苦手なのだ。

しかし、説得できてしまえば、それ相応の信頼を置くことが出来る性格なのも確かである。

「この人数。流石に私だけじゃ動かせないのよね」

イリアは、如何にも義理堅そうな蜥蜴。赤色というよりは赤土色の鱗に全身を覆われた巨漢。ハロルドが言った通りの外見と、ほぼ一致している蜥蜴獣人に言う。

「だからその気があるなら、ちょっと手伝って」

座禅を組んで、何かを待ち侘びるかのように構えを取っているラテイルがイリアの言葉に呼応して立ち上がった。

今まで座っていたというのに巨漢と一目で分かるその身長は改めて見ても圧巻だ。

「了解しだ」

動揺すら滲み出ぬ、無駄のない一言。

並々溢れる存在感を振り翳しながら、ラテイルは歡喜の渦に吞まれている囚人達を現実に引き戻した。

ラテイルの存在感に場が静まり返る。

「人間って奴ア、面白いな」

その姿を見ながら呑気に呟く鴉天狗を横目に、イリアも囚われていた人達を先導する為に動き出した。

ちなみに、イリアが鴉天狗と交渉を開始し、囚人の大半が囚われている監獄まで辿り着くまでの時間はおよそ二分であった。

「流石の俺っちでも、全員を一気に運ぶのは無理だぜ」

癖なのだろうか。鴉天狗が鋭い鉤爪で顔を搔きながら、廊下の先から先までを眺める。

たった二分で何処に囚人がいるのかを把握し、そこまで飛ぶというのは到底、無理に思える。実際、イリアも半信半疑だった。

「さっきも思っただけけど、あれって安全性は保障されてる訳？」

それを実現したのが、今イリアが目線ではなく、口と耳だけで会話している鴉天狗だ。

相も変わらず、地面から少し浮遊している鴉天狗は欠伸をしなが
ら、

「安全の保障された人生なんてつまらん。時間より安全を求めるなら、その足で逃げればいいじゃん」

不真面目そうに見えて至極、真剣な眼差しをイリアに向けながら結論を述べた。

「じゃあ、いざって時にはあなたの力をお借りするわ。ここからは私が動く」

「はいはい」

気怠そうに言葉を切った鴉天狗を他所に、イリアはラテイルと共に囚人達を並べせた。囚人達は老若男女問わず、健康状態が悪いように思える。これだけ魔力の濃い場所に閉じ込められていたら当然か。一気に駆け抜けて逃げるような手段は取れそうにない。

「俺が背後をカバーする。お前ば、前線に立ってぐれ」

しゃがれた声で、ラテイルが指示した。

独特な口調を聞けば一瞬で分かると、ハロルドは言っていたが、確かに、ラテイルの口調は一風変わっている。

もしかしたら、クレアシオという大陸とは更に違う。異国の人間なのかもしれない。南方や東方の海の先には小さな島が点在すると、イリアは聞いた事がある。

「それじゃ、行くとしますか」

準備運動にロッドをグルグルと回しながら、イリアは燭台が僅かに照らす廊下を先導して進み始めた。

程無くして異変を嗅ぎ付けた山賊達がやってくる。

背後からもやってくる。

挟み撃ちにして叩く算段なのだろう。中央に戦えない者達を並べて正解だった。

イリアは目の前からやってきた山賊に予め組んでおいた魔法を唱える。印を刻んだ指の先から魔法の弾丸が放たれ、山賊を捕まえた。

蔦蔓を絡めて作った木製の弾丸だ。それは山賊の体に命中するや否や爆発し、山賊をネットのように拡散した植物が雁字搦めにする。

言葉通り、捕まえる為だけに特化した弾丸だ。

それを二発、三発と数瞬^{すんぽん}で飛ばしながら、迫ってきていた山賊をあらかじめ片づけると、余裕の笑みを浮かべてイリアは手を弾丸に見立て、硝煙を消すように指に息を吹きかけた。

ラテイルは顔色一つ変えずに山賊が近付いてくるのを待っていた。その数は三人。尻尾を振って、すぐ後ろで怯えている民間人に下がっているように伝えながら昂る感情を抑えて右手を前に出す。

僅かに自分の右手が震えるのをラテイルは感じた。

この腕を伝う振動は武者震いからきているのか？

明らかかな敵意が自分に向けられているが故の恐怖か？

すぐ傍で震えている者達を守らねばならぬという責任感からか？

どうでもいい考えが、ラティールの脳裏を駆け巡り、一秒が一〇秒のような長さに感じられた。それほどに今のラティールの精神は研ぎ澄まされ、周りの背景が遅れて見える。

「フンッ！」

気合を入れた右拳を突き出す。

確かな手応え。感触。拳を伝ってやってくる衝撃。

ナイフを振り上げていた山賊が、ラティールの拳に吹き飛ばされた。背後で待機していた山賊を巻き込んで、かなりの距離を飛んでいく。

右拳を突き出した勢いをそのままに地面を蹴った。突き上げた膝を三人目の山賊の顎にお見舞いする。

痛い。

山賊の顎を突き上げた膝も、その衝撃と重量を受けて悲鳴をあげていた。どんなに強靱で艶やかな鱗に覆われていようと、金属ほど硬くはない。

むしろ、柔らかいものが割れにくいように硬ければ硬いほど、受ける衝撃は増す。

鱗に浮かび上がる無数の筋から血が滲み出した。膝の皿が割れたのだ。

しかし、ラテイルは怯まない。顔色一つ変えず、それすらも修行に置き換えて教訓とする。

突き上げられた山賊が、頭から天井に衝突し、情けない声をあげながら地べたに落ちる。

ひとまず、訪れた静寂にラテイルは息をゆっくりと吸って吐き出す。

両手を下ろし、姿勢は直立に。両目を閉じて、目の前の敵を倒した事による高揚を落ち着かせる。さながら、祈りを捧げ続ける僧侶と、戦陣を前に緊張を露にする武士を合わせたような、独特な存在感をラテイルは醸し出していた。

安全が確認された後、前線に立っていたイリアが歩き始める。

それに従って、ラテイルも歩き出した。

【蒼の巻】 魔鉱石 第21話 契約獣

「全く。よく作ったものよね」

イリアは石造りの階段を降りながら独り言を吐き出した。

階段は一段一段の高さが並のそれとは一味違う。山岳地帯であるせいか、落差の激しい道は体力をつけているイリアでさえ、キツいと感じてしまう。

これを民間人。しかも衰弱状態の者達に歩かせるのは駄目だ。

どうしてもペースは落ちてしまいが、イリアは所々で休憩を挟むように全員の動きを纏めていた。

「やっぱり、俺の力が必要なんじゃないのか？」

これ見よがしに扇子を振るう鴉天狗をイリアは無視する。

「こんなんで野垂死のたれじにするようなら、こいつだけ連れて飛んでくわ」

遠慮の無い指摘をしながら、鴉天狗は横を歩いている少女へと目を向けた。

先程までと何ら変わらないコトネの姿がそこにはある。違いがあるとすれば、大事そうに持っていたお札が今は光を失っている事だろうか。

「私は……」

「まあ、俺っちは契約者のご意思にお任せしますがね」

鴉天狗とコトネの関係は、例えるなら押し弱い女性を無理矢理、誘う男性のようなものであり、見ていて気分の良いものではないが、イリアはぐつと堪えた。

この鴉天狗が、自分達をここまで導いてくれたのは確かなのだ。そして、コトネを曲がりなりにも守っているという事も。

「契約って、両者の同意が無ければ成立しないものじゃないの？」

イリアは階段を降りる足を止めずに、鴉天狗に尋ねた。

気が遠くなりそうな段数を歩いていると、無駄話の一つや二つしたくなる。

「両者の同意っていうか、元より決まっていた決まりみたいなもんかねえ」

おもむろに鴉天狗は返す。

「俺っちは、俺っちを扱える魔導師に先祖代々仕えてきた。その代が今はコトネに変わった。ただ、それだけの事ですぜ」

ふざけた口調の鴉獣人に、確かな不快感を抱く。それでは、本人の同意も無しに彼らの関係は成立している事になるではないか。

浮かない顔をして、ただただ会話を流しているようにさえ思える

コトネは今、何を思い歩いているの
だろうか？ 鴉天狗の存在は、彼女の歳で背負うには重過ぎる。

「契約者と与えられた大地を守護するのが俺たちの使命。それ以外の制約は与えられていない。魔導獣を飼ひ馴らそうなんて、人間の考えた浅知恵に俺たちは乗せられんのだ」

魔導獣。魔力に耐性を持った獣。魔力を駆使することを知った獣。

それは、魔人、獣人、竜人の三種族の対立において非常に重要な意味を持っている存在だ。魔人にしか魔法を扱う事は出来ないという前提をすつ飛ばした存在なのだ。

単純な話、ただ持っているだけで強い。手元に置いておくだけで充分過ぎるほどの力を発揮する。むしろ、その存在に万人が恐怖を成すようなもの。

ともすれば、人間がその力を手中に収めなくなるのは当たり前前の話である。

力があるものは、いずれ狩られてしまうもの。それを恐れた魔導獣達は人間達と契約を交わし、力に制約をかけられた。その代わりに、魔導獣達はそれぞれに土地を与えられ、その所有権を得る。

こついつた魔導獣は契約獣とも呼ぶ。

契約を交わす魔導獣は、他の魔導獣達よりも更に強い力と知恵を持ち合わせている事が多い。

特に亜人戦争時には、契約獣の戦力が戦況を一変させ、一瞬で全てを焦土に変えた契約獣さえ存在したと云われている。

「じゃあ、あなたは守護の対象を守れば後は何でもするっていうの？」

イリアは恐々としながら鴉天狗に聞く。

この鴉天狗こそが契約獣なのだ。イリアも、実物を見るのは初めてだが恐怖が全身を蝕む。

「俺っちが、そんな気の狂った奴に見える？」

やれやれと言った様子で、鴉天狗は言葉を紡いだ。

「お前らの、そういう臆病な態度が気に食わない。もう慣れちゃったからどうだって良いけどな。契約者であるコトネに対して何らかの危害を加えない限り、むやみやたらに何かを仕出かすなんて面倒臭い。俺っちが求めるのは平凡さ」

鴉天狗の言葉にイリアは口をつぐむ。

返す言葉が見つからなかった訳では無い。

会話を止める理由が目の前に見えてきたのだ。階段の終点が近付いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9320x/>

クローズファンタジー 蒼の巻 第1章

2012年1月1日01時01分発行